

マクルス全集

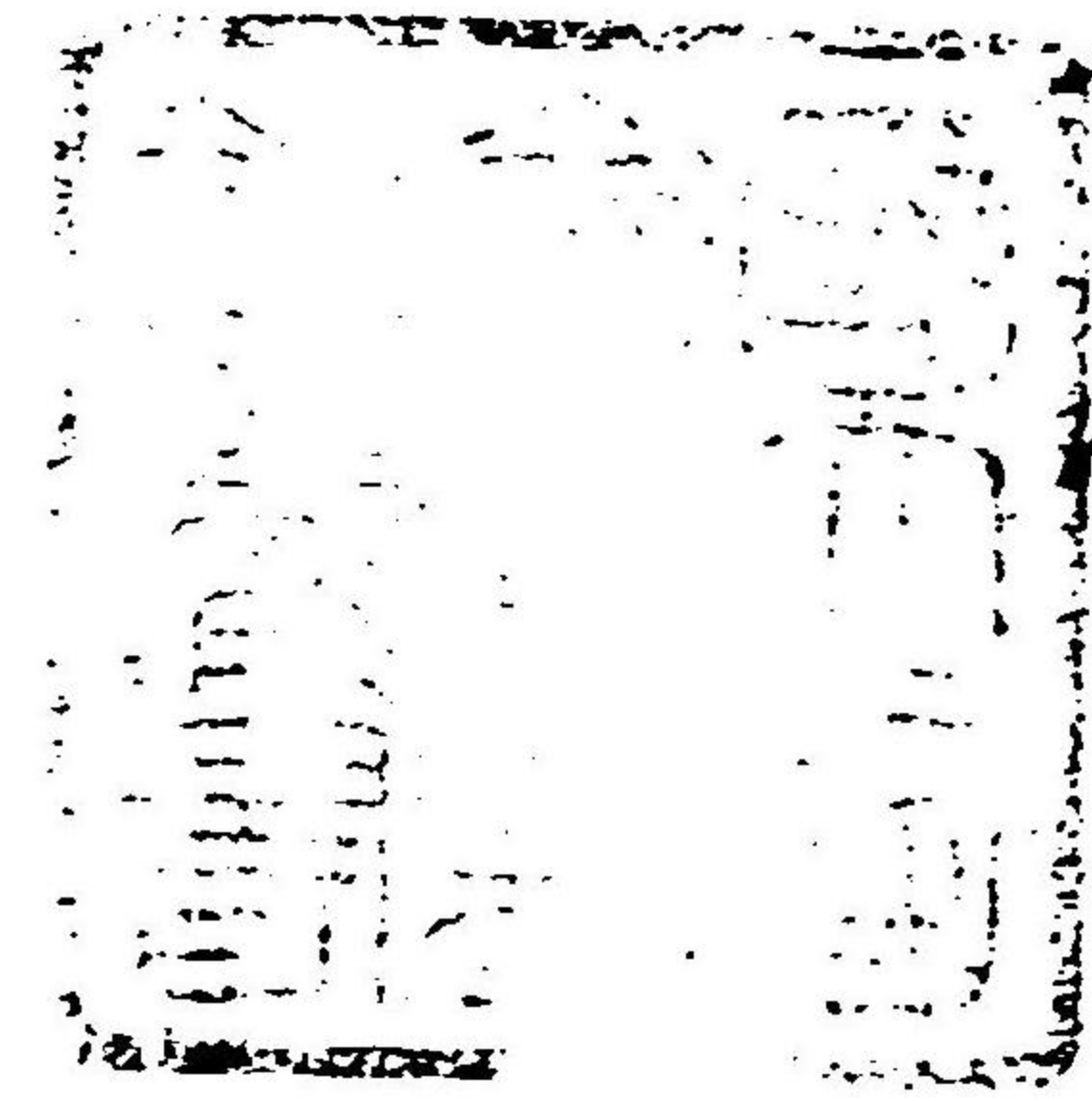
高島素之譯

資本論 第三卷

第三冊

株式會社大鐙閣藏版





# 資本論

經濟學の批評

第三卷 資本制生産の總行程



# 資本論

第三卷 第三册 目次

第五篇 利潤の利子及び企業利得への

分割。利子を生ずる資本……………一—頁

第二十九章 銀行資本の成分……………一—

第三十章 貨幣資本及び現實的資本I(商業上の

信用。産業循環の種々なる段階に於

ける貨幣資本及び現實的資本)……………元

第三十一章 貨幣資本及び現實的資本II(貨幣の貸

付資本化——現存貨幣の量より獨立

目次



せる、貸付資本の量——收入又は資本の、貸付資本に轉化すべき貨幣への轉化)……………三六

第三十二章 貨幣資本及び現實的資本Ⅲ(現實的資本の遊離に基く貸付資本の形成——

總説——結論)……………三二

第三十三章 信用制度の下に於ける流通要具……………二七

第三十四章 通貨原理及び一八四四年の英國

銀行立法……………一八七

第三十五章 貴金屬及び爲替相場……………三六

(一) 金準備の運動……………三八

(二) 爲替相場……………二九

第三十六章 資本前期の状態……………二九三

第六篇 餘剩利潤の地代化……………三九—四六

第三十七章 緒論……………三九

第三十八章 對差的地代。總論……………三九七

第三十九章 對差的地代の第一形態(對差的地代Ⅰ)……………四六



資本論 第三卷 第三册 目次終

第五篇 利潤の利子及び企業利得への  
分割。利子を生ずる資本

第二十九章 銀行資本の成分

之れより、銀行資本は何より成るかを尙立入つて考察する必要がある。

フライトソン其他の學者が、流通要具としての貨幣と支拂要具としての（また金の流出が問題たる限り、世界貨幣としての）貨幣との區別を、通貨と資本との區別に轉化せることは、上段に見た通りである。

斯くの如き混同に於て資本の演ずる奇異なる役割に依り、此の銀行業者經濟學は、かの啓蒙經濟學が貨幣は資本にあらずと説いたのと同様の入念を以て貨幣は實際のところ最顯著なる資本なりと説くに至るのである。

然るに、貨幣資本なるものは元來、他の資本形態たる商品資本及び生産資本より區別せる、資本の經過的一形態たるに過ぎぬ者であるに拘らず、右の主張は、之を利



子を生ずる資本と云ふ意味の貨幣より成る資本と混同するものであることは後段の研究に示す通りである。

銀行資本なるものは、(一)正金、即ち金貨又は紙幣、及(二)有價證券より成る。有價證券はまた之れを二個の部分に區別することが出来る。即ち一は商業證券たる手形(之は有限的の者であつて、一定の期間を経たるとき満期となる。而して其割引は、銀行業者の眞の營業を成すものである)、他は公債證券、藏券、有らゆる種類の株券等の如き公的證券約して言へば、手形とは本質的に異なる利付證券である。不動産抵當證書もまた此後者に算入し得る。之等の素材的要素より成る資本は又、銀行業者の營業資本その者と、彼れの銀行運用資本たり借受資本たる預金とに區別される。また銀行券を發行する銀行の場合になると、之等の物に尙銀行券が加はつて来る。預金及び銀行券は、今のところ之れを考慮に入れない。銀行業者の資本の現實的諸成分——貨幣、爲替手形、保管證券——が、彼れ自身の資本を代表するか、それとも他人の資本たる預金を代表するかと云ふ事は、之等種々なる要素の上に些の變化も與へないことは明瞭である。彼れが自己所有の資本の

みを以て其業務を營むにしても、又は他から預入された資本のみを以て營むにしても、其組成要素の區分は同一であらう。

利子を生ずる資本と云ふ形態に依つて、總ての一定せる規則正しき貨幣收入はそれが資本に基くと否とに拘らず、一資本の利子として現はるゝこととなる。先づ貨幣收入は利子に轉化する。而して、利子に次いでまた其源泉たるべき資本が現はれ來たるのである。同様に、利子を生ずる資本に依つて、一切の價值額は、それが收入として支出されざる限り、資本として、即ち自己の齎らし得る可能的若しくは現實的なる利子に對立せる元本として現はれるのである。

問題は單純である。假りに、平均利子率が年五パーセントであるとせよ。此の場合、五百磅なる額が利子を生ずる資本に轉化されたとすれば、年二十五磅の利子を生ずるであらう。かくして二十五磅なる總ての固定的年収入は、五百磅なる一資本の利子と見做される。然し之れは、其二十五磅の源泉が單なる所有名義即ち債務請求權に過ぎぬものであるにしろ、または土地などの如き現實の生産要素であるにしろ、兎にかく直接移轉し得る場合か、或は移轉し得るに至る形態を受くる



場合以外には、純粹に幻想的なる一觀念であり、又かゝる觀念として存続するのである。國債及び勞銀を例に擧げよう。

國家は其借受資本に就て、年々一定量の利子を債權者に支拂はねばならぬ。此の場合、債權者は其債務者に解約の申入をなすを得ず、たゞ其請求權を、此請求權に對する所有名義を販賣し得るのみである。資本その者は、國家に依り消費され支出されて最早存在して居らぬ。國家に對する債權者の所有に屬するものは左の通りである。(一) 國家の發行に係る例へば、一百磅の債務證券。(二) 此の債務證券に依つて、彼れは國家の年收入、換言すれば年租稅收入に對する一定額、例へば五磅即ち五パーセントに相當せる請求權を與へられる。(三) 彼れは此一百磅なる債務證券をば、任意に他人に販賣することが出来る。利子率を五パーセントとし加ふるに、國家の擔保あるものと假定する時、此債務證券の所有者たるAは、通常これを一百磅でBなる人に販賣することが出来る。蓋しBから觀れば、一百磅を年五パーセントで貸付けるのも、一百磅を支拂つて年五磅なる貢賦を國家から受けるのも、同じ事であるからである。然し之等すべての場合を通じて、國家の支拂ふ

所の物が其派生體(利子)と見做される所の資本なるものは、幻想的資本たり空資本たるを免れないのである。國家に貸付けられた貨幣額は、總じて最早存在しないと云ふのみではない。それは又資本として支出され放下さるべく計劃されたこともないのである。而して此貨幣額は、單に資本として放下さるゝに依つてのみ、之れを自己保存的價值に轉化するを得たであらう。原債權者たるAから觀れば、其手に歸すべき國家の年租稅分は、自資本の利子を代表するものであつて、これは丁度、高利貸業に取つて其手に歸すべき浪費者の財産分が、自資本の利子を代表するのと同じである。而も此いづれの場合にも、貸付貨幣額は資本としては支出されなかつたのである。國家の債務證券を賣却するの可能は、Aに取つては元本回流の可能を代表する。Bの方を考へて見るに、其資本は彼れの私的立場から云ふならば、利子を生ずる資本として放下されたものである。彼れは本質上Aに取つて代つたに過ぎぬのであつて、國家に對するAの債務請求權を購買したのである。此取引は尙幾回も反覆され得るであらうが、國債資本が純然たる一個の空資本であると云ふ事實には變化はない。而して債務證券が販賣不可能となる瞬



間以後、此資本の外観は消失するに至るであらう。而も此の空資本は、我々の纏て見る如く、それ自身の運動を有するものである。

總じて利子を生ずる資本なるものは有らゆる狂的形態の母であつて、例へば債務は銀行業者から見ると商品として現はれ得るものであるが、丁度それと同じく國債に於ては一個のマイナスが資本として現はれる。所て此國債の資本に對照させて、勞働力を考察して見よう。勞銀は此の場合、利子と解され、隨つて勞働力は此の利子を生ずる資本と解される。假りに一箇年の勞銀は五十磅、而して利子率は五パーセントであるとすれば、一箇年分の勞働力は一千磅なる一資本に等しいものと見做される。資本制的觀念様式の狂亂は茲に其の絶頂に達する。蓋し資本の價值増殖は、此場合勞働力の搾取に依つて説明されず、それと反對に、勞働力の生産力は、勞働力それ自體が斯くの如き神秘物即ち利子を生ずる資本であると云ふ事實に依つて説明されるからである。此見解は十七世紀後半に於ける愛好觀念（例へばベターの）たりしもので、今日尙一部分的には俗學的經濟學者に依り、一部分的には又特に獨逸の統計學者に依つて（二）、眞面目に使用されてゐる。

（一）「勞働者は資本價值を有するものであつて、此價值たる、彼れの得る年賃銀の貨幣價值をば利子収益と観ることに依つて見出される。…一日の平均的賃銀をば四パーセントを以て資本化するとなれば、農業上の男子勞働者一人の平均的價值は左の通りであることが知られる。即ち獨逸系塊地利一千五百ターレル、普魯西一千五百ターレル、英吉利三千七百五十ターレル、佛蘭西二千ターレル、中部露西亞七百五十ターレル（フオン・レーデン著『比較文化統計』、柏林、一八四八年刊、第一三四頁）（三）」

此思慮なき見解は不幸にして、二個の不愉快なる事實に依つて無効にされる。

第一に、勞働者は此利子を得る爲に勞働するを要すると云ふ事、第二に、彼れは其の勞働力の資本價值をば、移轉に依つては正金に換ふるを得ないと云ふ事、これである。寧ろ彼れの勞働力の年價值は、彼れが一年間に得る平均賃銀に等しいものであつて、彼れが自己の勞働に依つて此勞働力の購買者に補償すべきものは、該價值自體と其増殖分たる餘剩價值との和である。奴隸制度に於ては、勞働者は一の資本價值を有してゐる。彼れの購買價格が即ちそれである。而して彼れが賃貸される場合には、其賃借人は先づ此購買價格の利子を支拂ひ、更らに此資本の年々の磨滅分を補償せねばならぬ。



空資本の成立は資本化と名づけられる。規則正しく反覆する各収入は、之れを平均利子率を以て貸付けられた一資本の齎らすべき収益と見做し、此利子率に對して計算することにより資本化されるのである。例へば、年収入は一百磅、利子率は五パーセントであるとすれば、此の一百磅は二千磅の年利子に相當するであらう。而して此二千磅は今や、年々生ずべき一百磅に對する法律上の所有名義の資本價值と見做される。此所有名義を購買する人から觀れば、此一百磅なる年収入は實際のところ其放下資本に對する五パーセントの利子を代表するのである。かくして資本の現實的價值増殖行程との有らゆる聯絡は跡型もなく抹消されてしまひ、資本をば自分自ら其價值を増殖する自動體と觀る見解は鞏固となるに至るのである。

國債に於けるとは異なり、債務證券——有價證券——が純粹に幻想的なる資本を代表するに非ざる場合にも、此證券の資本價值は純粹に幻想的のものである。信用制度なるものが如何に結合資本を造り出すかは、曩に見た通りである。證券は斯る資本を代表するところの所有名義と看做される。鐵道採礦、航運等に從事

する諸會社の株式は、現實の資本、即ち之等の企業に放下し運用さるゝ資本、換言すれば之等の企業に資本として支出する目的を以て株主たちの前貸せる貨幣額を代表するものである。(尤も斯く言へばとて、之等の株式がまた全く詐偽を代表するに過ぎぬ場合が無いと云ふ譯ではない)。されど此資本は二重に存在するものではない。即ち夫れは、一方に所有名義たる株式の資本價值として存在し、他方には右の諸企業に現實上放下せる又は放下さるべき資本として存在するものではない。夫れはたゞ此の後の方の形態に於て存するのみである。而して株式なるものは、此資本に依つて實現さるべき餘剩價值に對する比例的所有名義に外ならぬのである。Aなる人は此の名義をBなる人に販賣し、Bは又それをCに販賣することが出来る。斯る取引は問題の性質を些も變更するものではない。此の場合、A又はBは其名義を資本に轉化することとなるが、Cは其資本を株式資本に依つて期待さるべき餘剩價值に對する單なる所有名義に轉化することとなる。

斯る所有名義——單に國債證券のみではなく、又株券をも含む——の價值の獨立せる運動は、之等の名義が其代表し得べき資本又は請求權と並んで現實の資本



を成すと云ふ外觀を鞏固にする。蓋し之等の所有名義は自己獨特の運動及成立を有する價格ある所の商品となるからである。現實的資本——其の價值増殖は暫く措き——の價值變動することなくして、斯る所有名義の市場價值は其名目價值とは異なる一決定を受ける。一方に於て、其市場價值は、之等の所有名義に依つて權利上の名義を附與さるゝ收益の程度及確實と共に動搖するものである。一株券の名目價值換言すれば、此株券に依つて本來代表さるゝ投資額は一百磅であり、當該企業の齎らす所は五パーセントの代りに一〇パーセントであるとすれば、其株券の市場價值は、他の事情に變化なく而して、利子率が五パーセントに止まつてゐる限り、二百磅に増大する。蓋し此株券は今や五パーセントを以て資本化されるとすれば二百磅なる空資本を代表するからである。之れを二百磅で購買する人は、斯る投資に依つて五パーセントなる収入を受ける。當該企業の收益が減少する場合には、反對の結果を生ずる。此證券の市場價值は、一部分は投機的のものである。それは單に現實の収入に依つて決定さるゝのみではなく、又豫め期待し計算さるべき収入に依つて決定されるからである。されど現實的資本の價值

増殖を不變と假定し、又は國債に於ける如く何等の資本も存在せざる場合年々の收益が法律上確定され、其他の點に就ても保證が充分に存するものと假定すれば、斯る有價證券の價格は利子率と反對に増減するのである。若し利子率が五パーセントから一〇パーセントに増騰するとすれば、五磅なる收益を確保する所の有價證券は最早五十磅なる一資本を代表するに過ぎぬ。利子率が二パーセント半に低減するとすれば、同一の有價證券は二百磅なる一資本を代表する。此有價證券の價值は常に、其資本化せる收益換言すれば、現存利子率に従ひ幻想的なる一資本に對して計算せる其收益に外ならぬものである。故に貨幣市場の逼迫せる時期に於ては、斯る有價證券は二重の原因に依つて其價格の低落を見ることとなるであらう。一は即ち、利子率が増騰すると云ふこと、他は即ち、斯る有價證券が貨幣に實現さるべく大體めに市場へ投ぜられると云ふことである。斯る價格低落は該證券に依つて其所有者の得る收益が、國債證券の場合に於ける如く不變であるか何うか、又は此證券に依つて代表さるゝ現實的資本の價值増殖が産業上の諸企業に於ける如く再生産行程の擾亂により影響され得るか何うかと云ふ事實から



は獨立して生ずるものである。たゞ此の後の場合に於てのみ、上述の價值低落に加ふるに尙今一つの價值低落が生じ來たるのである。暴風雨一過し去るや否や右の有價證券は、それが企業上の失敗又は詐僞を代表するものに非ざる限り、また從前の水準に上進することとなる。恐慌期に於ける其價值低減は貨幣財産を集積せしむべき有力なる要具として作用するのである(二)。

(二)二月革命後直ちに、巴里に於て商品並に有價證券の價值が非常に低落して全く販賣不可能となつた時、瑞西の一人エルツキルヒエンバルト氏(茲に掲ぐる事實は、此人が子の父に語つたものである)は一切の所有物を貨幣に換へ、其正金を携へて巴里に赴き、ロスチアイルドを訪れて共同の營業をなすべく申出た。ロスチアイルドは疑乎と彼れを見詰めてゐたが、躍びかゝるやうに彼れの腕に逃み寄つて其雙肩を掴みながら「貨幣をお持ちですか?」と訊いた。「はい。」「では共同にやりませう。」「斯様にして彼等は雙方とも大儲をしたのである。——F. E.」

斯る證券價值の低落又は増騰が、其代表する現實的資本の價值運動から獨立せるものである限り、一國民の富の大小は右の低落又は増騰後に於ても依然同一に止まつてゐる。「一八四七年十月二十三日、公債並に運河及鐵道株式は既に一億一、

千四百七十五萬二千二百二十五磅の價值低落を示したるなり。」「一八四七年より、四八年に至る商業上の窮迫に關する報告中、英蘭銀行總裁モリスの證述)。斯様な價值低落が生産の休止並に鐵道及運河に依る交通の休止を言現はすものでなく又は既に着手せる企業の放棄なり、無價值たること確實なる企業に於ける資本の徒消なりを言現はすものでなかつた限り、有名無實なる貨幣資本の斯る石鹼玉の破裂に依つて、國民は鏹一文も貧しくはならなかつたのである。

之等すべての證券は、實際のところ將來の生産に對する請求權即ち權利名義の蓄積を代表するに外ならぬものであつて、此名義の貨幣價值又は資本價值なるものは、國債の場合に於ける如く何等の資本をも代表しないか、或は其代表する現實的資本の價值から獨立して調節されるかの何づれかである(3)。

資本制生産の行はるゝ如何なる國にも、此形態に於ける所謂利子を生ずる資本又は貨幣より成る資本の莫大量が存してゐる。而して貨幣資本の蓄積なるものは大抵、生産に對する此請求權の蓄積換言すれば、かゝる請求權の市場價格(即ち幻想的資本價值)の蓄積に外ならぬのである。



所で、銀行業者資本の一部は斯くの如き所謂利付證券に放下されるものである。それは又現實の銀行營業に於ては作用せざる準備資本の一部たるのである。其大部分は爲替手形、換言すれば、産業資本家又は商人の支拂約束より成る。貨幣貸付者より觀れば、此爲替手形は利付證券である。語を換へて云へば、彼れは之れを購買する時、其の尙通用すべき期間分の利子を控除する。これ即ち割引と名づけらるゝものである。かくて爲替手形に依つて代表される、貨幣額の中から幾許量の控除がなされるかは、各場合に於ける利子率の如何に懸るのである。

最後に、銀行業者資本の最終部分は、金又は銀行券の貨幣準備より成る。預金は契約に依つて長期間拘束されざる限り、常に預金者の自由支配に屬してゐる。それは絶えず動搖してゐるが、然し甲に依つて引出されるれば乙に依つて預入されると云ふ有様であるから、營業の順當に進む時期に就て云へば、其の一般的平均額は殆んど動搖しないのである。

資本制生産の發達せる國々に於ける銀行の準備金は、平均して云ふと常に、退職貨幣の形態に於て存する貨幣の大小を言ひ現はすものである。而して此退職貨

幣の一部は又、金に就ての單なる指圖書たるに過ぎざる證券——而もそれ自身に何等の價值をも有せざる——より成るものである。故に銀行業者資本の大部分は純粹に架空のものであつて、債務請求權（爲替手形）、國債證券（過去の資本を代表するもの）及び株券（將來の収益に就ての指圖書）より成る。これに就て忘るべからざること、斯る證券が銀行業者の金庫内に代表する所の資本の貨幣價值は、其證券が確實なる収益に就ての指圖書たる場合（國債證券に於ける如く）、若しくは現實的資本に就ての所有名義たる場合（株券に於ける如く）にも尙全く架空のものであつて、之等の證券に依つて少なくとも一部の的に代表される、現實的資本の價值とは別様に調節されると云ふ事實、又は之等の證券が収益に就ての單なる請求權を代表するに止まり何等の資本をも代表するものに非らざる場合には、同一の収益に對する請求權は不斷變動的なる架空の貨幣資本に依つて言現はされると云ふ事實これである。加ふるに斯る銀行業者の空資本は、大抵彼れ自身の資本を代表するものではなく、或は利子付或は無利子にて彼れに預入された公衆の資本を代表するものである。



預金は常に貨幣、即ち金若しくは銀行券又は其等に對する支拂命令書を以てなされる。現實的流通の要求に應じて伸縮する所の準備金を取除いて考へるならば斯る預金は事實上常に一方には、それに依て自己の手形を割引して貰ひ又其中から前貸を受ける所の産業資本家及び商人の手中にあり、他方には有價證券取引業者（取引所仲買人）、若しくは自己の有價證券を賣却せる私個人或は政府（藏券並に新たなる國債が問題たる場合には）の手中にある。預金その者は二重の役割を演ずる。一方に於て、それは上述の如く利子を生ずる資本として貸付けられる。随つてそれは銀行の金庫内に存するものではなく、單に預金者の貸方として銀行の帳簿面に作用するのみである。他方に於て又それは預金者たちの交互信用が其の預金に對する支拂命令書の形で相互清算され斯く記入さるゝ場合、かかる帳簿面の金額として作用するものである。此の場合、諸々の預金が同一の銀行業者の手に託せられて居り、斯して種々なる信用が彼れに依りて相互清算されるか、それとも之れが諸種の銀行——互ひに其小切手を交換して差額のみを支拂ふ所の——に依つてなされるかと云ふことは、全く何うでも宜い事なのである。

利子を生ずる資本並に信用制度の發達すると共に、同一の資本或は單に同一の債務請求權が種々なる人々の手に於て種々なる形態の下に現はるゝ様式の種々異なるに依つて、一切の資本は二倍となり、往々また三倍となるやうに見える。(三)。此『貨幣資本』の大部分は純粹に架空的のものである。準備金を除き一切の預金は、銀行業者に對する信用貸に外ならぬ。而も此信用貸たる、決して預金の形に於て存するものではない。此信用貸は振替營業に役立つ限り、銀行業者たちに依つて貸付けられたる後彼等に取り資本として作用するのである。彼等は此の信用貸の清算に依つて、存在せざる預金に對する交互的の小切手を互ひに支拂ひ合ふのである。

(三)〔資本が斯く二倍となり三倍となる事實は、例へば金融トラスト——倫敦の取引所報告中に既に特殊の一欄を占めてゐる所の——に依つて更らに著しく發達した。一定種類の利付證券、即ち外國々債券、英國市債券又は米國公債證書、鐵道株等を購買すべき一會社が設立されてゐる。例へば二百萬磅なる資本が、株式申込に依つて確保されるのである。重役部は當該價值を購入し、又は夫れに就て多かれ少なかれ能動的に投機を行ひ、費用を控除せる後に残る一年の利子収益を配當金として株主に分與するの



である。——更らに若干の株式会社に於ては、通常株をば優先株と優先株との二種に區別する習慣が生じた。優先株の方は、總利潤が夫れを許すならばと云ふ條件の下に、例へば五パーセントなる一定の利子を受ける。そして尙幾分の残額存する場合には、優先株が夫れを受けるのである。新機にして、優先株に對する「鞏固なる」投資は、眞の投機——優先株に就ての——から多かれ少なかれ分離されることとなる。然るに此の新方法を採用するを欲せざる大企業も幾分存してゐたので、右の如き会社の株式に一百磅又は數百磅を放下し、次いで此株式の名目價值に相當せる額の新株式——但し其半ばは優先株、半ばは優先株——を發行する所の会社が設立されると云ふ現象を見るに至つた。斯る場合には、原株は新たな株式發行の基礎に役立つことに依つて二倍となるのである。——(F.E.)

貨幣貸付に於て資本の演ずる役割に就きアダム・スミスは言ふ。——「貨幣取引に於てさへ、貨幣なるものは、所有者の使用せざる資本を一方の人の手から他方の人の手に移轉する所の支拂命令書に外ならぬのである。斯る資本は、其移轉の要具として役立つ貨幣額に比し、殆ど如何なる程度までも大なるを得るのである。同一の個々貨は幾多の異なる購買に於けると同様、幾多の異なる貸付に於ても逐次的に役立つものであつて、例へばAなる人はWなる人に一千磅を貸付ける。

するとWは此一千磅を以て直にBなる人から一千磅の價ある商品を購入する。B自身は此貨幣に就き直接の用途を有せざる故、それと等額の個々貨をXなる人に貸付ける。Xは直ちにCなる人から一千磅の價ある商品を購入する。同様に且つ同一の理由を以て、Cは此貨幣をYなる人に貸付け、Yは又此貨幣を以てDなる人から商品を購入する。斯様にして同一の金貨又は紙幣は、數日中に三回の異なる貸付と三回の異なる購買とを媒介するに役立ち得る。而して之等の貸付及購買は何づれも、斯る個々貨の全額に等しき價值を有するものである。ABCなる三人の金融者がWXYなる三人の借受者に移轉せるものは、此購買をなす力である。右の如き貸付の價值も有用も共に此力に存するのである。彼等三人の金融者に依つて貸付けらるゝ資本は、其資本を以て購買し得る商品の價值に等しく此購買をなすに要する貨幣の價值に三倍するものである。それにも拘らず、之等の貸付は總て完全に安固たり得るのである。なぜならば、異なる債務者が夫れを以て購買する商品は、早晚それと等額の價值——金貨又は紙幣に於ける——の外に尙一利潤を齎すと云ふ風に充用されるからである。而して同一の個々貨は、自



己の價值に三倍し甚しきは三十倍する額に達する諸種の貸付を媒介するに役立ち得ると同様、又償却の要具としても逐次的に役立ち得るのである』（『諸國民の富』第二部、第四章）。

同一の個貨は其流通の速度に應じて種々異なる購買をなし得る故、同様にまた種々異なる貸付をも全うし得るのである。蓋し購買は同一の個貨を一方の人の手から他方の人の手に移轉するものであり、而して貸付とは購買の仲介なくして行はるゝ、一方の人の手から他方の人の手への移轉に過ぎぬものであるからである。各販買者にとつて貨幣は其商品の轉化せる形態を代表するものである。如何なる價值も資本價值として言現はさるゝ、今日に在つては、貨幣は種々異なる貸付に於て順次的に種々異なる資本を代表するものであつて、此事たる、貨幣は種々なる商品價值を順次的に實現し得ると云ふ、曩の命題を言ひ換へたものに外ならぬ。同時に又、貨幣は物的資本を一方の人の手から他方の人の手に移動せしむる流通要具として役立つものである。貸付の場合には、貨幣は流通要具として一方の人の手から他方の人の手に移動するものではない。それは貸付者の手中に

止まつて居る限り、彼れの手中に在つては流通要具ではなく、其資本の價值存在である。而して彼れは之れを他人に貸付くる場合、かゝる形態に於て移轉するのである。購買の仲介なくして、AはBに、BはCに貨幣を貸付けるとすれば、同一の貨幣は三資本を代表するものではなく、單に一資本を、一の資本價值を代表するに過ぎぬであらう。此の貨幣が現實に於て幾個の資本を代表するかは、それが種々異なる商品資本の價值形態として幾回作用するかと云ふことに依つて定まるのである。

貸付一般に就てアダム・スミスの言つた事は、又預金に就いても當嵌る。蓋し預金なるものは、銀行業者が公衆より受くる貸付の特殊名稱に過ぎぬからである。同一の個々貨は、幾個の預金の要具としても役立ち得るのである。

『今日何人かAに預入した一千磅が、明日はまた振出されてBへの預金たるに至るは、疑を容れざる事實である。明後日になると、それはBに依つて拂出されてCへの預金となり得る。斯様にして、それは無限に同じ行程を繰返すのである。即ち同一の一千磅は何回もの移轉に依つて、絶対に確定し難き預金に倍加して行



くのである。かくして英吉利聯合王國に存する有らゆる預金中の十分の九が、それを記入する銀行業者——契約期日に至り其清算をなすべき——の帳簿面に於ける金額として以外には何等の存在をも有しないと云ふことが可能となるのである。……之れは蘇格蘭に於て見受けられた所である。即ち同地の貨幣流通は三百萬磅を超過せることなきに拘らず、預金は二千七百萬磅に上つた。銀行に對する一般的の預金取付が行はれないとすれば、同一の一千磅は逆流して、前の場合と同様に確定し難き額をば容易に精算せしめ得るであらう。今日何人か、或る取引業者に對する債務の償却に充てる其の同じ一千磅は、明日になると他の商人に對する此取引業者の債務を清算せしめ、更らに明後日になると銀行に對する此商人の債務を清算せしめ得ると云ふ風に、此行程は限りなく反覆するものであるから、同一の一千磅は手から手に、銀行から銀行に移動して、想像し得べき如何なる預金額をも清算せしめ得るのである』(匿名者著『通貨問題論評』第一六二——三頁)。

斯る信用制度の下に於ては一切は二倍三倍となり、單なる幻想に轉化して了ふ

ものであるが、之れは『準備金』——今度こそ確固たるものを捕捉したと信ぜられる所の——に就ても同様に當嵌る事實である。

今一度、英蘭銀行總裁モリス氏の供述を聽かう。氏は曰く、『私營銀行の準備金は預金の形を以て英蘭銀行の手中に存するものなり。金の輸出に伴ふ第一の影響は、英蘭銀行の上のみ及ぶものゝ如く見ゆるも、實は他の諸銀行の準備金の上にも同様に影響するものなるべし。蓋し金の輸出なるものは、之等の銀行が我英蘭銀行に預入せる準備金の一部の輸出を意味するを以てなり。同様に其は、有らゆる地方銀行の準備金にも影響するなるべし』(『一八四七年より四八年に至る商業上の窮迫』)。かくて準備金なるものは、現實に於て結局英蘭銀行の準備金に歸するのである(四)。

(四)此準備金が爾後如何に著しく増大せるかは、倫敦に於ける十五の最大銀行に存する一八九二年十一月現在銀行準備金に就ての、政府の發表にかゝる左表に依つて知らるゝ通りである。之れは一八九二年十二月十五日の『デーリー・ニュース』紙から得たものである。



銀行名	負債	正金準備	百分率
シテイ	九三一七六二九	七四六五五一	八・〇一
キャピタル・アンド・カウンティーズ	一一三九二七四四	一三〇七四八三	一一・四七
イムペリアル	三九八七四〇〇	四四七一五七	一一・二一
ロイツ	二三八〇〇九三七	二九六六八〇六	一二・四六
ロンドン・アンド・ウエストミンスター	二四六七一五五九	三八一八八八五	一五・五〇
ロンドン・アンド・サウスウエスターン	五五七〇二六八	八一三三五三	一三・五八
ロンドン株式	一一二二七九九三	一一八八九七七	一〇・六二
ロンドン・アンド・ミッドランド	八八一四四九九	一一二七二八〇	一二・七九
ロンドン・アンド・カウンティ	三七一一一〇三五	三六〇〇三七四	九・七〇
ナショナル	一一一六三八二九	一四二六二二五	一二・七七
ナショナル・プロヴィンシアル	四一九〇七三八四	四六一四七八〇	一一・〇一
パイズ・アンド・アライアンス	一二七九四四八九	一五三二七〇七	一一・九三
プレスコット・アンド・コムパニー	四〇四一〇五八	五三八五一七	一三・〇七
ユニオン・オヴ・ロンドン	一五五〇二六一八	二三〇〇〇八四	一四・八四
ウキリアムス・デイ・コン・アンド・マンチエスター	二〇四五二三八一	一三一七六二八	一二・六〇
合計	二三二六五五八二三	二七八四五八〇七	一一・九七

此の約二千八百萬磅の備資金中、少なくとも二千五百萬磅は英蘭銀行に預入されて居り、倫敦に於ける十五の銀行自身の金庫内に存する正金は高々三百萬磅を超えない。

然るに同じ一八九二年十一月に於ける、英蘭銀行の銀行營業部に存する正金準備は正一千六百萬磅に達したことはないのである！——E.F.C.

然るに此準備金も亦二重の存在を有してゐる。英蘭銀行の銀行營業部に存する準備金なるものは、流通しつつある銀行券に對する、同銀行が發行の權能を有する銀行券の超過額に等しいのである。同銀行に依つて發行さるべき銀行券高の法定最大限度は、即ち一千四百萬磅（是に就ては何等の金屬準備をも要しない。これは同銀行に對する國家の負債と略々等類のものである）に同銀行の有する貴金屬準備額を加へた額である。故に此準備額が一千四百萬磅であるとするれば、英蘭銀行は二千八百萬磅の銀行券を發行し得る。而して其中二千萬磅が流通するものとすれば、銀行營業部の準備金は八百萬磅となるのである。然る場合、此の八百萬磅なる銀行券は、法律上、同銀行の自由支配に屬する銀行業者資本たると同時に又其預金に對する準備金たるものである。所て右の金屬準備中から六百萬磅を減ぜしむる金流出が行はるゝものとすれば——此流出の結果、同額の銀行券が無効となるを免れないのである——銀行營業部の準備金は八百萬磅から二百



萬磅に低減することゝなるであらう。一方に於て、同銀行は其利子率を著しく引上げることゝなり、他方に於て、同銀行に預金しつゝある諸銀行及び他の預金者たちは、自己の信用貸に對する同銀行の準備金が著しく減額するを見るであらう。一八五七年、倫敦に於ける四大株式銀行は、英蘭銀行にして若し一八四四年の銀行條例の施行中止を言明せる(五)「政府の指令」を得せざる場合には、其預金の取付をなさんと威嚇した。斯くの如き取付に會へば、同銀行の銀行營業部は倒産を見ること必定である。即ち此銀行營業部なる者は、幾百萬磅(例へば一八四七年には八百萬磅)の額が流通銀行券の兌換保證として發行部に存する場合にも、尙一八四七年に於ける如く倒産し得るのである。所て此の兌換保證なるものが、また幻想的のものなのである。

(五)一八四四年の銀行條例の施行中止となれる結果、英蘭銀行は自己の手に存する金準備に依る保證に顧慮する所なく、任意量の銀行券を發行し、斯様にして紙製の架空なる貨幣資本を幾許でも造り出し、それによつて諸銀行、取引所仲買人、及び——之等のものを通して——商業に前貸をなし得るに至つたのである。

「銀行業者自身が何等直接の需要を有せざる預金の大部分は、手形仲買人等(實

質上、半ば銀行業者なる)の手に移動するものにして、彼等は其代りに彼等が既に倫敦又は地方の人々に對して割引せる商業手形をば、自己の受けたる前貸の擔保として銀行業者に提供するものなり。手形仲買人は銀行業者に對して、要求次第この貨幣を償却するの責任あるものとす。而して此取引たる、驚くべき巨額に達するものにして、現任英蘭銀行總裁ニール氏は是に就き實に次の如く供述せり。

——或仲買人が五百萬磅を所有せることは吾人の知る所なり。而して又吾人は他の仲買人が八百萬乃至一千萬磅を所有し、更らに他の者は四百萬また或者は三百五十萬磅を所有し、尙第三の者は八百萬磅以上を所有せりと推量するの理由を有す。予は此場合、仲買人の手にある預金に就き語るものなり」(「銀行條例委員の報告、一八五七——五八年」第五頁、第八項)。

「倫敦の手形仲買人等は……何等の正金準備なくして其の巨額の取引を遂行せり。彼等は相繼ぎて満期となれる手形に倚賴し、或は又已むを得ざる場合には、自己の割引せる手形を預入して以て英蘭銀行より借受を得るの力に信賴したり。」

——倫敦に於ける二個の手形仲買人商會は、一八四七年に支拂を停止した。此兩



商會は其後營業を再開始したが、一八五七年に至り再び支拂を停止した。一方の商會の、一八四七年に於ける資本金は十八萬磅なるに、負債は約二百六十八萬三千磅に上つた。一八五七年に至り、其負債は五百三十萬磅となつたが、資本金の方は一八四七年に於る額を超えなかつたらしいのである。今一つの商會の負債は、右兩年とも三百萬乃至四百萬磅で、資本金は四萬五千磅を超えなかつた』（前掲報告別丁第一一頁、第五二項）。

### 第三十章 貨幣資本及び現實的資本 I

信用制度に就て我々の今接近しつゝある唯一の難問題は左の通りである。

第一に、嚴密の意味に於ける貨幣資本の蓄積。此蓄積は如何なる程度まで、現實に於ける資本蓄積、換言すれば、擴大せる規模に於ける再生産の徵候たり又特徴たらざるものであるか？ 資本の過充と稱するものは、常にたゞ利子を生ずる資本即ち貨幣資本に就てのみ使用さるゝ一表章であるが、それは單に産業上の過剰生産を言現はす特殊の一方法に過ぎぬものであるか、それとも此過剰生産以外の特殊の一現象たるものであるか？ 貨幣資本の斯る過充、斯る過剰供給は、停滯的な貨幣量（地金銀、金貨及び銀行券）の存在と一致するものであるか？ かくして現實的貨幣の此過剰は、貸付資本の右の如き過充の表章たり現象形態たるものであるか？

又第二に、貨幣の逼迫、換言すれば貸付資本の不足は、如何なる程度まで、現實的資本（商品資本及び生産資本）の不足を言現はすものであるか？ 他方に於て、そ



れは如何なる程度まで貨幣としての貨幣の不足、即ち流通要具の不足と一致するものであるか？

貨幣資本及び貨幣財産一般の蓄積の特殊形態に就ては以上攻究し來たれる通りであるが、これに依つて觀ると此蓄積は畢竟勞働に對する所有權の蓄積に外ならぬものであつた。國債資本の蓄積なるものは、既に示せる如く、租稅額の中から一定の高を先取するの權能ある國家債權者なる一階級の擴大を意味するに過ぎぬのである(六)。

(六)「公債とは、年収入中負債の償却に取除け置く部分を代表する所の假想的資本に外ならぬ。夫と同額の一資本が事實上支出された。公債なる名稱の源泉として役立つ者は即ち此資本である。然し公債に依つて代表される者は此資本ではない。此資本は最早存在して居らぬからである。されど産業の運用に依つて、新たなる富を産出せねばならぬ。此富の一部は、右の支出された富の賣主に對する前拂用として年々取り除け置かるゝものである。それは右の富を生産せる人々の手から租稅として集まれ、國家の債權者等に支拂はれるのである。而して我國に行はるゝ資本と利子との間の習慣的比例に従ひ、假想上の一資本は、之等の債權者が收納すべき年収入の源泉たり得る資本と同額のものとして假定されるのである」(シスモンデ著「新原理」第二卷、第

## 二二〇頁以下。

斯る事實——加ふるに、債務の蓄積をも資本の蓄積として現はれしめ得る所の——は、信用制度に基く轉倒の完成を示すものである。本來貸付けられ、而して久しぶり以前に支出された資本に就き發行さるゝ此國債券、滅却せる資本の此の紙製複本は、それが販賣可能の商品であり、隨つて資本に再轉化し得るものである限り、其所有者にとつては資本として作用するものである。

會社の營業や、鐵道や、鑛山などに對する所有名義が、曩に知れる如く事實に於て現實的資本に對する所有名義たることは確かである。然し夫れは、此資本に對する何等の支配をも附與するものではない。此資本は撤回し得ざるものである。斯る所有名義は、此資本に依つて獲得さるべき除剩價值の一部に對する權利主張を附與するに過ぎぬ。然し此名義も矢張り現實的資本の紙製複本となるものであつて、それは恰も、船荷證券が積荷以外に、又それと同時に、一價值を受くるが如くである。それは存在せざる資本の名目的代表者となる。蓋し現實の資本は此の複本以外に存在するものであつて、其の所有者が換ればとて決して自己の所有者



を換ふる者ではないからである。此複本は利子を生ずる資本といふ形態を探る。なぜならば、それは単に一定の収益を保證するのみではなく、また販賣に依り資本価値としての其償却が確保され得るからである。斯る紙券の蓄積は鐵道、鑛山、汽船等の蓄積を言現はす限り、現實に於ける再生産行程の擴大を言現はすものであつて、それは丁度例へば動産所有に就ての課税表の擴大が此動産の増大を示すのと同じである。けれども此紙券は、それ自身商品として取引するを得、随つてそれ自身資本価値として流通する所の複本たる意味に於て、全く幻想的のものであり、其の價值額は現實的資本——該紙券に依つて其所有名義を代表される所の——の價值運動から全く獨立して増減し得るのである。其の價值額換言すれば其の株式取引所相場は、利子率が貨幣資本獨特の運動からは獨立して單に利潤率低減の傾向に基き低減すると共に、必然増進すべき傾向を有してゐる。かくして、價值表章から云ふと其の各可除分が一定の本來的名目價值を有する斯くの如き想像上の富は、單に此の理由のみから見ても、資本制生産の發展中に擴大することゝなるのである(七)。

(七)蓄積せる貸付貨幣資本の一部は、實際のところ産業資本の表章に過ぎぬものである。一例を擧ぐれば、一八五七年、英吉利は亞米利加の鐵道その他の企業に八千萬鎊を投資したが、此投資は殆ど全く英國商品の輸出——それに就て亞米利加人が何等の償却をもなすを要しなかつた所の——に依つて媒介されたものである。英吉利の貿易業者は此商品に就て亞米利加宛て爲替手形を振出し、英吉利に於る株式申込人は其手形を購買して株式申込額の拂込に充つべく之れを亞米利加に送致したのである。

斯る所有名義の價格動搖に基く損失、並に鐵道王等の手への此所有名義の集中は、自然の順序として益々、資本財産の本來的取得方法として勞働に代り又直接的の強力にも取つて代る所の賭博の結果となる。此種の假想的貨幣財産は、單に私人の貨幣財産の極めて顯著なる部分を成すのみではなく、又既に述べたる如く銀行業者資本の極めて顯著なる部分をも成すのである。

問題の解決を急ぐため一言するに止めて置きたいことは、貨幣資本の蓄積なるものは、一方には私的貨幣資本家と、他方には國家、自治體、並に再生産に従事する資本借受者との間の媒介者たる資格に於ける銀行業者(職業的貨幣貸付者)たちの手に富が蓄積されると云ふ意味にも解し得ると云ふ事である。蓋し信用制度



の異常なる全擴大總じて一切の信用は、彼等に依り其私有資本として利用されるからである。此の者共は、常に貨幣形態又は直接の貨幣請求権なる形態を採つた資本及収入を有してゐる。斯る階級の所有に屬する財産の蓄積は現實的蓄積とは極めて異なる方向に進行するを得るものであるが、然し兎にかく、此階級が現實的蓄積の少なからざる部分を收納すると云ふ事實を證明するものである。

當面の問題をより、狹隘なる限界内に縮約すると次の如くなる。——國債券並に株券その他有らゆる種類の有價證券は貸付資本、換言すれば利子を生ずべく定められた資本の放下部面である。之等の有價證券は斯る資本を貸付くる形態であつて、それに放下さるゝ貸付資本その者ではない。他方に、信用が再生産行程に於て直接の役割を演ずる限り、産業資本家なり商人なりが手形の割引を受け又は貸付を得んとする場合要するものは株券でもなく國債券でもない。彼等の要するものは貨幣である。されば彼等は他の方法に依つて貨幣を得ること能はざる場合には、之等の有價證券を抵當に入れ或は販賣に付するのである。我々の技に取扱ふべきは斯る、貸付資本、特に又貸付貨幣資本の蓄積である。家屋、機械、其他の

固定資本の貸付は此の場合問題でない。又、産業資本家と商人とが商品の形で、且つ再生産行程の循環内に於て、相互になす前貸も問題ではない。(但し此點に就ても、豫め尙立入つて攻究する必要がある)。我々の問題となるは媒介者としての銀行業者が産業資本家及び商人に對してなす貨幣貸付のみである。

そこで先づ、商業上の信用、換言すれば再生産に従事せる資本家たちが相互に與ふる信用を分析しよう。此信用は實に信用制度の基礎たるのである。それを代表するものは、爲替手形、即ち支拂期日の一定せる債務證券、別言すれば延拂の文書である。各人は一方の手を以て信用を與へ、他方の手を以て信用を受ける。銀行業者信用のことは先づ全然問題外に置かう。それは右の信用とは全く別個の本質的に異つた一要素であるからである。如上の爲替手形は、それ自體が又割引によることなく一方の人が他方の人に向つてなす裏書に依つて、流通要具として商人間に流通する限り、Aなる人よりBなる人への債務請求権の移轉に過ぎぬものであつて、問題の聯絡の上に些の變更も與へないのである。それは單に、一方の人



に代ふるに他方の人を以てするに過ぎぬ。而して此場合にも、清算は貨幣に依らずして行はれ得るのである。例へば、紡績業者Aは棉花仲買人Bに爲替手形の支拂をなすべきであり、Bは又輸入業者Cに爲替手形の支拂をなすべきであるとする。所でCが又——屢々行はるゝ如く——綿絲を輸出するものとすれば、彼は爲替手形を以てAから綿絲を購買することができ、紡績業者Aは仲買人BがCに支拂へる爲替手形を以てBに對する保證たらしめることができる。斯る場合には高々差額のみを貨幣で支拂へば宜いのである。此の全取引は棉花と綿絲との交換を媒介するに止まる。輸出業者は紡績業者を代表するに過ぎず、棉花仲買人は棉花栽培者を代表するに過ぎないのである。

所で、此の純商業上の信用の循環に就て注意すべき點が二つある。

第一に、此の交互的債務請求権の清算は、資本の回流に依り、換言すれば單に延期的たるに過ぎぬ。Cに依つて左右される。紡績業者が綿布製造業者から爲替手形を受取つたとすれば、綿布製造業者は其市場に有する綿布が斯る間に販賣された時支拂をなし得るのである。穀物投機者が其問屋に爲替手形を振出したと

すれば、問屋は斯る間に穀物が豫期の價格で販賣された時貨幣を支拂ひ得るのである。即ち之等の支拂は、再生産の流動、換言すれば生産行程及び消費行程の流動の如何に懸るのである。されど信用は交互的のものであるから、各人の支拂能力は同時に他の各人の支拂能力の如何に懸るのである。蓋し各人は其爲替手形を取組むに當り、自己の營業に於ける資本の回流なり、又は斯る間に爲替手形の支拂を彼れになすべき第三者の營業に於ける資本の回流なりに頼るを得るからである。斯る回流の見込を問題外に置くとすれば、支拂はたゞ手形發行者が資本回流の遲滞せる場合その義務を果たすべく處分する所の準備資本に依つてのみ可能となり得るのである。

第二に、此信用制度は現金支拂の必要を除去するものではない。先づ支出の少なからざる部分は常に現金で支拂はれねばならぬ。勞銀、租税等が即ちそれである。次ぎに又例へば、Cなる人から現金拂の代りに爲替手形を受取つたBなる人は此の手形が満期となる前に、Dなる人に對して自己の満期手形の支拂をなさねばならず、其爲に正金を要するとなるのである。曩に棉花栽培者より木綿紡績



業者に至る間の關係、又は其反對の關係に就て假定せる如き、再生産の完全なる循環は、要するに一の例外たり得るに過ぎぬものであつて、絶えず幾多の點に於て挫折するを免れないのである。不變資本の生産者等が一部分には不變資本を相互に交換するものなることは、再生産行程を論究せる際（第二卷、第三篇）見た通りである。斯る場合には、爲替手形は多かれ少なかれ平均に歸し得るのである。棉花仲買人は紡績業者に對して爲替手形を取組み、紡績業者は綿布製造業者に、綿布製造業者は輸出業者に、輸出業者は又輸入業者（恐らく又棉花の）に對して爲替手形を取組むと云ふ如き、生産の遞昇順列に於ても亦同様である。然しそれと同時に諸取引の循環が行はるゝものではなく、隨つて請求列は圓狀を呈するものではない。例へば、機械業者に對する紡績業者の請求は、機械製造業者に對する石炭商人の請求に依つて清算されるものではないのである。紡績業者は其營業上、機械製造業者に反對請求をなすことはない。なぜならば、紡績業者の生産物たる紡絲は、決して機械製造業者の再生産行程内に要素として入り込む者ではないからである。故に斯る請求は、貨幣を以て清算するの外はないのである。

それ自體として觀察せる此の商業上の信用の限界は、（一）産業資本家及び商人の富換言すれば、資本回流の遲滯せる場合、彼等が準備資本の上に有する支配、及（二）此資本回流その者である。此回流は時間的に遲滯される場合もあり、又は商品價格が其間に低落する場合もあり、或はまた市場の停滯せるため商品が一時販賣不可能となる場合もあり得る。手形の通用期間が長ければ長き程、先づ準備資本は益々大なるを要し、而して價格低落若しくは市場の荷嵩みに基く、資本回流の阻害又は遲滯の可能は益々大となる。更に又、原取引が商品價格の騰落に對する投機に依つて條件づけらるゝこと多ければ多き程、資本の回收は益々不確實となるのである。されど勞働の生産力を増進し、隨つて又大規模生産の發達すると共に、（一）市場は擴大して生産場所より遠ざかり、（二）ために信用は遲滯するを免れず、斯くして（三）取引は益々投機的要素に依つて支配されざるを得ざるに至ることは明かである。大規模に經營され、且つ遠隔の市場を目的とする生産は、生産物總體を商業の手に投ずる。されど國民の資本が二倍に増大し、商業が獨立的に、自己の資本を以て國民的生産物を悉く購買し、且つ販賣し得るに至ると云ふ



ことは不可能である。かくて此場合、信用は必要不可欠のものとなる。此信用たる範圍より云へば生産の價值範圍擴大するに随ひ、又時間より云へば市場が遠隔的となるに随つて増大するものである。此の場合、交互作用が行はれる。即ち生産行程の發達は、信用を擴大せしめ、信用は又産業及商業上の操作の擴大を來たすのである。

我々は此信用をば銀行業者信用より分離して考察することに依り、それが産業資本自體の範圍の擴大すると共に増大するものなることを明かに知るのである。此の場合、貸付資本と産業資本とは同一に歸する。貸付資本とは、終極に於ける個人的消費なり、又は生産資本の不變要素の補償なりの何づれかに定められた商品資本である。されば此場合、貸付資本として現はれるものは常に、再生産行程の一定段階に存し、而も賣買に依つて一方の人の手から他方の人の手に移轉され、其等價は後ち契約期日に及んで初めて購買者の手に支拂はれる所の資本である。

例へば、棉花は爲替手形と引換へに紡績業者の手に移轉し、綿絲は爲替手形と引換へに綿布製造業者の手に移轉し、綿布は爲替手形と引換へに商人の手に移轉し

此商人の手から又爲替手形と引換へに輸出業者の手に移轉し、其處から更らに爲替手形と引換へに印度に於ける一商人の手に移轉し、此商人は夫れを販賣して、代りに藍その他の物を買買するのである。一方の人の手から他方の人の手への斯る移轉中に、棉花は其綿布への轉化をなし、遂げ、綿布は結局印度に輸送されて藍と交換されることとなる。而して藍は歐羅巴へ移送され、同地に於てまた再生産行程に入るのである。此の場合、再生産行程の種々なる段階は、紡績業者に依つて棉花の代價が支拂はれ、綿布製造業者に依つて綿絲の代價が支拂はれ、商人に依つて綿布の代價が支拂はれる等のことなくして、信用に依り媒介されるのである。此行程の第一段に於て、商品棉花は其種々異なる生産段階を經過する。而して此經過は信用に依つて媒介されるのである。されど棉花が生産に於て其商品たる最終形態を受くるや否や、同一の商品資本は最早、遠隔市場への輸送を媒介する所の種々なる商人の手を通過するのみのものとなる。而して斯る商人中の最後の者は、此商品を結局消費者に販賣し、代りに他の商品を買入れるのである。此新たな商品は、消費されるか又は再生産行程に入ることになるのである。かくて此場合



二個の段落を區別すべきである。即ち第一に於ては、信用は同一品の生産に於ける現實の逐次的段階を媒介し、第二に於ては、單に一方の商人の手から他方の商人の手への輸送をも含む所の移轉、即ち  $M \rightarrow M'$  なる行爲を媒介するに止まる。然し此場合にも亦、商品は常に、少なくとも流通行程内、換言すれば再生産行程の一段階内に存するものである。

依是觀之、此の場合貸付けらるゝ資本は決して不使用資本ではなく、其所有者の手中に於て形態を變化せねばならぬ資本、彼れから觀れば單なる商品資本に過ぎざる形態を採つた資本、換言すれば再轉化さるゝを要し、少なくとも先づ貨幣に轉化さるゝを要する資本である。故に此の場合信用に依つて媒介さるゝものは、商品の轉形である。單に  $M \rightarrow M'$  のみではなく、尙また  $M' \rightarrow M$  及び現實に於ける生産行程である。再生産上の循環内に多額の信用——銀行業者信用のことは暫く措き——が存すると云ふことは、貸付に提供され而して有利なる放下を求めつゝある不使用資本が多額に存すると云ふことを意味するものではなく、寧ろ再生産行程内に多大の資本用途が存すると云ふことを意味するものである。かくて信用

は此場合、(一) 産業資本家が考慮に入る限り、一段階より他段階への産業資本の移動、即ち相互に關係し接合する生産諸部面の聯絡を媒介し、又 (二) 商品が考慮に入る限り、一方の人の手より他方の人の手への商品の輸送及移送を媒介し、商品をして結局貨幣と引換へに販賣され、又は他商品と交換さるゝに至らしむるものである。

信用の最大限度は此の場合、産業資本の最充分なる使用、換言すれば、消費の限界に頓着せざる、此資本の再生産力の最高緊張に等しいのである。消費の斯る限界は、再生産行程その者の緊張に依つて擴大される。蓋し此緊張たる、一方に於ては労働者及び資本家に依る収入の消費を増大せしむるものであり、他方に於ては生産的消費の緊張と同一のものであるからである。

再生産行程が流暢に進捗し、従つて資本の回流が確實である限り、斯る信用は持續し擴大する。而して此擴大たる、再生産行程その者の擴大を基礎とするものである。回流の遲滯、市場の荷嵩み、價格の低落等に依り停滯の生ずるに至るや、過剰の産業資本が存することとなる。而も此過剰たる、産業資本が其機能を盡すを得



ないと云ふ形態を採るのである。多量の商品資本はあるが賣れないのである。多額の固定資本はあるが再生産の停滞せる爲多くは使用されないのである。信用は左の諸理由に依つて縮小することとなる。(一) 産業資本は、其轉形をなし遂ぐるに能はざるため使用されずにより、換言すれば其の再生産段階の一に停滞してゐること、(二) 再生産行程の流暢に對する信頼が動搖したこと、(三) 茲に述ぶる如き商業上の信用に對する需要が減少すること、自己の生産を縮少し、多量の販賣されざる棉絲在荷を有する紡績業者は、毫も棉花を信用買するを要しないのである。商人は毫も商品を信用買するを要しない。彼れは既に充分以上に商品を有してゐるからである。

斯くの如く、此擴大に擾亂が生じ、或は單に再生産行程の順當なる緊張が阻障を受けると、信用も亦缺乏するに至るのである。信用に依つて商品を得ることは困難となる。然し現金拂の要求と信用販賣に就ての警戒とは、就中、信用失墜に續く産業循環段階にとつて特徴的なものである。恐慌期に於ては、各人は販賣すべき物を有するに拘らず販賣するを得ないのであるが、而も支拂をなす爲には販賣せ

ねばならぬ。斯る恐慌期に於て、信用缺乏の最大なる時（随つて又、銀行業者信用に就て云へば、割引率の最高なる時）正に最大なるものは、放下すべき不消費資本の量ではなく、再生産行程内に拘束された資本の量である。再生産行程の停滞する結果、既に放下せる資本は此場合、事實に於て大體めに不使用となるのである。工場は休止し、原料は推積され、完成せる生産物は商品として市場に充溢する。されば、斯くの如き状態の原因を生産資本の缺乏に歸するほど誤れることはないのである。寧ろ斯る場合にこそ、生産資本は、一方には順當な然し一時的に縮小せる再生産規模に鑑み、他方には麻痺せる消費に鑑みて過充してゐるのである。

假りに、全社會が産業資本家及び賃銀労働者のみから成るものと想像しよう。更らに、總資本の顯著なる部分が其の平均的事情の下に回収されるを妨ぐる所の且つ特に信用に依つて發展する如き全再生産行程の一般的聯絡存する結果、つねに一時的の一般的停滞を招致するを免れざる價格動搖のことは、之れを問題外に置かう。同様に、信用制度に依つて助長される、空取引並に投機的營業のことも問題外に置かう。然る場合、恐慌はたゞ種々なる部門に於ける生産の不均衡、並に資



本家の消費と蓄積との間の不均衡に依つて説明し得るに過ぎぬであらう。然るに實際を見ると、生産に放下せる資本の回収は主として非生産的階級の消費能力の如何に懸るものである。而して労働者の消費能力なるものは、部分的には労働の法則に依り、部分的には又労働者の使用さるゝは、資本家階級に取つて利潤を齎らし得る間に限られると云ふ事實に依つて制限さるゝものである。有らゆる現實的恐慌の終極的原因たるものは常に、生産力をば宛ら社會の絶對的消費能力のみが其限界なるかの如くに發展せしめんとする、資本制生産の衝動に對比せる多數人民の貧困及び消費制限これである。

生産資本の現實における缺乏は——少なくとも資本制度の發達せる諸國民に就て云へば——主要なる榮養資料なり産業上の原料なりの上に、一般的の凶作が生じた場合にのみ存するものと言ひ得るのである。

然るに今や、右の如き商業上の信用の外に、尙嚴密の意味に於ける貨幣信用なるものが加はつて来る。産業資本家及び商人が相互になす前貸は、彼等が銀行業者及び貨幣貸付者より受くる貨幣前貸と混交してゐる。爲替手形の割引に依る前

貸なるものは名目上のものに過ぎぬ。或る製造業者は爲替手形と引換へに其生産物を販賣し、此手形を手形仲買人に割引して貰ふ。事實に於て、此仲買人は其取引銀行業者の信用を前貸するものに過ぎぬ。蓋し此銀行業者は、産業資本家及び商人自身、更らに又労働者（貯蓄銀行に對して）、及び地代收納者その他の不生産階級等より成る預金者より受けたる貨幣資本をば、復た右の手形仲買人に前貸するからである。斯くして各個の製造業者若しくは商人は、多額の準備資本を保有する必要を免れ、また現實上の資本回流に倚賴するを免れるのである。

然し他方に於て、一部分は全くの手形詐偽に依り、一部分は又單に手形を複製せんが爲にのみ營まると、商品取引に依つて、此の全行程は極めて複雑となり、爲に資本回流が事實上すてに久しき以前より、部分的には貨幣貸付者、部分的にはまた生産者を欺瞞するに依るの外は最早行はれざるに至つた後にも尙、至つて鞏固なる營業と流暢なる資本回流との外觀は靜穩に持續し得るのである。斯く信用破滅の襲來せんとする丁度その間に、營業は殆んど過度に健全なるが如く見ゆるを常とするのである。例へば一八五七年及五八年の銀行條例に關する報告は、此事



實に就ての絶好の證左を與ふるものである。これに依ると、有らゆる銀行重役商人等、約して言へば、ロードオヴァストーンを始めとして召喚を受けた總ての専門家達は、一八五七年八月の恐慌の勃發せる了度一ヶ月以前互ひに其營業の隆昌と健全とを祝し合つてゐたのである。而して奇妙な事には、トックは其著「物價史」の中に總ての恐慌の歴史家として尙も此同じ幻想を經驗してゐる。突然崩壊に襲はれる間際まで、營業はつねに至つて健全であり、事業は隆昌を極めてゐるのである。

これより貨幣資本の蓄積の問題に立ち戻らう。

貸付貨幣資本の増殖は總べて、現實に於ける資本蓄積又は再生産行程の擴大を示すものとは限らぬ。これは恐慌の經過後に直接續く産業循環の段階に於て、最も明瞭に見受けらるゝ事實である。此段階に於ては、貸付資本は大體めに寝かされてゐるのである。生産行程は制限され（一八四七年の恐慌後、英吉利の産業諸地方に於ける生産は三分の一の減退を見た）、商品價格は最下低まで下落し企業

心は麻痺せる、斯くの如き瞬間に於ては、利子率は一般に低減することゝなるのである。而して斯る利子率低減の事實は、此の場合、産業資本が收縮し麻痺する結果正に貸付資本が増殖すると云ふ事實を示すに過ぎぬ。商品價格が下落し、取引額が減少し、勞銀に支出せる資本が縮小すると共に、より少額の流通要具を要するに至ると云ふ事實、他方に於て一部分は金の流出に依り、一部分は又破産に依つて外國に對する債務の清算されたる後、世界貨幣たる機能に就て最早何等の追加貨幣をも要しなくなるると云ふ事實、最後にまた手形割引營業の範圍は手形その者の數及額が減ずると共に縮小すると云ふ事實——これら總ての事實は一目瞭然のことである。かくて、流通要具用のものにしる支拂要具用のものにしる（新たなる投資のことは、今のところ問題外である）兎にかく貸付貨幣資本に對する需要は減少し、かくして此資本は相對的に豊富となるのである。然し後段示す如く、貸付貨幣資本の供給も亦、斯る事情の下に確然増大するに至るのである。

斯くて一八四七年の恐慌後、「取引の減縮と貨幣の過剩」とが専ら行はれた（一八四七年より四八年に至る商業上の窮迫」證述、第一六六四號）。『商業は殆んど



全く滅絶し、貨幣を放下するの可能は殆んど絶無たるに至りし」結果、利子率は極めて低歩となつた（前掲報告第四五頁、リザーヴァーブル王立銀行重役ホッグソンの供述）。此事實を證明すべく、斯る紳士たち（そしてホッグソンは實に其優なる者の一人である）が如何なる囁語を吐露してゐるかは、左の一齣に依つて之れを知ることが出来る。「此逼迫（一八四七年の）は、國內に於ける貨幣資本が現實に於て縮小せる結果なりき。而して貨幣資本の斯く減縮せるは、一部分は、地球上到處より來たれる輸入品の代價を金にて支拂ふの必要に基き、一部分は又、流通資本の固定資本化に基けるものなり。」流通資本の固定資本化なるものが、如何にして國內の貨幣資本を減少せしむるかは知るべくもないのである。蓋し一例として、當時資本の主として放下されたる鐵道に就て云へば、其棧橋及び線路の爲には、毫も金貨又は紙幣の支出されたることなく、而して鐵道株に支出されたる貨幣なるものは、それが單に株の拂込として預入されたに過ぎぬ限り、銀行に預入せる他の總ての貨幣と同様の作用をなし、甚しきは——曩に示した如く——貸付貨幣資本を一時増大せしめたものであり、反對にそれが現實に於て鐵道敷設に支出され

た場合には、購買要具及び支拂要具として國內に流通せる者であるからである。固定資本が輸出可能品でなく、かくて輸出の不可能なると共に輸出品に對する回送（正金又は地金銀の回送をも含む）に依つて確保さるゝ利用し得べき資本存せざるに至る限りに於てのみ、貨幣資本は影響を受け得るであらう。然るに英吉利の輸出品も亦當時、販賣するを得ずして大纏めに外國市場に堆積されてゐたのである。自己の正規營業資本の一部を鐵道株に拘束し、斯くて營業を維持すべく借受資本に頼つてゐたマンチェスター其他に於ける商人及び製造業者から云ふと、其の流通資本は固定したことになるので、隨つて彼等は夫れに伴ふ結果を忍ばねばならなかつたのである。されど若し、彼等が其營業に使用すべき、而も其營業から引上げた資本をば、鐵道に放下する代りに、例へば鐵、石炭、銅等の如き夫れ自體がまた流通資本である所の生産物を生ずる鑛山に放下したとしても、結果は矢張り同一であつたらう。

凶作、穀物の輸入、金の流出等に基き、利用すべき貨幣資本が現實に於て減少したと云ふことは、勿論鐵道詐偽とは何等關係する所なき出來事であつた。「殆んど總



ての商會は、鐵道に貨付を放下すべく、其營業を多かれ少なかれ餓死せしめ始めたるなり。——「諸商會の鐵道になせる貨幣は極めて多額に上り、爲に之等の商會は手形の割引に依つて銀行に倚賴すること餘りに甚しく、彼等は斯くして其の商取引を維持せんとするに至れり」(同上ホッグソン前掲報告第六七頁)。「マンチエスターに於ては、鐵道投機のため莫大の損失を醸したり」(第一卷、第一三章、第三節)及び其他の場所に屢々引抄せるロバート・ガードナー、證述第四八七七號前掲報告)。

一八四七年の恐慌の主要なる一原因たりしものは、即ち異常なる市場過充及び東印度商品取引に於ける制限なき詐偽であつた。然し又、此の取引方面に於ける極めて富裕なる諸商會を破産せしめたる他の事情もあつたのである。「彼等は豊富なる資力を有し居りしも、之れを流用し得るものたらしむると不可能なりき。彼等の全資本はマウリチウス島に於ける不動産、又は製藍及製糖諸工場に拘束せられ居りしを以てなり。彼等は五十萬乃至六十萬磅に達する債務を引受けし後なるを以て、其爲替手形の支拂をなすべき流用資金を毫も有せず、斯くして遂に、其

手形の支拂をなすため全く信用に頼るの外なきを知るに至りしなり」(リヴァプールに於ける大なる東印度商人チャールズ・スターナー、第七三〇號前掲報告)。更らにガードナーは曰く(第四八七二號前掲報告)「支那條約の締結後忽ちにして我が對支貿易の驚くべき擴大に對する大見込み開け、かくて明かに此取引に應ずる目的を以て、主として支那市場に需要せらるる木綿品を製造すべく幾多の大工場設立さるゝに至れり。而して之等の工場は、我が一切の現存工場に追加せられたるなり。——第四八七四號「此營業は如何に成り行きしか?」答「殆んど筆紙に盡されざる程の不祥なる結果を見たり。一八四四年及四五年支那に供給せられたる總ての積送品中、其三分の二以上の額が回収せられたることありしとは信ぜられず。茶は主たる輸出返荷にして、加ふるに斯る大見込み開けたるを以て吾人製造業者は必ず茶税の大輕減行はるべきを豫期したり。」而して今や——素朴に言ふと——英國製造業者の特徵的信條に逢着するのである。曰く「我が對外國市場貿易は、本邦生産物に對する外國市場の消費能力に依つて制限せらるゝものにあらず、寧ろ我が産業生産物の返荷として受くる生産物に對する本邦内地の



消費能力に依つて制限せらるゝものなり」と。(英吉利の貿易相手たる比較的貧弱なる諸國は、英國製造品の如何なる可能量の代價をも支拂ふを得、又それを消費し得ること勿論なるに、富裕なる英吉利の方は不幸にして回送生産物を消化し得ないのである)。第四八七六號「最初予は若干の商品を積送せり。而して之等の商品は約一五パーセントの損失を以て販賣せられたり。而も其際予は、予の代理人が極めて安價に茶を購買し得るを以て、之れを國內に再販賣することに依り右の損失を償ふに足る大利潤を收納し得るものと固く信じたるなり。然るに予は利潤を得ずして、却つて往々二五パーセント、甚だしきは五〇パーセントにも及ぶ損失を蒙りたり。」——第四八七七號「製造業者等は自己の計算を以て輸出せるか？」答「主として然り。商人等は難て、此方法の無効なることを知りたるもの如く、製造業者等に對し、自ら輸出貿易に従事せんよりも、寧ろ委託販賣をなすべく慫慂せり。」——反對に一八五七年に於ては、損失及び破産は主として商人の肩に懸つた。今度は製造業者等の方が、「自己の計算を以て」外國市場を過充せしむる任務を商人等に委ねたからである。

銀行營業の擴大 (下記イブスウキツチ地方の實例を見よ。同地方に於いては一八五七年に至る數年間、小作農業者の預金は四倍に増大したのである) せる結果、從前私的退藏貨幣又は鑄貨準備金たりしものが、一定の期間に亙つて常に貸付資本に轉化すると云ふ事實に基く、貨幣資本の擴大は、生産資本の増大を言ひ現はすものではない。それは尙倫敦の株式諸銀行に依つて預金利子が支拂はれ始むるや否や其預金の増大したと云ふ事實が、生産資本の増大を言ひ現はす者ではないのと同じである。生産規模が不變なる限り、右の如き貨幣資本の擴大は生産資本に比較して貸付貨幣資本を豊富ならしむるものに過ぎぬ。故に利子率は低減するに至るのである。

再生産行程が再び過度なる緊張前に行はれたる隆昌状態に達すると、商業上の信用は事實に於て矢張り資本回流の輕易と生産の擴大とを「健全なる」基礎とする所の、極めて顯著なる擴大を見るに至るのである。斯る状態に達すると、利子率は其最低水準以上に増騰するとは云へ、而も尙依然として低歩たるのである。



斯くの如き状態は、實際のところ、低歩なる利子率随つて又貸付資本の相対的豊富が産業資本の現實的擴大と一致すると云ひ得る唯一の時期なのである。資本回流が輕易に且つ規則正しく行はれると云ふ事實、並に商業上の信用が擴大すると云ふ事實は、需要の増大するに拘らず尙且つ貸付資本の供給を確實たらしむるのであつて、利子率の水準の上進を妨げるのである。他方に於て、何等の準備資本もなく、或は總じて何等の資本もなくして營業に従事し、斯くして全く貨幣信用に依つてのみ操業する所の騎士たちが、今や始めて顯著に出現し來たるのである。加ふるに又、有らゆる形態の固定資本が著しく増大し、幾多の潤大なる新企業が開始さるゝこととなる。利子は今や其の平均的水準に上進する。而して新たな恐慌が襲來し、信用が突然停止して、了ひ、支拂が停滯し、再生産行程が麻痺して、――曩に掲げた諸例外はあるにせよ――貸付資本が殆んど絶對に缺乏すると同時に、不使用産業資本は過充を來たすと云ふ状態の生ずるや否や、利子は再び其の最高水準に達することとなるのである。

斯くて大體を云ふと、利子率に依つて言ひ現はさるゝ如き貸付資本の變動は、産

業資本の運動とは反對の方向に傾くものである。低歩なりとは云へ、而も最低水準以上に立つ利子率が、恐慌後に於ける營業の『回復』と信頼の増大とに一致する段階、特に又、利子が其の平均的水準、換言すれば其の最高水準と最低水準との眞の中間に達する段階こそ、貸付資本の豊富と産業資本の顯著なる擴大との一致を言ひ現はす所の唯一の時期たるものである。されど産業循環の發端に於ては、低歩なる利子率は産業資本の縮小と一致し、産業循環の終末に於ては、高歩なる利子は産業資本の過多と一致する。營業の『回復』に伴ふ低歩の利子率は、商業上の信用は尙自立し居るを以て銀行信用の助力を要すること至つて鮮少なりとの事實を言ひ現はすものである。

産業上の循環なるものは本來、最初の刺戟が一度び與へられると同一の循環は周期的に反覆されねばならぬと云ふ風になつてゐる(八)。沈衰状態の場合には、生産は其従前の循環に於て到達せる、而して今や其技術上の基礎の据えられ居る水準以下に降落する。好景氣の時期――即ち中間期――に於ては、生産は、此の基礎上に更に發展し行くのである。過剰生産及詐偽の時期に於ては、夫は極度に――



生産行程の資本制的制限を超越する迄も——生産力を緊張せしめるのである。

(八)「最近の一般的大恐慌以來此點に一轉機の生じたことは、既に箇の場所にて述べた通りである。從來十年毎に循環せる周期的行程の急性的形態は、比較的短期間に止まる微弱なる營業回復と比較的長期間に互る不明確なる營業不振との、より慢性的にして彌久的なる交代——産業國の異なると共に又其の配分の時期を異にせる所の——に變つたものゝ如く見える。されど問題は恐らく、循環の繼續期間の延長と云ふことに止まるであらう。世界貿易の幼少期たる一八一五年より四七年に至る間、循環は約五年毎に生じた事を立證し得る。一八四七年より六七年至る期間に於ては、循環は明かに十年毎に生ずることゝなつた。我々は今や、新たに襲來すべき激烈無比なる世界恐慌の豫備期中に在るものであらうか？幾多の事實は夫れを指示するものゝ如く見える。最後に襲來したる一八六七年度の一般的大恐慌以來、著しき變化が生じた。交通機關の驚くべき擴大——大洋汽船、鐵道、電信、スエズ運河——に依つて、世界市場なるものは始めて現實の事實となつた。從來、英吉利は世界の産業を獨占してゐたが、今や數個の産業國が英吉利と競争の位置に立つやうになつた。世界の有らゆる部分に於て、従前に比し無限に廣大且つ多様なる放下部面が歐羅巴の過剩資本に對して開かれた。かくて此資本は従前よりも遙かに著しく撒布され、地方的の過度なる投機は一層容易に之れを制遏し得るに至つたのである。これら總ての事情に依つて、舊來の恐慌の中心及び恐慌發生の機會は、大抵除去され又は著しく薄弱となつたのである。同

時に、國內市場に於ける競争は、カルテル及トラストの面前に後退し、國外市場に於ける競争は、英吉利以外の總ての大産業國が自己を國防せる保護税の爲に制限を受くるに至つた。然るに此保護税なるものは、世界市場に對する支配を決定すべき、終極的なる一般的産業戰の準備に外ならないのである。斯様に舊恐慌の反覆に對抗する諸要素は、いづれも將來に於ける遙に強大なる恐慌の胚種を宿してゐるのである。—— F. E. W.

恐慌期に於て支拂要具の缺乏することは自明である。爲替手形の兌換は商品轉形その者に取つて代つた。而して此事たる、斯る時期に於ては、一部の商會は専ら信用に依つてのみ營業するが故に尙更ら著しく行はれるのである。一八四四年乃至四五年の夫れの如き無知にして背理なる銀行立法は、斯る貨幣恐慌を專ら一層甚だしからしめ得る。然し如何なる種類の銀行立法も、恐慌を除去することは出來ないのである。

再生産行程の全聯絡が信用に立脚する生産制度に於て、信用が突然停止し單に現金拂のみ行はるゝに至るや、支拂要具に對する強烈なる要求が生じ、かくして恐慌を招致するの已むなきに至ることは明かである。故に全恐慌は、一見信用恐慌並に貨幣恐慌たるに過ぎぬかの觀を呈するのである。而して實際のところ、單に



爲替手形の兌換てふことのみが問題たるのみである。然るに此手形の多數は現實の賣買を代表するものであつて、終極に於て全恐慌の根底をなすものは實に此手形が社會的要求を遙か超過せる程度に増大すると云ふ事實である。然し又同時に、此手形の莫大量は單なる詐偽的營業を代表するに過ぎぬものであつて、斯る詐偽的營業は今や公然現はれ來たり破裂するに至るのである。更らに、他人の資本を以て經營され而も失敗に歸したる投機があり、最後に又價值低減し或は全く販賣不可能たるに至つた商品資本、換言すれば、もはや決して實現され得ざる資本回流がある。再生産行程を斯く強制的に擴大せしむる人爲的の全制度は、例へば英蘭銀行の如き一銀行をして、其の發行銀行券により有らゆる詐偽的營業者に所要の資本を提供せしめ、又價值低減せる商品をば悉く其舊來の名目價值通りに購買せしめると云ふ方法に依つて救済され得るものでないことは勿論である。尙また、總ての事は此の場合轉倒して現はれる。蓋し斯くの如き紙券の世界に於ては現實の價格と其の現實の要素とは何處にも現はれず、現はるゝものはたゞ地金と硬貨と、銀行券と、爲替手形と、有價證券とのみに過ぎぬからである。此轉換は就

中、國內の全貨幣營業が密集してゐる中心地——倫敦の如き——に現はるゝものであつて、斯る中心地に於ては全行程は理解し難きものとなる。而も生産中心地に於ては、確かにそれ程ではないのである。

尙、恐慌期中表面に現はれ來たる産業資本の過多てふ事實に就ては、左の叙述を與へて置く。——商品資本なるものは、それ自身に於て同時に貨幣資本、換言すれば商品價格に依つて表章された一定の價值額である。それは、使用價值として觀れば一定量の一定使用對象であつて、斯る使用對象は恐慌の瞬間には過剩に存するものである。されど商品資本は、貨幣資本それ自體、換言すれば伏能的貨幣資本なる資格に於ては間斷なく伸縮しつゝあるもので、恐慌間際及び恐慌中に於ては此伏能的貨幣資本たる資格に於ける商品資本は縮小することゝなる。斯る商品資本は其の所有者及び彼れの債權者にとつて（同様にまた爲替手形並に貸付上の擔保としても）、自己の購買され、又自己を擔保として行はれたる割引及び貸付の成立せる當時に比し少額の貨幣資本を代表する。若し此事實が、一國の貨幣資本なるものは逼迫期に於ては減少すると云ふ主張の本義であるとすれば、それは畢



竟、商品價格が低落したと云ふ事に等しいのである。然し商品價格の斯くの如き崩落は、單に其従前の膨脹を償ふものに過ぎぬのである。

不生産階級並に固定的收入に依つて生活する人々の所得は、過剰生産及び過度なる投機と同時に生ずる價格膨脹の續く間大抵は不動である。かくて彼等の消費能力は相對的に減少するととなり、随つて又總再生産のうち通常彼等の消費に屬すべき部分に對する彼等の補償能力も減少することとなるのである。彼等の需要は名目上不變であつても、現實に於ては減少するのである。

輸出入に就ては、左の叙述を與へて置く。——總ての國々は順次に恐慌の渦中に捲き込まれる。そこで、若干の場合を除き、總ての國々は過度に輸出入をなせるものなること、随つて總ての國々にとり、逆なる支拂差額の存することが明かとなる。斯くて問題が支拂差額と云ふ點に存するものでないことは明かである。一例を挙げれば、英吉利は金の流出に苦しんでゐる。同國は餘りに輸入し過ぎたのである。然し同時に又、他の總ての國々は英國品を以て過充されてゐる。即ち彼等も亦餘りに輸入し過ぎたのである。或は餘りに輸入され過ぎたのである。(勿

論、信用に依つて輸出する國と、信用に依つて輸出することなきか、又は輸出するも僅少の程度に止まる國々との間には、區別が生ずる。而も此後の方の國々は信用に依つて輸入するのであつて、たゞ商品が委託の方法で之等の國々に輸送される場合のみさうではないのである)。恐慌は先づ英吉利に勃發し得るであらう。蓋し英吉利は、一般的の貿易差額順なるに拘らず、支拂差額換言すれば即時清算を要する満期支拂の差額は逆である故、其與ふる信用は最も多く、受くる信用は最も少ない國であるからである。支拂差額が斯く英吉利にとつて逆であると云ふ事實は、一部分は同國の與ふる信用に依り、また一部分は同國が諸外國に貸付くる資本は頗る巨額に上るため嚴密の意義に於ける貿易上の回荷以外に尙巨額の資本が商品の形を以て同國に回流し來ると云ふ事實に依つて説明される。(然し恐慌は又往々、英吉利より貿易並に資本に就ての信用を受くること最も多き邦國たる亞米利加に、始めて勃發したのである)。金の流出に依つて開始され又この流出を伴へる英吉利の恐慌は、部分的には其輸出業者の破産(これに就ては後段更らに説く)に依り、部分的には其商品資本の一部を安價にて國外へ驅逐することに依



り、又一部分には外國の有價證券を販賣し、自國の有價證券を購買する等の方法に依つて、英吉利の支拂差額を清算せしめるのである。所て今度は他國の番となる。支拂差額は一時、此國にとつて順であつた。然るに今や、平時存してゐた支拂差額と貿易差額との間の日限は、恐慌に依つて消滅するか、或は少なくとも短縮されることゝなつたのである。總ての支拂は一時に果されねばならぬ。英吉利の場合と同様の事實は、今や此國に於て反覆されるのである。英吉利は今や金の回流に逢着し、此國は金の流出に逢着する。一方の國に於て輸入超過として現はれる事は、他方の國に於ては輸出超過として現はれ、また反對の場合には反對の形に現はれる。されど總ての國々を通じて云へば、輸入超過と輸出超過との雙方が行はれたことゝなるのである。(我々は此場合、凶作等に就て言ふのではなく、通例の恐慌に就て語るのである)。語を換へて言へば、信用及び夫れに伴ふ一般的の價格膨脹に依つて助成さるゝ過剰生産が生ずるのである。

一八五七年、亞米利加合衆國に恐慌が勃發した。之れは英吉利より亞米利加への金流出を伴つた。然し亞米利加の膨脹が破裂すると、今度は英吉利に恐慌が襲

來して、亞米利加より英吉利へ金が流出することゝなつた。英吉利と歐洲大陸諸國との間にも同様の現象が生じたのである。一般的恐慌當時に於ては、支拂差額は各國、少なくとも商業の發達せる各國にとつて逆である。然し夫れは常に、交代齊射に於ける如く、順々に支拂當番の國に行はれてゆくのである。恐慌が例へば英吉利に勃發すると、斯る支拂期の順列は極めて短小なる一期間に縮約されることゝなる。斯る場合、すべての國々は同時に過剰輸出(隨つて過剰生産)と過剰輸入(隨つて過剰取引)とを行ふものなること、及び總べての國々を通じて價格は膨脹し、信用は過度に緊張するものなることが明かとなる。而して之等すべての國々を通じて同一の崩壊が生ずるのである。かくて、すべての國々は順々に金流出の現象に逢着するのであつて、此現象が斯く普遍的であると云ふ事實は、正に(一)金の流出なるものは、恐慌の現象に外ならぬものであつて、其原因ではないこと、(二)此流出が順次異なる國々に生ずる系列は、畢竟彼等の死命を制すべき順番が何時來るか、恐慌が何時彼等に襲來して其の潜伏的要素を爆發せしむるに至るかを示すに過ぎないと云ふことを證明するものである。



恐慌期に行はるゝ——爲替相場の變動あるにも拘らず——貴金屬の輸出をば單に英吉利の立場からのみ觀察して之れを純國民的の現象なりとし、而して恐慌期に英吉利の銀行が利子率を引上げる時は、他の有らゆる歐洲銀行もまた斯くするに至るとの事實、並に金の流出に關する嘆聲が今日英吉利に揚るとすれば、明日は亞米利加、明後日は獨逸及び佛蘭西に夫れが反響すとの事實に對して固く目を閉ざすと云ふことは、英吉利に於ける經濟學上の著述家たち（而して一八三〇年以降に於ける、語るに足る經濟文獻は、主として通貨、信用、恐慌等を取扱つた文獻に歸するものである）にとつて特徴的な事實である。

一八四七年「英吉利は其債務（大抵は穀物に就ての）を果たすの要ありき。而も此債務の多くは、不幸にして破産に依り果たされたるなり」〔富裕なる英吉利は破産に依つて、歐洲大陸及び亞米利加に對し蘇生の思ひがあつたのである〕。「然れども此債務たる斯く破産に依つて果たされざる限り、貴金屬の輸出に依つて果たされたるものなり」（『銀行條例委員報告、一八五七年』）。即ち英吉利の恐慌が銀行立法に依つて助長されざる限り、此立法は飢饉の際穀物輸出國を欺瞞して

最初に其穀物を奪ひ、次いでその穀物を購買すべき貨幣を奪ふ手段となるのである。されば斯る場合、みづから多かれ少なかれ缺乏に苦んでゐる國々に向け穀物を輸出することを禁ずるは、『穀物輸入上の債務をば破産に依つて果たさんとす』英蘭銀行の如上の計劃を防止すべき、極めて合理的な一手段たるのである。穀物生産者及び投機者たちの立場から云へば、斯る場合英吉利の爲に其資本を失はんよりも、寧ろ自國の爲に其利潤の一部を失ふ方が遙かに得策なのである。

以上の説明に依つて、商品資本は其の、伏能的貨幣資本を代表する資格をば、恐慌總じて又營業不振の際著しく喪失するものであるとが明かとなる。之れは空資本、換言すれば夫れ自身貨幣資本として取引所に流通しつゝある利付證券に就ても同様である。斯る證券の價格は、利子の増進する時下落するのである。更らにそれは、一般的の信用缺乏に依つても下落する。信用が斯く一般的に缺乏して來ると、利付證券の所有者たちは貨幣を得んとして、之れを大纏めに市場で賣り飛ばすことを餘儀なくされるのである。最後に株券に就て云へば、部分的には夫れを指圖書として得らるゝ収入の減少に基き、部分的にはまた屢々夫れに依つて代表



さるゝ企業の詐偽的性質に基いて、其價格は下落することとなる。此の空資本は恐慌期には非常に減少するものであつて、同時に其所有者が、之れを擔保として市場に貨幣を借受くる力も減少するのである。されど斯る有價證券の貨幣名稱の取引所相場が下落すると云ふ事は、其代表する現實的資本とは何等關係する所なく、而も現實的資本の所有者の支拂能力とは關係する所頗る多いのである。

### 第三十一章 貨幣資本及び現實的資本 II (承前)

貸付貨幣資本なる形態に於ける資本の蓄積が、如何なる程度まで現實上の蓄積即ち再生産行程の擴大と一致するかと云ふ問題は、尙依然その解決に達して居らぬのである。

貨幣の貸付資本化は、貨幣の生産資本化よりも遙かに單純な事件である。然し是れに就ては二個の事項を區別する必要がある。即ち

- (一) 貨幣が貸付資本に轉化すると云ふ、單にそれだけの事實。
  - (二) 資本又は收入が、貸付資本に轉化すべき貨幣に轉化すると云ふ事實。
- 産業資本の現實的蓄積と關聯せる、貸付資本の積極的蓄積を含み得るのは、たゞ此後ちの事實のみである。

#### (一) 貨幣の貸付資本化

生産上の蓄積に逆比例すると云ふ意味に於てのみ之れと關聯する所の、貸付資本の累積即ち過多が生じ得ることは、我々の既に見た通りである。之れは産業循



環の二個の段階中に生ずることである。即ち夫れは第一に、産業資本が其生産資本及び商品資本なる兩形態を通じて縮小する時、換言すれば恐慌後に於ける循環の始期に生じ、第二に、營業は回復し始め、而も商業上の信用が銀行信用を要すると尙僅少なる時期に生ずるのである。第一の場合には、従前生産及商業に充用されてゐた貨幣資本は不使用貸付資本として現はれ、第二の場合には、それは——今や産業資本家及び商業資本家が貨幣資本家に條件を課することゝなる故——著しき程度に、而も非常に低歩の利子率を以て使用されたものとして現はれる。貸付資本の過充は、第一の場合には、産業資本の停滞を言ひ現はし、第二の場合には、資本回流の流暢なること、信用の短期なること、及び自己所有の資本を以てする從業の優勢なることに基く、銀行信用に對する商業信用の相對的獨立を言ひ現はすのである。他人の信用資本を當てにする投機者たちは尙いまだ出現せず、自己所有の資本を以て從業する人々は、略々純粹なる信用操作から尙遙かに隔つてゐる。右の第一段階に於ては、貸付資本の過充は現實的蓄積の表章の正反對なるものであり、第二の段階に於ては、それは再生産行程の新たなる擴大と一致し、此擴大に伴

ふ者であるが、然し其原因ではないのである。貸付資本の過充は既に減退しつつある。それは最早、相對的の過充、即ち需要に比較しての過充に過ぎぬのである。かくして現實的蓄積行程の擴大は、兩場合を通じて促進されるところとなる。蓋し第一の場合には、低落せる價格と一致し、第二の場合には、徐々に増騰せる價格と一致する所の低歩利子に依つて、企業利得に轉化すべき利潤分は増大するに至るからである。これは、好景氣の絶頂期に當り利子が其の平均的水準に達した時更らに著しく行はれる。斯る時期に於ては、利子は増大するに相違なきも、利潤と同比例を以て増大するものではないからである。

他方に於て、何等の現實的蓄積なくとも、銀行制度の擴大及集中、並に通貨準備の貯蓄、或はまた私個人用支拂要具の準備金の貯蓄——此支拂要具をば常に短期間貸付資本に轉化せしむる所の——の如き單なる技術的手段に依つて、貸付資本の蓄積が行はれ得ることは、我々の既に見た通りである。故に此の貸付資本は又浮動資本<sup>(3)</sup>とも名づけられる。所て此の資本は常に短期間貸付資本たる形態を受くるに過ぎない（而して又其割引は、常に短期間に對してのみ與へられるものと



信ぜられてゐる)とは云へ、絶えず流入し流出しつゝある。即ち甲なる人が取去ると、乙なる人は持込むと云ふことになるのである。かくして貸付貨幣資本の量(茲に言ふ貸付とは、總じて數年間に互る貸付のことではなく、爲替手形及び預金を擔保に受けてなす短期貸付のみを指すのである)は、實際のところ現實に於ける蓄積からは全く獨立して増大することゝなるのである。

『一八五七年の銀行委員』第五〇一號問——「貴下は如何なる者を浮動資本と言はるゝか?」「英蘭銀行總裁ウエグエリン君」『それは短期の貨幣貸付に流用し得る資本のことなり。』……(第五〇二號)即ち『英蘭銀行……並に地方諸銀行發行の銀行券及び國內に存する貨幣額』等これである。問「當委員に與へられたる供述に依つて判ずるに、貴下の言はるゝ浮動資本の意が現實の流通(即ち英蘭銀行券の)に外ならずとせば、此の現實的流通の上に極めて顯著なる動搖生ずるものとは信ぜられざるべし?」「されど此の現實的通貨を前貸する人の如何に依り、即ち夫れを前貸するものが貨幣貸付者であるか、それとも再生産に従事しつゝある資本家自身であるかと云ふことに依つて、極めて大なる區別が生じ來たるのであ

る。ウエグエリンの答「予は銀行業者の準備金をも浮動資本の中に包含せしむるものにして、此準備金たる、元來顯著なる動搖を蒙るものたるなり。」換言すれば、銀行業者等に依つて再び貸付けらるゝことなく、寧ろ彼等の準備金として、大抵は又自己の預入さるゝ英蘭銀行の準備金として作用する所の預金分の上に、顯著なる動搖が生ずることゝなるのである。最後に此の同じウエグエリン君は、浮動資本とは地金即ち正金及び硬貨に外ならないと云つてゐる(第五〇三號)。貨幣市場に於ける信用上の斯る囁語に依つて、經濟上の有らゆる範疇が如何ばかり異なるか、眞に驚くべき事である。即ち此の囁語に依れば、浮動資本なるものは自己とは勿論全く別物たる流通資本の表辭であり而して貨幣は資本であり、地金は資本であり、銀行券は通貨であり、資本は商品であり、債務は商品であり、固定資本は容易に販賣し難き紙券に放下せる貨幣である! 『倫敦の株式諸銀行は……一八四七年に八百八十五萬七百七十四磅なりし其預金をば、一八五七年には四千三百十萬七百二十四磅に増加したり。……當委員に與へられたる供述及證言に依れば、此莫大額の著しき部分は従前該目的に流用す



るを得ざりし資源に基くものにして、且つ銀行業者と計算を開始し彼れに預金するの習慣は、從來自己の（！）資本を斯く放下することなかりし幾多の階級に及べりとの結論を下し得るものなり。地方私營銀行「株式銀行と區別せる」協會長にして、當委員に證述を與ふべく同協會より派遣されたるロッドウエル君の語る所に依れば、此習慣は最近イブスキッチ地方の資本家的小作農業者及び小賣商人の間に四倍の普及を見たる由にて、殆んど總ての小作農業者——甚しきは年五十磅の地代を納付するに過ぎざる者と雖も——は、今や銀行に預金を有すとの事なり。斯る預金の多くは、言ふ迄もなく實業上に使用さるゝに至るものにして、特に商活動の中心たる倫敦に吸引せらるゝ傾あり。同地に於て此預金は先づ、倫敦諸銀行の取引客に對する手形割引及び其他の貸付に使用せらる。されど銀行業者自身に依つて即時使用さるゝを得ざる、此預金の顯著なる部分は手形仲買人の手に移るものにして、手形仲買人は其代りに自己が嘗て既に倫敦及諸地方在住の人々の爲に割引せる商業手形を銀行業者に與ふるものなり（『一八五八年の銀行委員』第八頁）。

銀行業者は手形仲買人の既に一度び割引せる爲替手形を擔保に受けて後者に貨幣を前貸するものであるが、彼れは斯くすることに依つて事實上更らに再割引を行ふととなるのである。然し斯る爲替手形中の極めて多くは、現實に於て既に手形仲買人に依り再割引され居るものであつて、仲買人は其手形を銀行業者に再割引せしめて得る其貨幣を以て新なる爲替手形を再割引するのである。之れが如何なる事實に歸結するかは、左の一節に依つて知られる。——「融通手形及び白地信用手形は大なる空信用を齎したり。而して此事實は、斯る手形を割引せる後更らに倫敦市場に於ける手形仲買人をして之れを再割引せしめたる——而も此手形の其他の性質に顧慮する所なく、専ら銀行の信用のみを當込にして——地方株式諸銀行の處置に依りて著しく促進せられたるものなり」（前掲報告同頁）。此再割引と、貸付貨幣資本の斯る純技術的増大が信用詐僞の上に與ふる助勢とに就ては、「エコノミスト」誌より拔萃せる左の一節は興味あるものである。——「多年に互り、國內の若干地方に於ては資本「即ち貸付資本」は充用し得るよりも急速に蓄積されたが、他の諸地方に於ては、資本其者よりも其放下手段の方が



急速に増大した。斯くて農業諸地方に於ける銀行業者は其預金をば自己の地方に有利確實に放下するの機會を見出さなかつたが、工業諸地方及び商業都市に於ける銀行業者は其供給し得る以上に多大の資本需要を有するに至つた。異なる地方に於ける斯くの如き種々異なる事情に基き、資本の配分に從事する所の新種商會が近年發生し來たり驚くべき急速の擴大を遂ぐることゝなつた。斯る商會は通常手形仲買人と呼ばれてゐるが、現實に於ては最大規模の銀行業者であつて其營業とする所は、資本存するも夫れを使用すること不可能なる諸地方の銀行より其過剰資本、同様に又株式會社並に大商會より其一時使用されずにある遊資本をば明確に契約せる期間、明確に約定せる利子を以て借受け、此貨幣をば資本のより多く需要さるゝ諸地方の銀行により、高き利子率を以つて貸付くるにある。而して此貸付は、通常斯る銀行の取引客の手形を再割引することに依つて爲されるのである。……斯くしてロンバード街は、資本を有用に使用すると不可能なる國內の部分より其需要存する他の部分へ不使用資本を移轉する所の大中心點となつた。而して此事たる、國內の種々なる部分に對して當籤る如く、又それと同様の

位置に在る個々人に對しても當籤るのである。斯る取引は、本來殆んど全く銀行の意に適ふ副抵當に基く貸借にのみ限られてゐた。されど國內の資本が急激に増大し且つ銀行の設置に依り益々節約さるゝに應じて割引所の支配に屬する資金は著しく増大するととなり、斯くて割引所は先づ船渠倉庫預り證（船渠内の商品に對する保管證）、次に未だ到着せざる生産物を代表する船荷證券——時として（通例ではないにしても）此生産物に就き既に爲替手形が商品仲買人に對して取組まれてあるとは云へ——を擔保に受けて前貸をすることを企つるに至るのである。此常習は繼て英國に於ける營業の全性質を一變せしめた。斯様にしてロンバード街に依つて與へられた促進に基き、ミンシングレーンに於ける商品仲買人等の位置は非常に強められることゝなつた。而して彼等は又輸入商人等に全利益を與へたのである。輸入商人等は、大に此機を利用した。斯て、二十五年前に若し一商人が自己の船荷證券又は船渠倉庫領り證すらも擔保として貨幣を借受けたとすれば、其信用は失墜したであらう程であるに拘らず、斯る方法は今では常則と見做され、もはや二十五年前に於ける如き稀有の例外とは見做し難



くなつたほどに普及してゐる。寔に此制度は、遠隔植民地の田畑に尙栽培されつ、ある農作物に對して取組まれたる爲替手形に就き多額の取引がロンバード街に行はるゝほど著しく普及することゝなつたのである。斯る融通の結果は即ち輸入商人が其外國取引を擴大して從來自己の營業の運用に使用せる浮動資本をば最も忌むべき投資部面たる植民地の栽植事業——自己の支配の殆んど或は全く及ばざる——に拘束するに至つたと云ふことである。かくて我々は信用の直接的連鎖の存するを見る。即ち農業諸地方に於て蒐集された國內の資本は、小額づゝ地方諸銀行に預入され、而してロンバード街に於ける投資の目的を以て集中されるのである。然るに此資本は先づ、我が採鑛地方及び農業地方の銀行に對して手形再割引をなすことに依り、之等の地方に於ける營業の擴大に利用され、次に又船渠倉庫預り證及船荷證券を擔保に受けてする貸付に依り、外國産物の輸入業者により、大なる融通を與ふることに利用された。此融通に依つて、外國並に植民地との取引に従事する諸商會の「正規」の商人資本は遊離されて最も忌むべき投資種類たる海外の栽植事業に利用し得るものとなつたのである。」「(「エコノミ

スト」誌、一八四七年卷、第一三三四頁)。

これぞ信用の「美しき連鎖」である。地方の預金者は、たゞ其の取引銀行業者の手にのみ預金するものと想像し、而して更らに、此の取引銀行業者が貸付をなすとすれば、其貸付を受くるものは即ち此の銀行業者の知己たる私個人であると云ふ風に考へてゐる。彼れは自己の取引銀行業者が其の預金をば倫敦に於ける手形仲買人——その操作に對し、彼等は共に些の支配をも有せざる——の處理に任せると云ふ事實に就ては、毫も氣付いて居らぬのである。

大規模の土木企業、例へば鐵道敷設に就ての拂込資本が、其現實に使用さるゝに先だち常に一定期間銀行の支配に屬することゝなる結果、之等の企業が如何に貸付資本を一時的に増殖せしめ得るか、と云ふことは、我々の既に見た通りである。

尙、貸付資本の量は通貨の量とは全く異なるものである。茲に通貨の量と云ふは一國に存する有ゆる流通銀行券及び硬貨——貴金屬の地金をも含む——の總和を意味する。此通貨量の一部は量的に絶えず變化しつゝある、銀行の準備金を成



すものである。

「一八五七年十一月二日「一八四四年の銀行條例施行の停止せられたる日」英蘭銀行——有ゆる支店銀行を含む——の總準備金は五十八萬七百五十一磅に過ぎざりき。而して預金總額は同時に二千二百五十萬磅に上りたり。中約六百五十萬磅は、倫敦に於ける銀行業者の手に屬せるものなり。」（「一八五八年の銀行委員」別丁第五七頁）

利子率の變化は（長期に互る變化、又は異なる國々に於ける利子率の差異は暫らく措く。前者は一般的利潤率の變化に依つて條件づけられ、後者は利潤率の差異並に信用發達上の差異に依つて條件づけらるゝものである）貸付資本（他の總ての事情即ち信賴の状態等に變化なき限り）即ち硬貨及銀行券の如き貨幣の形態を以て貸付らるゝ資本、換言すれば商業上の信用に依り、夫れ自體として商品形態のまゝ、再生産當事者自身の手へ貸付けらるゝ産業資本とは區別せる資本の供給の如何に懸るものである。

されど斯る貸付貨幣資本の量は流通貨幣の量とは異なる者であり、又夫からは獨

立せるものである。

例へば二十磅なる貨幣が日に五回貸付らるゝとすれば、一百磅なる貨幣資本が貸付らるゝ事となるであらう。而して之は同時に、右の二十磅が尙少くとも四回購買要具又は支拂要具として作用すべきものであることを含むであらう。なぜならば、購買及支拂の媒介なく、従つて右の貨幣額が少くとも四回、資本の轉化せる形態、即ち商品——勞働力をも含む——を代表することなきものとすれば、夫れは一百磅なる一資本たらずして、寧ろ二十磅づゝの請求權五個をなすに過ぎぬこととなるであらう。

信用の發達せる諸國に就ては、次の如く假定することが出来る。それは即ち貸付に使用し得る一切の貨幣資本は、銀行並に貨幣貸付者の手に在る預金の形態を執つて存すると云ふことである。これは一般營業にとつては、少くとも大體に於て當嵌ることである。加ふるに、好景氣の際嚴密の意味に於ける投機が自由に活動するに至る以前、信用を受くること容易にして且つ信賴の増大しつゝある當時に於ては、流通機能の大部分は金屬貨幣又は紙幣の力を借らず、單なる信用移轉に



依つて全うされる。

比較的少量の流通要具を以て多額の預金を得る單なる可能は、一に左の事情の如何に懸るものである。

(一) 同一の個貨に依つて爲さるゝ購買及支拂の數。

(二) 此の個貨が預金となつて銀行の手に戻り來たり、斯くして夫れが購買要具及支拂要具たる資格に於て反覆する機能をば、其の新規預金化に依つて媒介せしむる回歸運動の數。例へば、小賣業者が毎週一百磅の貨幣を銀行業者の手に預入し、銀行業者は此の貨幣を以て製造業者の預金の一部を拂出し、製造業者は又之れを其の勞働者に支拂ひ、勞働者は更に之れを小賣業者に支拂ひ、而して小賣業者は之れを新たに銀行に預入するとする。即ち小賣業者の預入せる一百磅は、第一に製造業者の預金を拂出し、第二に勞働者の賃銀を支拂ひ、第三に小賣業者自身の手代金を支拂ひ、第四に此の同じ小賣業者の貨幣資本の更に新たなる一部を預入することに役立つた譯である。蓋し此の小賣業者自身が銀行より右の貨幣を引出すを要さないとすれば、二十週間の終末に至ると、彼れは同一の一百磅を以て二

千磅なる額を銀行業者の手に預入することゝなるであらう。

此の貨幣資本が如何なる程度まで使用されずにあるかを示すものは、たゞ銀行準備金の出入運動のみである。故に一八五七年に於ける英蘭銀行總裁ウエグエリン君は英蘭銀行の金は「唯一の」準備資本であると結論してゐる。——第一二五八號「予の觀る處に依れば、割引率なるものは國內に存する不使用資本の額に依つて事實上決定せらるゝものなり。而して不使用資本の額は英蘭銀行の準備金——事實に於て金準備たる——に依つて代表せらる。故に金の輸出せらるる時、國內に存する不使用資本の額は減少することゝなり、斯くして殘留分の價値は増大するに至るものなり。」——第一三六四號「英蘭銀行の金準備なるものは事實上中央準備金、換言すれば英吉利に於ける全營業の依つて運用せらるべき正金準備たるなり。……常に外國取引所相場の影響を受くるものは、即ち此の準備金即ち正金貯溜なり」(「銀行條例報告、一八五七年」)。

現實的資本換言すれば生産資本及商品資本の蓄積に就いて、輸出入の統計は一



の標準を與ふるものである。此の統計は常に左の事實を示す。それは即ち、十年毎に反覆する循環の形を採つて運動せる、一八一五年より一八七〇年に至る英國産業の發達期に於て、恐慌前の最終好景氣期に見受けられた最大限度は、常に其次に來たる好景氣期の最小限度として再現し、然る後從前のものよりも遙かに高き最大限度に達すると云ふことである。

好景氣の年たる一八二四年に於ける大英國及愛蘭の輸出生産物の現實的價值即ち申告價值は、四千三十九萬六千三百磅であつた。此輸出額は次いで一八二五年の恐慌襲來と共に、右の額以下に下り、年三千五百萬磅と三千九百萬磅との間を上下することゝなつた。然るに一八三四年に至り景氣恢復すると共に、それは從前の最高水準を突破して四千一百六十四萬九千一百九十一磅に上り、而して一八三六年には五千三百三十六萬八千五百七十一磅と云ふ新たなる最大限度に達した。續いて又一八三七年に至り、更らに四千二百萬磅に下り——これに依つて見ても既に、新たに生じたる最小限度は舊來の最大限度よりも高いことが分る——然る後、五千萬磅と五千三百萬磅との間を上下するに至つた。一八四四年に至り

景氣恢復せる結果、輸出額は五千八百五十萬磅に増進した。即ち一八三六年の最高限度は最早、遙かに凌駕されることゝなつたのである。續いて一八四五年、輸出額は六千十一萬一千八十二磅に達し、一八四六年には五千七百萬磅強に下り、一八四七年には約五千九百萬磅、一八四八年には約五千三百萬磅となり、更らに一八四九年には六千三百五十萬磅、一八五三年には約九千九百萬磅、一八五四年には九千七百萬磅、一八五五年には九千四百五十萬磅、一八五六年には約一億一千六百萬磅となり、而して一八五七年には一億二千二百萬磅なる最大限度に達した。次いで一八五八年に至り一億一千六百萬磅に下つたが、一八五九年には既に一億三千萬磅となり、一八六〇年には約一億三千六百萬磅に増進し、一八六一年に至り一億二千五百萬磅に下つた（此場合にも新たなる最小限度は舊來の最大限度よりも高いのである）が、一八六三年には一億四千六百五十萬磅に達したのである。

市場の擴大を示す處の輸入に就ても、勿論同様の傾向を立證し得るであらう。然し茲ては、生産規模のみが問題なのである。「勿論之れは英吉利に就ては、事實上の産業獨占が行はれるた時期に對してのみ當筋ることである。されど之れは總



じて又、近世的大産業の行はるゝ諸國全體の上にも——世界市場が尙擴大しつゝある限り——當嵌るのである。——F.E.]

(二) 資本又は収入の貸付資本化さるべき貨幣への轉化。

本論に於ては、商業信用の流動の停滯なり、現實に流通しつゝある貨幣又は再生産當事者の準備資本の節約なりの、何れをも言ひ現すものではないと云ふ方面から見た貨幣資本の蓄積を攻究しようとするのである。

此の兩場合以外に於ては、貨幣資本の蓄積なるものは異常なる金輸入——一八五二年及五三年、濠洲並にカリフォルニアに新たなる金鑛の發見されたる結果生じたる如き——に依つて喚び起さるゝものである。斯る金は英蘭銀行に輸入され、預金者等は其代りに銀行券を受けた。彼等は此銀行券を直接、銀行業者の手に再預入せる者ではなかつた。斯くて流通要具は非常なる増大を來たしたのである。(ウエグエリンの供述。「一八五七年の銀行委員」第一三二九號)。英蘭銀行は割引率を二パーセントに低減するとに依つて、此預金を利用しようとした。一八五三年の六箇月間に互り、同銀行に累積せる金の量は二千二百萬乃至二千三百萬

磅に増大した。

有ゆる貨幣貸付資本家のなす蓄積は、常に直接貨幣形態に於て行はるゝものであることは言ふまでもない。然るに産業資本家の現實的蓄積が通常再生産資本自體の諸要素の増大に依つて行はるゝものであることは、我々の既に知れる通りである。されば信用制度が發達し貨幣貸付營業が大銀行の手に異常なる集中を遂ぐると云ふ事實は、夫れ自體に於て既に、貸付資本の蓄積をば現實的蓄積とは異なる一形態として速進せざるを得ないのである。貸付資本の斯くの如き急激なる發達は、再生産行程の發達に基く者であり、隨つて現實的蓄積の一結果たるのである。而して貨幣資本家に依る蓄積の源泉たる利潤は、再生産に従事する資本家の打出する餘剩價值よりの一控除分(同時に又他人の貯蓄に對する利子の一部分の占有)に過ぎぬものである。貸付資本は産業資本家及び商業資本家の雙方を同時に犠牲として蓄積される。

産業循環の不利なる段階に於て、格別不利なる位置に在る個々營業部門の利潤をば一時悉く吸収するに至るほど著しく利子率が増進し得るものであるとは、我



々の既に見た通りである。之れと同時に、國債券及び其他の有價證券の価格は低落する。貨幣資本家等が價値の低減せる之等證券を大纏めに買上げるのは、即ち斯る時期に於てである。それは、之等の證券が後來の産業循環段階に入るや、遂て再び其平常の水準に復騰し、之れを突破するに至るからである。然る場合、之等の證券は再び賣り飛ばされ、斯くして公衆の所有に屬する貨幣資本の一部は占有されることとなるのである。而して斯く賣り飛ばされざる部分は元來價格以下に購買されたものである故より、高歩の利子を齎らすのである。されど貨幣資本家は自ら獲得し資本に再轉化する一切の利潤をば、先づ貸付貨幣資本に轉化する。故に貨幣資本家、銀行業者等を夫れ自體として考察する場合にも自己の母體たる現實的蓄積とは區別せるものとしての貸付貨幣資本の蓄積なるものは、既に此特殊の資本家階級に依る蓄積として行はれるのである。而して此の蓄積は、再生産行程の現實的擴大に伴ふ如き、信用制度の擴大ある都度、増進するを免れないのである。

利子率低歩なる時、貨幣資本の此價値低落は主として預金者の負擔に歸するも

のであつて、銀行の負擔に歸するものではない。株式銀行の發達前、英吉利に於ける有ゆる預金の四分の三は毫も利子を生ずることなく、銀行の手に保管されてあつた。今日、是れに對して利子が支拂はれるとしても、夫れは時下の利子率に比し少くとも一パーセントがた低いのである。

他の資本家階級の貨幣蓄積に就ては、利付證券に放下され而して此形態に於て蓄積さるゝ部分のことは暫く問題外に措く。我々は單に貸付貨幣資本として市場に投入さるゝ部分のみを考察することにしよう。

是れに就ては先づ、收入として消費さるゝことなく、専ら蓄積用として定められてあり、而も産業資本家自身の營業内に直接何等の用途をも有せざる利潤分が問題となる。此の利潤は之れを自己の價値の一部とする商品資本の裡に直接存して居り、此の商品資本と俱に貨幣に實現されるのである。所て斯る利潤は（今の所商人のことは暫く問題外に措く。商人に就ては後段特に述ぶることとする）商品資本の生産要素に再轉化しないとすれば、暫時貨幣の形態を保持して居らねばならぬ。此利潤の量は、利潤率低減する場合にも資本自體の量の増大と共に増



進する。収入として支出さるべき分は、次第に消費されるが、然し其途中預金として銀行業者の貸付資本を成すのである。斯くの如く、収入として支出さるべき利潤分の増大も亦、絶えず反覆され、徐々に進行する所の、貸付資本の蓄積に依つて言ひ現はされるのである。

而して蓄積用として存する他の利潤分に就ても、矢張り同様である。斯くて信用制度及び其組織の發達すると共に、収入の増大換言すれば産業資本家に商業資本家の消費の増進すらも貸付資本の蓄積として言ひ現はさるゝこととなる。而して此の事たる、徐々に消費さるゝ總ての収入、即ち地代、高級形態に於ける勞銀、不生産階級の所得等にも適用し得るのである。之等の収入は何づれも一定期間貨幣收入なる形態を執るものであり、随つて預金もまた貸付資本に轉化し得るのである。消費用に定められて居るにしろ蓄積用に定められて居るにしろ、有らゆる収入は何等かの貨幣形態を執つて存する限り貨幣に轉化せる商品資本の價值分であり、随つて現實的蓄積の表章たり結果たるものであるが、然し生産資本其者ではないのである。紡績業者が其紡絲を棉花と交換し、而も収入たるべき紡絲

分をば貨幣と交換するとすれば、彼れの産業資本の現實的存在たるものは即ち機織業者なり或は又私的消費者なりの手に移轉する所の紡絲これである。而して又實に此紡絲は——再生産用たると消費用たるとを問はず——資本價值並に其價值中に含まるゝ餘剩價值の存在たるものである。貨幣に轉化せる餘剩價值の大小は、棉花中に含まるゝ餘剩價值の大小に依つて定まる。然し斯る餘剩價值が貨幣に轉化する否や、此貨幣は該餘剩價值の價值存在に過ぎぬものとなる。而して此の餘剩價值は斯くの如き物として貸付資本の要素となるのである。それは、斯る餘剩價值が——其の所有者自身に依つて貸付られなかつたとすれば——預金に轉化すると云ふこと以上に何も要さないのである。然るに生産資本に再轉化される爲には、夫れは既に一定の最小限界に達して居らねばならぬ。



## 第三十二章 貨幣資本及び現實的資本Ⅲ（完結）

斯く資本に再轉化する貨幣の量は廣大なる再生産行程の結果であるが、然し夫れ自體として貸付資本として考察する時は、夫れ自身再生産資本の量たるものではない。

上段の説明中最重要なる點は、消費用に定められてゐる（此の場合、勞働者のとは問題外に置く。勞働者の収入は可變資本に等しいからである）収入分の擴大は、先づ貨幣資本の蓄積なる形態を執つて現はれると云ふとである。即ち貨幣資本の蓄積中には、産業資本の現實的蓄積とは本質的に異なる一要素が加はる。蓋し年生産物中消費用に定められてゐる部分は、決して資本とはならぬからである。其の一部は、資本、換言すれば消費資料を生産する人々の不變資本を補償するものであるが、然しそれは現實に於て資本に轉化する限り、右の不變資本を生産する人の収入の現物的形態を採つて存するのである。収入を代表し、消費の單なる媒介者として役立つに過ぎぬ其の同じ貨幣は、一定期間貸付貨幣資本に轉化するを

通則とする。此の貨幣は勞銀を代表する限り、同時に又可變資本の貨幣形態であり、消費資料を生産する人々の不變資本を補償する限り、彼等の不變資本が一瞬時採る所の貨幣形態であつて、彼等の補償を要する不變資本の現物的要素を購買するに役立つのである。斯る貨幣は右の何れの形態に於ても、夫れ自體に於て蓄積を言ひ現すものではない。（尤も其の量は、再生産行程の範圍の擴大と共に増大するものである）。されど此の貨幣は、一時的に、貸付貨幣隨つて貨幣資本たる機能を盡くすのである。故に此點より觀れば、貨幣資本の蓄積なるものは、現實に於てするよりも大なる資本蓄積を常に反映せねばならぬ。それは、個人的消費の擴大なるものは元來貨幣に依つて媒介されるものである故、貨幣資本の蓄積として現はるゝに至る結果である。蓋し此の擴大は、現實的蓄積の爲、即ち新たなる投資を開始する所の貨幣の爲に、貨幣形態を供給するからである。

故に貸付貨幣資本の蓄積なるものは、部分的には、左の事實以外に何物をも言ひ現はさいのである。それは即ち、産業資本が其の循環行程中に轉化し行く一切の貨幣は、再生産當事者等が前貸する貨幣の形態ではなく、彼等が借受くる貨幣の形



態を採るものであり、斯くして再生産行程中に行はるべき貨幣の前貸は、實際のところ借受貨幣の前貸として現はるゝに至ると云ふことである。商業信用の基礎上に於ては、事實上一方の資本家は他方の資本家に其の再生産行程に要する貨幣を貸付ける。然るに此貨幣は今や、左の形態を採る。即ち再生産資本家中の一部の者から夫れを借受け、銀行業者は再生産資本家中の他の一部の者にそれを貸付け、斯くして此銀行業者は授福者として現はれると同時に、此資本に對する支配は、全く仲立人たる資格に於ける銀行業者の手に歸するに至るのである。

尙叙述を要すべき貨幣資本の蓄積の若干の特殊形態がある。例へば生産要素即ち原料等の價格低落する結果、資本が遊離する。産業資本家が直接其の再生産行程を擴大すること不可能なる場合には、彼れの貨幣資本の一部は過剰分として循環中より驅逐され、かくして貸付貨幣資本に轉化する。第二に又、就中商人に就て云へば、其營業上に中止の生ずる時、貨幣形態に於ける資本は遊離するに至る。若し此の商人が既に一列の營業を處理せるものとし、而して斯る營業中止の結果後來に及んでいなければ、新たな一列の營業を開始すると不可能なる場合に立

ち至つたとすれば、實現された貨幣は彼れから觀れば、單に退蔵貨幣、換言すれば過剰の資本を代表するに止まるのである。然し此の貨幣は同時に又、直接、貸付貨幣資本の蓄積を代表する。第一の場合には、貨幣資本の蓄積なるものは、より有利なる條件の下に再生産行程が反覆されると云ふ事實、即ち従前拘束されてゐた資本の一部が現實に於て遊離するに至ると云ふ事實、換言すれば、同一量の貨幣を以て再生産行程を擴大し得るに至らしめると云ふ事實を言ひ現はす。反對に第二の場合に於ては、それは單に取引の流動が中絶すると云ふ事實を言ひ現はすに過ぎぬのである。然し此何れの場合に於ても、右の實現されたる貨幣は貸付資本に轉化し、其蓄積を代表する者であつて、貨幣市場及利子率の上に均等に作用する。尤も夫れは或場合には現實的蓄積行程の促進を言ひ現し、他の場合には其阻止を言ひ現はすものである。

最後に貨幣資本の蓄積は、富を集めて再生産より退去せる人々に依て生ずる。産業循環中に獲得さるゝ利潤が大なれば大なる程、斯かる人々の數は益々大となる。此場合、貸付貨幣資本の蓄積は一方には現實的蓄積（其相對的範圍より觀た



る)を言ひ現すものであるが、他方には産業資本家が單なる貨幣資本家に轉化し行く範圍を言ひ現はすに過ぎぬのである。

所で、他の利潤分たる収入として消費さるべく定められて居らぬ分に就て言へば、此部分は其獲得された生産部門に於ける營業擴大に直接これを使用し得ざる場合にのみ、貨幣資本に轉化するのである。之れは二個の原因から生じ得る。一は即ち、此の生産部門が資本を以て飽和し居ると云ふこと、他は即ち、資本として作用し得る爲には蓄積は先づ、此の一定營業内に於ける新投資の分量比例に準據せる一定の範圍に達して居らねばならぬと云ふとである。即ち此蓄積は先づ貸付貨幣資本に轉化し、他の部門に於ける生産の擴大に役立つのであつて、他の一切事情に變化なしとすれば、資本への轉化用に定められてある利潤の大小は、獲得利潤の大小の如何に懸り、かくて再生産行程自體の擴大の如何に懸ることゝなるのである。されど此新たな蓄積が其充用の際投資部門の不足と困難に逢着し、換言すれば生産部門の過充並に貸付資本の過剩供給が生ずるとしても、貸付貨幣資本の斯る過多は單に、資本制生産に制限があると云ふ事實を證明するに過ぎぬ。

次いで生ずる信用詐偽は、此過剩資本の充用上に何等の積極的障害も存しないと云ふ事實を示すのである。障害と云へば、只資本の價值増殖法則、即ち資本が資本として自己の價值を増殖するに當つての制限に基く障害が存するのみである。貨幣資本としての貨幣資本の過多なるものは、必ずしも過剩生産を言ひ現はすものではなく、又資本の放下部面の不足をも言ひ現はすものではない。

貸付資本が蓄積されると云ふことは、畢竟貨幣が貸付貨幣として沈澱すると云ふことに外ならぬ。此行程は現實上の資本化とは極めて異なるものであつて、資本に轉化し得ると云ふ形態を採つた貨幣の蓄積に過ぎぬのである。然し此の蓄積は、既に示した如く、現實上の蓄積とは極めて異なる諸事實を言ひ現はし得るのである。現實的蓄積が絶えず擴大しつゝある限り、貨幣資本の斯くの如き擴大せる蓄積は、部分的には現實的蓄積の結果であり、部分的には又現實的蓄積に伴ひ而も夫れとは全く異なる諸事情の結果である。而して最後に又、部分的には現實的蓄積の停滯せる結果たることもあり得るのである。貸付資本の蓄積は、現實的蓄積からは獨立し而も夫れに隨伴する所の、斯る諸事情に依つて膨脹するもの故、



單に此理由のみに依つても、産業循環の一定段階中絶えず貨幣資本の過多を來たし、而して此過多たる信用の成立と共に發達するを免れぬととなる。即ち信用の成立すると同時に、生産行程をば其の資本制限以上に擴大せしめ、かくして過剰商業、過剰生産、過剰信用等を生ぜしむる必要が發達し來たるを免れぬ。而して此事たる、又常に一の反動を招致する處の形態に於て生ぜねばならぬのである。

地代、勞銀等に基く貨幣資本の蓄積に就ては、茲に贅するの要はない。唯、次の一事のみを述べて置き度いのである。それは即ち、現實に於ける貯蓄及節約（貨幣退藏者に依る）が蓄積の要素を供給する此り、此の貯蓄及節約を行ふの任務は、資本制生産の發達に伴ふ分業の作用に依つて、斯る要素の最小分を受け且つ屢々自己の貯蓄を喪失するとすらある人々——銀行の破産せる場合に於ける勞働者等の如き——に一任されるに至ると云ふ事實である。一方に於て、産業資本家の資本は彼れ自身に依つて「貯蓄」さるゝものではなく、彼れは專る其資本の大小に比例して他人の貯蓄を支配するのである。他方に於て、貨幣資本家は他人の貯蓄をば自己の資本となし、また再生産資本家等が相互に與へ且つ公衆より受くる信

用をば自己一身の致富源泉たらしめる。資本は自己の勞働及貯蓄の嫩芽である。と云ふ、資本制度の最後の幻想は、斯くして破滅するに至るのである。利潤の存在が他人の勞働の占有にあると云ふのみではなく、此他人の勞働を運轉し搾取するに要する資本は又他人の所有物から成る者であつて、貨幣資本家は此所有物を産業資本家の支配に委ね、斯して今度は産業資本家を搾取するととなるのである。

信用資本に就て注意すべき尙若干の事項がある。

同一の個貨が如何に屢々貸付資本として作用し得るか、と云ふことは、既に述べた通り、全く左の諸事實に懸るのである。

(一) 販賣又は支拂の際、同一の個貨が如何に屢々商品價値を實現し以て資本を移轉するか、更に又同一の個貨に依つて如何に屢々收入が實現されるかと云ふこと。されば同一の個貨が、資本なり收入なりの實現された價値として如何に屢々他人の手に移轉さるか、かは、現實に於ける取引の範圍及分量の如何に懸ること明かである。

(二) 支拂上の節約、及び信用制度の發達並に組織の如何。



(三) 最後に、信用の連鎖及び活動速度の如何。即ち預金として或一點に停著せる同一の個貨が、直ちに又貸付貨幣として他の點に移動し行く事實の如何。

貸付資本の依つて存在する形態が、單に現實的貨幣即ち金又は銀、換言すれば價值標準として役立つ所の素材より成る商品たる形態に過ぎぬと假定しても尙、此貨幣資本の顯著なる部分は常に架空のものたり、又價值標徴の場合に於けると全く同様、價值に就ての名義たるを免れないのである。貨幣は資本の循環中に作用する限り、一瞬時貨幣資本を成すことは確かであるが、然し貸付貨幣資本に轉化するものではなく、寧ろ生産資本の諸要素と交換されるか、又は收入の實現する、場合に就て言へば流通要具として拂ひ渡されるかの何れかであつて、其所有者から云へば貸付資本に轉化し得るものではないのである。然し貨幣が貸付資本に轉化し、而して同一の貨幣が反覆的に貸付資本を代表する限り、此貨幣は或一點にのみ金屬貨幣として存することは明かである。他の總ての點に於ては、夫れはたゞ資本に就ての請求權と云ふ形態を採つてのみ存するのである。我々の假定に従へば、斯る請求權の蓄積なるものは、現實に於ける蓄積、換言すれば商品資本等の價

値が貨幣に轉化すると云ふ事實に基く。而も斯る請求權即ち所有名義の蓄積を、れ自體は、其源泉たる現實的蓄積並に貨幣の貸付に依つて媒介さるゝ將來の蓄積(新たなる生産行程)とは異なるものである。

貸付資本なるものは先づ常に貨幣の形態を採つて存在し(九) 後に及び貨幣に對する請求權として存在するに至る。蓋し貸付資本の依つて本來存在せる貨幣は、今や現實の貨幣形態を採つて貸付者の手に保有されてゐるからである。貸付者から云へば、此資本は貨幣に就ての請求權即ち一の所有名義に轉化したのである。故に同一量の現實的貨幣は、種々異なる分量の貨幣資本を代表し得る。實現された資本を代表するにしろ、實現された收入を代表するにしろ、何れにしても單なる貨幣は、單純なる貸付行爲に依り、即ち——發達せる信用制度の下に於ける普遍的形態を考察するとすれば——自己が預金に轉化すると云ふ事實に依つて貸付資本となる。預金は預金者の貨幣資本である。然し夫れは銀行業者の手中に於ては、自己の所有者の金庫内ではなく、銀行業者の金庫内に寝かされてある伏能的貨幣資本たるに止まり得るのである(十)。



(九)『一八五七年の銀行條例』銀行業者トゥエルヌの供述——第四五一六號、問『貴下は銀行業者として資本を取引する、又は貨幣を取引する、や？』答『貨幣を取引す』  
——第四五一七號、問『預金は如何なる形態に於て貴銀行に拂ひ込まれる、や？』答『貨幣に於て。』——第四五一八號、問『預金は如何なる形態に於て拂ひ出される、や？』答『貨幣に於て。』同『然らば預金なるものは貨幣以外の物と言ひ得る、や？』答『否』  
オヴアストーンは(第二六章を見よ) 絶えず、『資本』と『貨幣』との混同に處つてゐる。彼れに依れば、貨幣の價值なるものは、又貨幣の量に依つて決定されると云ふ方面から見た利子を意味する。而して資本の價值とは生産資本に對する需要並に此資本が賣らす利潤に依つて決定されると云ふ方面から見た利子であるとされてゐる。彼れは云ふ——第四一四〇號『資本なる語の使用は極めて危険なり』と。——第四一四八號『英吉利の金輸出は同國に於ける金の分最節減を意味し、而して此節減は當然に貨幣市場一般『従つて資本市場ではなく』に於ける需要の増大を招致するを免れず。』——第四一一二號『貨幣が國內を去るに比例して、國內に於ける其分量は低減するに至る。國內に残存する貨幣量の斯る低減は、此貨幣の價值増大を招致するものなり。』(彼れの説に依れば、之れは本來、流通の縮小に依つて商品價值に比較し貨幣としての貨幣の價值増進するに至ると云ふ事實を意味する。即ち貨幣の斯る價值増進は商品の價值低落に等しいのである。所が彼れも亦斯る間に、流通貨幣の量は價格を決定するものではないと云ふ事實を固く信ぜざるを得なくなつたので、利子を生ずる資本

としての貨幣の價值を増進せしめ、かくして利子率を増進せしむべき者は、今や流通要具としての貨幣の縮小であると云ふことになつた。』而して國內に残存する貨幣の斯る價值増大は輸出を阻止す。而して此の阻止たる、均衡を恢復するに必要な貨幣量を回復するに至るまで繼續するものなり。』オヴアストーンの矛盾の繼續は次註に掲げる。

(十)之れに就ては、右の雙方、即ち銀行業者側よりの支拂に對する請求權としての預金と、銀行業者の手に在る預入貨幣とが『貨幣』であると云ふ混同が生ずる。銀行業者トゥエルヌは一八五七年の銀行委員に對し、次の實例を擧げてゐる。『予は一萬磅を以て營業を開始す。中、五千磅を以て商品を購入して之れを在存となし、他の五千磅を以て必要の場合それに就て手形を振出すべく銀行業者の手に預入す。而も預金即ち貨幣の形態に於て存するは五千磅なるに拘らず、予は尙此總額たる一萬磅をば予の資本と見做すものなり』(第四五二八號)。此の實例に依つて、左の愉快なる論争が起つた。(第四五三一號)『さて、貴下は貴下の五千磅をば銀行券に於て他の何人かに與へたるなるべし？』答『然り。』第四五三二號『然る場合、彼れは五千磅を預金として有するなるべし？』答『然り。』第四五三三號『而して貴下は五千磅をば預金として有するなるべし？』答『全く貴言の通りなり。』第四五三四號『彼れは五千磅をば貨幣として有し、而して貴下は五千磅をば貨幣として有するなるべし？』答『然り。』第四五三五號『されど其は結局、貨幣以外の何物にもあらざるべし？』答『然り。』此混同は一部分に



は左の事情に基くものである。それは即ち五千磅を預入せるAなる人は、此預金に就て手形を振出すことが出来、依然として尙此貨幣を有するが如く自由に夫れを處分し得ると云ふことである。それ丈の範囲内に於て、此貨幣は彼れにとり、潜在的貨幣として作用するのである。されど彼れは、此貨幣に就き手形を取組む總ての場合を通じて、其預金をば夫れだけ消滅せしむることとなる。彼れが現實の貨幣を引出すと假定し而して彼れの貨幣は既に他へ貸付けられてある者とすれば、彼れは自己の貨幣を以て拂出を受くるものではなく、他人の預入せる貨幣を以て拂出を受くる譯である。彼れは其取引銀行業者に對する小切手を以て、Bなる人に負債を償却すると假定し、而してBは此小切手をば其取引銀行業者に預入し、又Aの取引銀行業者は同様にBの取引銀行業者に對する小切手を有するものとし、斯くて此の兩銀行業者は單に小切手の交換を爲すに止まるものとすれば、Aの預入せる貨幣は二回貨幣機能を盡したことになる。即ち最初はAの預入せる貨幣を受けた人の手に於て、次にはA自身の手に於てである。此第二の機能に就て云へば、夫れは貨幣の力に依らずして行はるゝ債務請求權（自己の取引銀行業者に對するAの債務請求權、及び此銀行業者がBの取引銀行業者に對して有する債務請求權）の相殺たるのである。此の場合、預金は二回貨幣として作用する。即ち最初は現實的貨幣として作用し、次には貨幣に就ての請求權として作用するのである。單なる貨幣請求權は、債務請求權の相殺に依つてのみ貨幣に取つて代り得るに過ぎぬ。

素材的富の増殖するにつれて、貨幣資本家なる階級が擴大する。即ち一方に於て、退去する資本家即ち所得に依つて生活する資本家の數及富が増殖し、他方に於て、信用制度の發達が促進され、かくして銀行業者、貨幣貸付者、金融業者等の數が増殖することとなるのである。

利用し得べき貨幣資本の發達するにつれて、利付證券たる國債券、株券等の發達し來たることは曩に述べた通りである。然し夫れと同時に又、利用し得べき貨幣資本の需要も増大する。蓋し之等の證券に就て投機事業を營む所の株式賣買人（さなるものは、貨幣市場に於て主役を演ずるからである。斯る證券の賣買が總て現實的投資を言ひ現すに止まるとすれば、之等の證券は貸付資本の需要に影響し得るものでないと言ふは妥當であらう。蓋しAなる人は、其證券を賣却する場合Bなる人が夫れに放下したと正に同額の資本を引取るからである。然し此證券は確かに存在してゐるに拘らず、本來それに依つて代表された資本は（少くとも貨幣資本としては）存在しないと云ふ場合にも、依然それだけの範圍に於て斯る貨幣資本に對する新需要が喚び起される。然し何づれにしても、従前Bの支配に



屬し、現在に於てAの支配に屬する所のものは貨幣資本なのである。

「一八五七年の銀行條例」第四八八六號——「割引率なるものは、他の有價證券種類とは區別せる商業手形の割引に利用し得べき、市場に存する資本の量に依つて調節されると云ふは、割引率の決定原因に對する説明として妥當のものなりと貴下は觀らるゝや？」「チャプマン」——「否、割引率なるものは、容易に兌換し得べき有ゆる有價證券(3)に依つて影響さるゝものと予は信ず。問題を單純に手形割引の論究に制限するは失當なるべし。蓋し最近著しく行はれたる如く、コンソル公債甚しきは又廠券を擔保とする強烈なる貨幣需要存し、而も其割引率は商業上の割引率よりも遙かに高歩なりとせる場合、我が商業界が其影響を受くることなしと斷ずるは不條理なるべし。そは寧ろ極めて重大なる影響を受くるなり。」——第四八九〇號「銀行業者の引受くる如き、佳良なる通用し得べき有價證券が市場に存し、而して其所有者は、是れに依つて貨幣の融通を受くるものとせば、そは確かに商業界の上に影響を及ぼすものなり。一例を擧ぐれば、コンソル公債其他を擔保とする場合には、六パーセントの割引率を以て貨幣を貸付け得る人が、商品手形

を擔保に受け五パーセントの割引率を以て同一の貨幣を予に貸付くべしとは期待し得ざる所なり。上記の事實も、同様にして商業界の上に影響を及ぼすものなり。即ち予が六パーセントの割引率を以て貨幣を貸付け得る場合、何人も予が五パーセント半にて其手形を割引すべきを期待する能はず。」——第四八九二號「固定投資として、二千磅、五千磅若しくは一萬磅分の有價證券を購買する人々に就ては、吾人は彼等が貨幣市場の上に何等か重要な影響を及ぼすかの如く語るものに非ず。コンソル公債を擔保とする場合に於ける割引率に關する貴問に答ふるに當り、予は數十萬磅の額に及ぶ取引をなす人々即ち所謂株式賣買人に就て云爲すものなり。彼等は多額の公債に記名し、又は市場に於て之れを購買す。彼等は此公債を有利に處分し得るに至るまで自己の手に保持するを要す。此目的の爲に、斯る人々は貨幣の融通を受けざるべからず。」

信用制度の發達するにつれて、倫敦の如き偉大なる集中的貨幣市場が生じて來る。斯る貨幣市場は同時に又上記の如き有價證券取引の中心たるのである。銀行業者は公衆の貨幣資本を、大體めに斯種の商人族の手に委ねる。斯くして此の



賭博者種屬は増殖するに至るのである。「株式取引所に於ては、貨幣は總じて他の何處に於けるよりも安價なるものなり」と、一八四八年時の英蘭銀行總裁は上院秘密委員に對し供述してゐる。〔一八四八年に於ける商業上の窮迫〕一八五七年印行第二一九號〕。

他の事情に變化なき限り、平均利子が多年に互り利潤の平均率に依つて決定されるものなることは、利子を生ずる資本を攻究せる際既に説明せる通りである。茲に利潤と云ふは企業利得の事ではない。企業利得とは、利潤から利子を減じたものに外ならぬのである。

産業循環中、商業利子（即ち商業界の範圍内に於ける割引及貸付に就て貨幣貸付者が計算する利子）の變化が利子率をして其の最小限を突破し中間的平均水準に達せしめ（利子率は後ち更らに此の水準をも突破するのである）、而して斯る運動をば利潤増進の結果たらしむる一段階に達着すると云ふ事——此事も又既に述べた處であり、後段更らに攻究する通りである。

然し是れに就いて二個の注意すべき事項がある。

第一に、利子率が長期に互つて高歩なりとすれば（茲に我々の云爲するは、中間的利子率の長期間一定し居れる、且つ又それが長期貸付に就て支拂はるゝ利子に依つて代表さるゝ、英吉利の如き與へられたる一國に於ける利子率のとである）斯る事實は明かに此期間利潤率の高きことを證明するものであるが、必ずしも企業利得の率高きことを證明するものではない。此後ちの區別は、主として自己所有の資本を以て従業する資本家等の目には多かれ少なかれ消滅するととなる。彼等は自ら自己に利子を支拂ふ故、高き利潤率を實現するのである。利子率をば長期間継続的に高歩ならしむる可能は——嚴密の意味に於ける逼迫の段階は、此の場合問題外である——利潤率高き場合に存する。然し又、此の高歩利率を控除せる後、右の如き高利潤率に残る處は、低歩なる企業利得率のみなることも可能である。此の企業利得率は、高利潤率の繼續中に萎縮し得るものである。斯る事の可能なるは、一度び著手された企業が繼續を要するからである。此段階に於ては、純粹の信用資本（他人の資本）を以て著しく事業が營まれる。而して高利潤率は往々思惑的たり豫想的たるを得る。利潤率高く而も企業利得低減せる場合に、



高歩の利子率が支拂れ得るのである。斯る利子率は利潤の中から支拂るゝものではなく、他人の所有に屬する借受資本自體の中から支拂はるゝものであり——而して此の事たる、一部のには投機の時期に行はるゝものである——且つ此事實は若干期間繼續するを得るのである。

第二、利潤率高きが故に貨幣資本に對する需要が増大し、斯くして利子率が増進するに至ると云ふ言ひ現しは、産業資本に對する需要が増大し、斯くして利子率が高歩となるに至ると云ふ言ひ現はしと同一のものではない。

恐慌期には貸付資本に對する需要、随つて又利子率は其最大限度に達し、利潤率随つて産業資本の需要は殆ど消滅することとなる。斯る時期に於ては、何人も支拂をなさんが爲、既に契約せる債務を償却せんが爲にのみ貨幣を借受けるのである。然るに恐慌後に於ける景況恢復の時期に於ては、貸付資本は購買せんが爲、且つ貨幣資本をば生産資本又は商業資本に轉化せんが爲に要求されるのであつて、斯る場合それは産業資本家又は商人の何れからも要求されるのである。産業資本家は其借受資本をば生産要具及労働力に放下する。

労働力に對する需要の増進は夫れ自體としては決して利潤に依つて決定されると云ふ方面から觀た利子率増進の原因たり得るものではない。労働の高き事は、利潤の高き事の原因たることはない。尤も産業循環の特殊段階に就て云へば前者は後者の結果たり得るのである。

労働の搾取が格別有利なる事情の下に行はれるとすれば、労働力に對する需要は爲に増進し得るものであるが、然し労働力随つて可變資本に對する需要の増進は夫れ自體に於て利潤を増大せしむる者ではなく、寧ろ夫れ丈け利潤を縮小せしむる者である。されど労働力に對する需要の増進すると共に、可變資本に對する需要随つて貨幣資本に對する需要を増大し得るのであつて、其結果利子率は高められることとなる。斯る場合、労働力の市場價格は其平均以上に上り、平均數以上の労働者が雇儲され、同時に利子率は増進する。右の如き事情の下に於ては、貨幣資本に對する需要が増大するからである。労働力に對する需要の増大は、他の總ての商品の場合に於ける如く、此労働力なる商品の價を高くし、其の價格を増騰せしむるが、然し利潤を増大せしむるものではない。利潤なるものは主として、正に



此勞働力なる商品の相對的廉價に基く者であるからである。然るに勞働力に對する需要の増進は、同時に又——右に假定せる事情の下に——利子率を高める。それは貨幣資本に對する需要を増大せしめるからである。貨幣資本家が他人に貨幣を貸付ける代りに、自ら産業資本家に轉化したとすれば、彼れが勞働の代價をより高く支拂はねばならぬと云ふ事情は、夫れ自體に於て彼れの利潤を増大するものではなく、寧ろ夫れ丈け彼れの利潤を縮小するものとなるであらう。それにも拘らず、事情の如何に依つて彼れの利潤は増進し得るのである。然し夫れは決して彼れが勞働の代價をより高く支拂ふ結果ではない。此後らの事情は貨幣資本に對する需要を増大する限り、寧ろ利潤率を高むるに充分力あるものである。他の點に於ては有利なる事情の下に、勞銀が何等かの原因に依つて増騰したとすれば、勞銀の斯る増騰は利潤率を低減せしむることとなるであらう。然し斯る勞銀の増騰に依り貨幣資本に對する需要が増大するに比例して、利子率は増進することとなるであらう。

勞働を問題外に置いて考へるならば、オヴァストロインが「資本に對する需要」

と呼ぶ所のものは商品に對する需要に外ならぬ。商品に對する需要が平均以上に上る場合にしろ又は其の供給が平均以下に下る場合にしろ、何づれにしても商品に對する需要は商品の價格を増進せしめるのである。例へば産業資本家又は商人が従前一百磅なる代價を支拂つてゐたその同じ商品量に就て、一百五十磅を支拂ざるを得なくなつたとすれば、彼等は一百磅借受くれば良い所を一百五十磅借受けねばならず、斯くして利子率五パーセントなる場合五磅なる利子を支拂へば良い所を七磅半支拂はねばならぬこととなるであらう。借受資本の量増大するが故に、彼等の支拂ふべき利子量は増大を來たすに至るであらう。

オヴァストロイン君の全企圖は、貸付資本の利害と産業資本の利害とは同一のものであると説かんとする點に存する。然るに彼れの銀行條例は、正に此兩利害の差異をば、貨幣資本の爲めに利用せんとするに基けるものである。

商品供給が平均以下に低減せる場合、商品需要は従前以上の貨幣資本を吸収する者でないこと云ふ事は可能である。此場合には商品の總價値に就て、同一の貨幣額、恐らく又より、小なる貨幣額が支拂はれねばならぬ。然し同一の貨幣額を以て



得らるゝ使用價值の量はより小となるのである。斯る場合、貸付貨幣資本に對する需要は従前と異なることなく、随つて利子率は増進を來たさないであらう。尤も商品に對する需要は其の供給に比して増大し、斯くして商品の價格は増騰を見るに至るであらう。貸付資本に對する總需要が増大せざる限り、利子率が影響を受くることは有り得ない。而も此の増大は、上記の假定の下には行はれないのである。

然し又物品の供給が——穀物、棉花等の不作の場合見受けらるゝ如く——平均以下に下ることもあり得る。而して其價格が更らに騰貴するに至るべきことを見込んで投機が營まれ、且つ價格を斯く騰貴せしむる直接手段は供給の一部を暫時市場より除去するに在ると云ふ理由の下に貸付資本に對する需要は増大するを得るのである。然るに購買商品を買賣することなくして其代價を支拂はんが爲、商業上の『手形取引』に依つて貨幣が得られるのである。斯る場合には、貸付資本に對する需要は増大することとなり、商品の市場供給を人爲的に阻止せんとすの此企圖に依つて利子率は増進し得るに至る。此の場合利子率の増進は、商品資

本供給の人爲的節減を言ひ現はすのである。

他方に於て、物品の供給が増大し、其の價格が平均以下に下る結果、其の需要は増大するを得るのである。

此の場合、貸付資本は同一たるを得、甚しきは低減することもあり得る。なぜならば、同一の貨幣額を以てより、多量の商品を有し得るに至るからである。然し一部分は有利なる瞬間を生産上の目的に利用せんとすの意圖に依り、一部分は又將來の價格騰貴に對する豫期に依つて、投機的の在荷準備が生ずると云ふこともあり得るであらう。斯る場合、貸付資本に對する需要は増大するを得べく、かくて利子率の増進は生産資本の要素の過剩的在荷準備の上になさるゝ投資を言ひ現はすものとなるであらう。我々は此場合單に商品資本の需要供給に依つて影響する如き、貸付資本に對する需要のみを考察するに止める。産業循環の諸段階に於ける再生産行程の變動的状態が如何に貸付資本の供給に影響するかは、曩に説明せる通りである。利子の市場率は資本（貸付資本）の需要供給に依つて決定されると云ふ平凡な命題を、オヴァーストーンは狡猾にも、貸付資本をば資本一般と同



一視する彼れ自身の假定と混淆し、かくして彼れは高利貸業を唯一の資本家に轉化せしめ、又高利貸業者の資本を唯一の資本に轉化せしめんとしてゐる。

逼迫期に於ては、貸付資本に對する需要は即ち支拂要具に對する需要であつてそれ以外の何物でもない。それは決して、購買要具としての貨幣に對する需要ではないのである。此の場合、現實的資本（生産資本及び商品資本）が過多なる拂底なるとに論なく、利子率は極めて増進するを得る。商人及び生産者が佳良なる擔保を提供し得る限り、支拂要具に對する需要は貨幣への兌換に對する需要たるに過ぎぬ。而して彼等が斯る擔保を提供し得ざる限り、換言すれば、支拂要具なるものは其の前貸に依つて單に貨幣形態を受くるのみでなく、又自己に缺如せる支拂上の等價——如何なる形態のものにせよ——をも受くる限り、支拂要具に對する需要は即ち貨幣資本に對する需要である。是れ、今日一般に行はるゝ學說の兩面が恐慌の判斷に就て當を得ても居り得ても居らぬ點なのである。即ち、單に支拂要具の缺乏が存するに過ぎぬと主張する人々は、善意なる擔保の所有者のみを念頭に置く人々か、又は有らゆる破産詐欺者をば紙券に依つて、支拂能力ある羣

固な資本家たらしむるは銀行の義務であり、權能であると信ずる愚人かの何づれかである。又單に資本の缺乏が存するに過ぎぬと主張する人々は、字義に拘泥するのみの人々——斯る時期には、過剩輸入及び過剩生産の結果、不換資本が多量に存するから——か、然らずんば營業上もはや他人の資本を受くること能はず、而して自己の損失せる資本を償ふべく銀行の助力を要求する以上に、尙自ら詐僞を續行するの能力を與ふべきことを銀行に要求すると云ふ事情の下に實際置かれてゐる信用詐僞師等のことのみを云爲する人々かの何づれかである。

貨幣が價値の獨立せる形態として商品に對立すると云ふこと、換言すれば、交換價値なるものは貨幣に於て獨立の形態を受くべきであること、換言すれば、資本制生産の基礎である。而して此事たる、一定の商品をして其價値に依り他の總ての商品を秤量する所の素材たらしめ、かくして正に此商品をば他の有らゆる商品に對立せる普遍的商品即ち絕對的商品たらしむることによつてのみ可能たるのである。これは——就中、他の物を以て多量の貨幣に代用する所の資本制的に發達せる諸國民に就て云へば——二個の點に於て、即ち一方には信用取引に依り、他方に



は信用貨幣に依つて明かとなるべきである。信用が萎縮し或は全く存在せざるに至る逼迫期に於ては、貨幣は突然、唯一の支拂要具及び價値の眞の存在として絶對的に商品と對立し來たるのである。斯くて商品の價値は一般に低減を來たし商品に貨幣に換言すれば商品自身の純幻想的形態に轉化することは困難となり甚しきは不可能となる。第二に又、信用貨幣その者は自己の名目價値に相當せる額の現實的貨幣を絶對的に代表する限りに於てのみ貨幣たるに過ぎぬ。金の流出すると共に、信用貨幣の兌換換言すれば、現實的の金と信用貨幣との一致は疑はしくなつて來る。そこで此兌換の條件を鞏固たらしむべく、強制方策たる利子率の引上げ等が行はれるやうになる。これは貨幣に關する虚偽の學說に基く虚偽の立法に依つて、多かれ少なかれ極端に強行され、貨幣取引業者たるオザアストン及び其一味の人々の利害打算に依つて國民の上に強要され得るものであるが然し其基礎は生産方法その者の基礎と共に與へられてゐるものである。信用貨幣の價値低減（其單に想像上のみの價値低減は暫く措き）は、一切の現存關係を震撼するであらう。斯くして商品の價値は其の貨幣に於ける幻想的な獨立せる

存在を鞏固ならしむべく、犠牲に供せらるるのである。貨幣價値として見れば、商品の價値なるものは總じて貨幣が確保されてゐる間のみ確保されるものである。即ち數百萬磅の貨幣の爲に幾百萬磅の商品が犠牲に供せられねばならぬ。これは資本制生産の下に於ては避けられぬ所であつて、資本制生産の美點の一を成すものであるが、資本制以前の生産法に於ては行はれざることである。蓋し資本制以前の生産方法が依つて運動する所の狹隘なる基礎上に於ては、信用も信用貨幣も發達するを得ないからである。勞働の社會的性質が商品の貨幣存在たる資格に於て、隨つて現實的生産の外部に於ける物として現はれる限り、現實的恐慌から獨立せるもの、又は夫れを甚だしからしむるものとしての何づれより見ても、貨幣恐慌は避け難いのである。他方に於て、一銀行は其信用が動搖せざる限り、斯る場合信用貨幣を増大することに依つて恐慌を緩和し、信用貨幣を縮小することに依つて恐慌を甚だしからしむることは明かである。國內の生産が適當に組織されてゐる限り、金屬なるものは實際の所たゞ、國際的貿易の均衡が一瞬時攪亂されたる場合にのみ、此貿易の殘高計算に要するものなることは、近世産業の一切の歴史



が示す所である。國內に於ては最早何等の金屬貨幣をも必要とするものでないことは、謂ゆる國立銀行が極端な場合に達着する毎に唯一の救助具として繰る所の正金支拂停止が之れを證明する通りである。

二人の個人に就て云ふ場合、雙方が其相互の取引に於て互ひに支拂殘高を有すると説くは滑稽な事であらう。彼等が相互に債務者であり債権者であるとするれば、彼等の請求權が互に均衡を保たざる場合、其殘高に就て一方が他方の債務者たるべきは明かである。一國民と他國民との間に於ては決してさうではない。而して此さうでないこと云ふ事實は、異なる國民間の貿易殘高は結局平均に歸すべきであるに拘らず、支拂殘高は一方の國民にとり順であり又は逆であるを得ると云ふ命題を通して、有らゆる經濟學者に承認されてゐる。支拂殘高なるものは一定期間に滿期となるべき貿易殘高であると云ふ點に於て、貿易殘高と異なるものである。所で恐慌のなす所は、支拂殘高と貿易殘高との差を一の短期間に凝集せしめると云ふ事である。恐慌の襲來を蒙り、随つて今や支拂期日に當面しつゝある國民の裡に展開する所の一定事情——此事情が既に斯くの如き清算期の收縮を

伴ふのである。其事情とは即ち、第一に貴金屬の放出、次に委託商品の捨賣り、更らに捨賣りの目的を以て、又は國內に於て貨幣前貸を受けんと目的を以てする商品の輸出、並に利子率の増進、信用の解除、有價證券の下落、外國有價證券の捨賣り、斯くの如き價值低減せる有價證券に放下せんと目的に依る外國資本の牽引、最後に多額の請求權を清算せしむる破産等これである。同時に尙、恐慌の襲來せる國に向けて屢々金屬が送り出される。なぜならば其國宛ての爲替は不確實であつて、支拂は金屬を以てするが最も確實であるからである。加ふるに亞細亞に就て云へば、有らゆる資本制國民は大抵みな同時に、其直接又は間接の債務者であること云ふ事情も存してゐる。斯くの如き種々なる事情が相手の國民に充分の作用を及ぼすや否や、此國民も亦金又は銀の輸出に、略して言へば支拂期日に達着するものと、而して此同じ現象は反覆するのである。

商業上の信用に於ては、正金價格より區別せるものとしての信用價格たる資格に於ける利子なるものは、手形が通常以上に長期の通用を有する限りに於てのみ商品價格中に入るのであつて、然らざる場合には斯くするものではない。而して



此事たる、各人は一方の手を以て此信用を受け、他方の手を以て夫れを與へると云ふ事實に依つて説明されるのである。「これは予の経験とは一致しない」。然し此場合考慮に入る方面より觀たる、斯る形態の割引は、右の如き商業上の信用に依つて調節されるものではなく、貨幣市場に依つて調節されるのである。

利率を決定する所の、貨幣資本の需要供給なるものが——オヴァーストーンの主張する如く——現實的資本の需要供給と一致するものとすれば、我々の考察すべき商品の異なるに従ひ、或は同一の商品に就て云へば、其段階の異なる（原料たるか、半製品たるか、完製品たるか）に準じて、利率は同時に低歩でもあれば高歩でもあらねばならぬであらう。一八四四年、英蘭銀行の利率は四パーセント（一月より九月に至る間）乃至二パーセント半及三パーセント（十一月より年末に至る間）であつたが、一八四五年一月より十月に至る間には二パーセント半、二パーセント四分の三、三パーセント等、同年十月以後に於ては三パーセント乃至五パーセントとなつた。フェリアオルレアonz織に使用する棉花の平均価格は、一八四四年には一斤に付き六片四分の一、一八四五年には四片八分の七であつた。

ヴァプールの市の棉花在品高は、一八四四年三月三日には六十二萬七千四十二捆、一八四五年三月三日には七十七萬三千八百捆であつた。棉花の價格低廉なる事實より推して考ふるに、一八四五年に於ける利率は低歩なるべき筈であつた。而して實際また同年の大部分を通じて、夫れは低歩であつたのである。然し綿絲より判断すれば、それは高歩でなければならなかつたのである。なぜならば、價格は相對的に高く、而して利潤は絕對的に高かつたからである。一八四五年、一斤に付き四片の棉花より四片の紡績費用を以て四十番手二號ミュール機撚絲を製出することが出来た。即ち此絲は、紡績業者にとつて一斤に付き八片の費用を要した譯であるが、一八四五年九月及十月、彼れは之れを十片半若しくは十一片半で販賣することが出来た。（後に掲ぐるウキリーの供述を見よ）。

此の全問題は左の考察に依つて解決し得るのである。——

貨幣貸付者なるものが存在せず、其代り貸付資本家が機械、原料等を所有して、之れを今日家屋に就てなす如く、みづから斯る物件の一部を所有せる産業資本家に貸付くる（貸貸する）ものとすれば、貸付資本の需要供給は資本一般の需要供給



に等しいと云ふことになるであらう。(尤も此資本の需要供給なる言葉は不條理である。産業資本家又は商人から觀れば、商品は其資本の一形態である。然し彼等は決して、夫れ自體としての資本を要求するものではなく、常にたゞ夫れ自體としての此特殊商品を要求するに過ぎぬ。彼等は此商品が彼等の資本の循環中に演ずべき役割とは關係なく、之れを商品——穀物又は棉花の如き——として購買し其代價を支拂ふのである)。斯くの如き事情の下に、貸付資本の供給なるものは産業資本家に對する生産要素の供給、商人に對する商品の供給と等しきものとなるであらう。されど此場合、貸付者と借受者との間に行はるゝ利潤の分割は先づ此の資本が如何なる程度まで借受けられ、如何なる程度まで夫れを充用する人の所有に屬するか、の比例の如何によつて、全く左右さるゝものであることは明かである。

ウエグエリン君に依れば(「一八五七年の銀行條例」、利子率なるものは、「不使用資本の量」に依つて決定さるゝものであつて、(第二五二號)「放下を求めつつある不使用資本量の指標たるに過ぎぬ」のである(第二七一號)。後に至り、此

の不使用資本は「浮動資本」を意味するものとなる(第四八五號)。而して彼れの謂ふ浮動資本とは、「英蘭銀行券及び國內に存する他の流通要具(例へば、地方諸銀行發行の銀行券及び國內に存する鑄貨)」を意味する。「……予は又浮動資本の中に銀行の準備金をも包含せしむるものなり」(第五〇二及五〇三號)。彼れは後に又、地金ちがね金をも此中に含めてゐる(第五〇三號)。かくて此ウエグエリンは「予等「英蘭銀行」が事實に於て不使用資本の大部分を保有する」時、英蘭銀行は利子率の上に大影響を及ぼすと述べてゐる(第一一九八號)。然るに、曩に掲げたオヴアストリン君の供述に依れば、英蘭銀行は「何等の資本場」でもないのである。更らにウエグエリンは言ふ。——「予の觀る所に依れば、割引率なるものは國內に存する不使用資本の量に依つて調節せられ、不使用資本の量は英蘭銀行の準備金——事實上金屬準備たる——に依つて代表せらる。故に退藏金屬減ずるに至らば、國內に於ける不使用資本の量も亦減じ、其の結果、殘存量の價値は増進するに至る」(第一二五八號)と。ジョン・スチュアート・ミルは曰く(第一一〇二號)

「英蘭銀行は其の銀行營業部の支拂能力を保持せんが爲、全力を盡して同部の準



備金を充實すべく餘儀なくせらる。かくて同銀行は金の流出生ずるを知るや否や、其準備金を鞏固にし、而して割引を制限するか有價證券を販賣するか何づれかの舉に出でざるべからず」と。單に銀行營業部のみが問題たる限り、準備金なるものは預金に對する準備金たるに過ぎぬ。オヴァストーンに依れば、銀行營業部は「自動的なる」銀行券發行に顧慮する所なく、銀行業者としてののみ行動すべきである。されど現實的逼迫の行はるゝ時期に於ては、英蘭銀行は其銀行營業部の準備金——銀行券のみより成る——より獨立して退職金屬に鋭く著眼する。而して同銀行は自ら破産せざらんとする限り、此の退職金屬を有さねばならぬのである。蓋し退職金屬の縮小するに比例して、銀行券準備も亦縮小するに至るからである。而して何人も、オヴァストーン君——一八四四年の銀行條例に依つて斯く賢明に此事實を處理せる——以上に之れを熟知する筈はないのである。

### 第三十三章 信用制度の下に於ける流通要具

「流通速度の大なる調節器は即ち信用である。之れ貨幣市場に於ける甚しき逼迫が、何故充實せる流通と一致するを常とするかを證明するものである」(匿名著「通貨問題論評」第六五頁)。此主張は二様の意義に解せられる。即ち一方に於て、流通要具を節約せしむる一切の方法は、信用に基くものである。然し他方に例へば五百磅なる銀行券に就て考察せよ。Aなる人が本日一の手形の支拂として此銀行券をBなる人に與へ、Bは本日中に其取引銀行業者の手に之れを預入する。而して此銀行業者は又、本日中に之れを以てCなる人の爲に一の手形を割引し、Cは更らに之れを其取引銀行に支拂ひ、同銀行は又更らに夫れを手形仲買人に前貸するものとし、以下これに準ず。此の場合、銀行券が流通する速度、換言すれば購買又は支拂に役立つ速度は、それが預金なる形態を以て絶えず或一人の手に歸還し、更らに貸付金なる形態を以て絶えず他の人の手に移轉しゆく速度に依つて媒介される。



流通要具を單に節約すると云ふことに就て云へば、それは手形交換所の裡に、換言すれば、満期諸手形の單なる交換と云ふ事實、並に貨幣が先づ殘高のみを清算すべき支拂要具として作用すると云ふ事實の裡に、最も發達せるものとして現はれる。されど斯る爲替手形の存在は又それ自身、産業資本家及び商人が相互に與ふる信用に立脚するものであつて、此信用が減ずれば、爲替手形殊に長期なる爲替手形の數も減じ、隨つて斯る清算方法の效力も亦減ずることとなる。即ち此節約は取引中より貨幣を除去することを意味し、且つ全く貨幣が支拂要具として盡す機能に基くものであり、此機能は又信用に基くのである。而して斯る節約は（支拂を集中せしむるに就ての多かれ少なかれ發達せる技術は暫く措き）單に二種あり得るのみである。即ち爲替手形又は小切手に依つて代表さるゝ相互請求權なるものは、一方の人の帳簿面から他方の人の帳簿面に請求權を移轉せしむるに止まる同一銀行業者に依つて清算されるか、然らずんば異なる銀行業者が交互に清算を行ふかの何づれかである（十一）。

（十一）の銀行券が流通内に止まれる平均日數。

年	五磅券	十磅券	二十乃至一百磅券	二百乃至五百磅券	一千磅券
一九〇八	?	二二六	二〇九	三一	二二
一九〇九	一四八	一三七	一一一	一八	一三
一九一〇	七九	七一	三四	一二	八
一九一一年	七〇	五八	二七	九	七

一八五七年の銀行條例報告（第二部、附錄第三〇一—三〇二頁）中に於ける英蘭銀行出納係マールシアルの作製にかゝる表。

八百萬乃至一千万磅の爲替手形が、例へばオーヴェレンドガーネー商會の如き手形仲買人の手に集中すると云ふことは、右の如き清算の規模を地方的に擴大する主要手段の一たりしものである。單なる殘高計算に要する流通要具量がより小となる限り、斯る節約に依つて流通要具の效力は増進するに至るのである。他方に流通要具として通用する貨幣の速度なるもの（これまた流通要具を節約せしむるものである）は、全く賣買の流暢の如何、或は又——支拂が逐次的に貨幣を以てなさるゝ限り——支拂の連鎖の如何に懸る。けれども信用は流通の速度を媒介し増進するものであつて、例へば單一の個貨の原所有者たるAはBより購買



し、BはCより、CはDより、DはEより、EはFより購買するものと假定し、かくして一方の人の手より他方の人の手への此個貨の移轉が單に現實の賣買のみに依つて媒介さるゝ者とするれば、斯る個貨は五回の流通をなし得るに過ぎず、長期間——信用の力に依らざる單なる流通要具として——各人の手に停留するものとなる。然るに、BはAより支拂はれたる貨幣を自己の取引銀行業者の手に預入し、此銀行業者は之れをCに對する手形割引に發行し、而してCは之れを以てDより購買し、Dは之れを其取引銀行業者の手に預入し、此銀行業者は又Eに貸付け、EはFより購買すると云ふことになれば、單なる流通要具（購買要具）としての其速度でさへ數回の信用取引に依つて媒介さるゝこととなる。即ち夫れは、Bが其の取引銀行業者に對してなす預金、此銀行業者がCに對してなす割引、Dが其取引銀行業者に對してなす預金、此銀行業者がEに對してなす割引に依り、換言すれば四回の信用取引に依つて媒介されるのである。斯る信用取引なくんば、同一の個貨は一定期間に引續き五回の購買を媒介するに至らなかつたであらう。要するに同一の個貨が現實的賣買の媒介なく、預金及び割引に依つて其所有者の手を換へたと云ふ

事實こそ、この場合、現實的諸取引の系列中に行はれたる其個貨の所有者變換を速進せるものである。

同一の銀行券が種々異なる銀行業者の手に於ける預金を形成し得ることは、既に説明せる通りである。同様に又此銀行券は、同一の銀行業者の手に於ける種々異なる預金を形成し得る。彼れはAの預入せる銀行券を以てBの手形を割引し、而してBはCに支拂ひ、Cは此の同じ銀行券をば其發行者たる同じ銀行業者の手に預入する。

流通の速度及支拂の節約が一定し居るものと假定すれば、現實に於て流通する貨幣量は商品の價格と取引の量とに依つて決定される。之れは單純なる貨幣流通を考察する際（第一卷、第三章、第二節）既に論證せる所である。之れと同一の法則は又、銀行券流通の場合にも行はれる。

左の表は公衆の手に存する英蘭銀行券（五乃至十磅券、二十乃至一百磅券、及び二百乃至一千磅なる高額の銀行券）の各年に於ける平均額、並に此各銀行券が總



流通中に占むる百分率を示す。表中の金額は一千磅を單位とし、千以下の數位は削除せるものである。

年	五乃至十磅券	百分率	二十磅乃至	百分率	二十磅乃至	百分率	總計
八	九八三九	四五・〇	六一六一	二八・二	五八五六	二六・八	二一八五六
八	一〇六九九	四七・三	六三九三	二八・二	五五四一	二四・五	二二六五三
八	一〇五六五	五一・〇	五九一〇	二八・五	四二三四	二〇・五	二〇七〇九
八	一〇六二八	五三・六	五七〇六	二八・九	三四五九	一七・五	一九七九三
八	一〇六八〇	五四・四	五六四五	二八・七	三三二四	一六・九	一九六四八
八	一〇六五九	五四・七	五五六七	二八・六	三二四一	一六・七	一九四六七

年	五乃至十磅券	百分率	二十磅乃至	百分率	二十磅乃至	百分率	總計
八	九二六三	四五・七	五七三五	二八・三	五二五三	二六・〇	二〇二四一
八	九六九八	四六・九	六〇八二	二九・三	四九四二	二八・六	二〇七二三
八	九九一八	四八・九	五七七一	二八・五	四五九〇	二二・六	二〇二八六
八	九五九一	五〇・一	五四九八	二八・七	四〇六六	二一・二	一九一五五
八	八七三二	四八・三	五〇四六	二七・九	四三〇七	二一・八	一八〇八五
八	八六九二	四七・二	五二三四	二八・五	四七七七	二四・三	一八四〇三
八	九一六四	四七・二	五五八七	二八・八	四六四六	二四・〇	一九三九八
八	九三六二	四八・八	五五五四	二八・五	四五五七	二三・四	一九四七三

〔一八五八年の銀行條例〕別丁第一頁乃至第二頁。即ち一八四四年より一八五七年に至る流通銀行券の總額は、積極的に減少したのである。然るに輸出入に依つて示さるゝ商取引は、二倍以上に増大したのであつた。右の表の示す如く、五磅乃至十磅なる小額の銀行券は一八四四年には九百二十六萬三千磅であつたが一八五七年には一千六十五萬九千磅に増大した。而して此の増大は、當時に於ける金流通の斯く顯著なる増殖と同時にに行はれたのである。反對に二百乃至一千磅なる高額の銀行券は、一八五二年には五百八十六萬五千磅であつたが、一八五七年には三百二十四萬一千磅に減少した。即ち二百五十萬磅以上の減少を見たのである。之れは左の如く説明されてゐる。——「一八五四年六月八日、倫敦に於ける私營銀行業者等は株式諸銀行をして手形交換所の設立に關與せしめ、程なく最終交換所は英蘭銀行内に設立せられたり。日々の差額は、各銀行が英蘭銀行内に保有せる帳簿面に之れを移轉する事に依つて清算さるゝに至れり。斯る制度の實施に依り、従前諸銀行が其交互計算高の清算に使用せる高額の銀行券は不用に歸することゝなれり。」〔一八五八年の銀行條例〕別丁第五頁。



卸賣業に於ける貨幣の使用が如何に小なる最低限度に節減されたかに就ては本書第一卷第三章第一〇三註に再録せる表を比較せよ。此表は小賣業者が其有ゆる種類の商品在荷全部を購買し得る所のかの倫敦商會中の最大なるものに屬するモリソン・ディロン商會に依つて銀行委員に提供されたものである。

ウキリアム・ニューマーチが一八五七年の銀行條例委員の面前に爲せる供述(第一七四一號)に依れば、更に他の事情たるベニイ郵税、鐵道、電信等、略言すれば交通機關の改善も亦流通要具の節約に貢献した。斯くて英吉利は今や、従前と殆ど同額の流通銀行券を以て、従前に五倍乃至六倍する取引を爲し得るに至つたのである。而して之れは又、十磅以上の銀行券が流通内より引上げられたと云ふ事實に基くこと顯著であると主張されてゐる。此の事實たる、彼れの目には左の事實に對する自然的な一説明として映ずる。それは即ち、右の如き銀行券の外に又一磅銀行券も流通してゐる所の蘇格蘭及愛蘭に於ては、銀行券流通高が約三一パーセントの増大を來たしたと云ふ事實是である(第一七四七號)。英吉利聯合王國に於ける銀行券——一磅券をも含む——の流通總額は三千九百萬磅(第一七四九

號)・金流通は七千萬磅である(一七五〇號)と云はれてゐる。蘇格蘭に於ける銀行券流通高は、一八三四年には三百十二萬磅、一八四四年には三百二萬磅、一八五四年には四百五萬磅であつた(第一七五二號)。

此の事實のみに依るも既に、流通銀行券が常に金と交換し得るものである限り其數を増大せしむるは決して銀行券發行銀行の權内に屬するものでない事が明かである。「不換銀行券は、此場合全く考慮に入らない。蓋し不換銀行券なるものは、例へば現在露西亞に行はるゝ如く、事實上國家の信用に依つて支持さるゝ所に於てのみ普遍的流通要具たり得るに過ぎぬからである。斯る場合には、此銀行券は本書第一卷第三章。「鑄貨。價值表章」なる題下に説明せる、國家の發行にかゝる不換紙幣の法則に支配されるのである。——F.E.」

流通銀行券の量は取引の要求に左右さるゝものであつて、過剰の銀行券は何づれも即時其發行者の手に歸還し來たるのである。英吉利に於ては、ひとり英蘭銀行券のみが法定流通要具として一般に通用するものであるから、地方諸銀行の發行にかゝる銀行券の些々たる、地方的限界を出てざる流通は、此の場合等閑に附し



得るのであるし。

英蘭銀行總裁ニ―ツ君は、一八五八年の銀行條例委員に對し供述して言ふ。――第九四七號（問）「如何なる方策を執るも公衆の手に存する銀行券の額は不變にして、約二千萬磅に止まると貴下は言はれたるが、果して然るや？」答「公衆の要する額は平時約二千萬磅なるが如く思はる。而して此は、周期的に反覆する一年内の一定時期に於て、一百万乃至一百万五十萬磅の増大を見るものなり。より多額の銀行券を要する場合には、予の既に述べたる如く公衆は常に英蘭銀行より之れを受け得る者なり。」――第九四八號「恐慌の繼續中、公衆は貴下が銀行券の額を節減するを同意せんとするものに非ずと貴下は言はれたるが、願くば其理由を示されたし。」答「恐慌期に於ては、公衆は銀行券を確保すべき充分の實力を保存するものゝ如く見ゆ。而して英蘭銀行にして何等かの債務を有する限り、公衆は此債務に基き同銀行より銀行券を受け得ること論を俟たず。」――第九四九號「依是觀之、公衆は常に約二千萬磅の英蘭銀行券を要するものゝ如く思はるゝが、果して然るや？」答「公衆の手に存する二千萬磅――そは變動するものにして、或時

は一千八百五十萬磅、或時は一千九百萬磅、或時は又二千萬磅等となる。而も其平均は一千九百萬乃至二千萬磅なりと云ふを得べし。」

商業上の窮迫に關する上院委員に對してなせるトマス・トックの供述――（一八四八年より同五七年に至る商業上の窮迫）第三〇九四號「英蘭銀行は公衆の手に存する其發行銀行券の高を任意に増大するの力を有せず。それを節減するの力は之れ有するも、斯くするには極めて強行的なる一操作に依るの外なきなり。」此三十年來ノツチンガム市に於ける銀行業者たりしジェー・シー・ライトは、公衆の要するよりも多額の銀行券を流通せしむるは地方銀行にとつて不可能なるべきを詳述せる後、英蘭銀行に就て左の如く叙べてゐる。（一八四八年より同五七年に至る商業上の窮迫）第二八四四號「予は英蘭銀行が（其銀行券發行上）何等の制限をも有せざることを知る。されど總ての超過通貨量は、預金に移轉し、以て異なる形態を採るに至る。」

之れは蘇格蘭に就ても同様である。蘇格蘭には殆ど紙幣のみ流通してゐる。なぜならば同地に於ては、愛蘭に於けると同様一磅券の流通も許可せられ、且つ



「蘇格蘭人は金を憎む」からである。蘇格蘭に於ける一銀行の重役ケネディは言明して曰く、諸銀行は其の流通券を縮小することすら不可能であると。而して彼れの観る所に依れば、「國內取引の運用に銀行券又は金を要する限り、銀行業者等は、或は其預金者の要求に基き、或は又其他の方法に依つて、斯る取引に要する通貨量を供給せざるべからず。……蘇格蘭の諸銀行は其營業を縮小するを得るも銀行券發行に就ては之れを自由に處理すること能はざるなり」(前掲報告、第三四四六—四八號)。ユニオン・バンク・オブ・スコットランドの重役アンダーソンも亦同様に答へてゐる。(前掲報告、第三五七八號)——「銀行券を相互に「蘇格蘭の諸銀行が」交換する制度は、個々銀行側に於ける銀行券の過剰發行を防止するものなるか？」答「然り、されど吾人は銀行券の交換、「之れは實際のところ、右の目的とは何等關係する所なきものであるが、然し各銀行の發行券が蘇格蘭全地に互つて流通するの能力を確保するものなることは確かである」以上に有效なる一手段を有す。而して此手段たる、蘇格蘭に於て銀行計算を保持するの一般的慣習となり居るものなり。即ち幾許にても貨幣を有する人は各また何等かの銀行に計

算を有するものにして、直接自己の要せざる一切の貨幣を日々此銀行に拂込むものとす。かくして各營業日の終末にいたり、各人の懷中に携帯さるゝ以外の貨幣は、悉く銀行の手に集中するに至る。」

之れは愛蘭に就ても同様である。同委員に對する、愛蘭銀行總裁マクドンネル及び愛蘭地方銀行重役ムーレーの供述を見よ。

銀行券の流通は英蘭銀行の意志より獨立せる者であると同様に、又同銀行の金庫内に存する金準備——銀行券の兌換を保證する所の——の状態よりも獨立せるものである。「一八四六年九月十八日に於ける英蘭銀行券の流通高は二千九十九萬磅、其の金屬準備は一千六百二十七萬三千磅であつた。一八四七年四月五日に至り、流通高は二千八十一萬五千磅となり、金屬準備は一千二十四萬六千磅となつた。即ち六百萬磅の貴金屬が輸出されたに拘らず、通貨は毫も收縮しなかつたのである」(ジェー・デー・キニア著「恐慌と通貨」倫敦、一八四七年刊、第五頁)。然し之れは今日英蘭に専ら行はるゝ事情の下にのみ通用する事であつて、それもただ、銀行券發行及び金屬準備に就て立法が別個の規定を與へざる限り、於てのみ



である。

故に流通貨幣——銀行券及び金——の量に影響を及ぼすのは、ひとり營業その者の要求のみである。此場合先づ考慮に入るは、一般的營業狀態の如何に拘りなく各年内に反覆さるゝ——即ち過ぐる二十年來『流通は或月には高く、或月には低く、又或月には中位を占めたる』(ニューマーチの供述、『一八五七年の銀行條例』第一六五〇號) 如く——周期的動搖である。

斯くて毎年八月、數百萬磅の貨幣——大抵は金貨——は、農作物の費用を支拂ふべく英蘭銀行の手から國內の流通に移動した。是れについては主として勞銀の支拂が問題であつた故、英蘭に於ては此目的の爲に銀行券を要することより少なかつたのである。右の貨幣は年末迄には又同銀行の手に回流し來たることゝなつた。蘇格蘭に於ては、磅金貨の代りに殆んど磅紙幣のみ存して居た。隨つて同地に於ては、右に應當せる場合——而も年に二回、即ち五月と十一月——に、流通銀行券は三百萬磅から四百萬磅に擴大した。而して十四日後には既に回流が生じて、それは一ヶ月内に殆んど完成したのである(アンダーソンの供述、前掲報告、第三

三五九五——三六〇〇號)。

英蘭銀行券の流通は又四分の一年期毎に一時的の動搖を受ける。それは四分の一年期毎に、『配當』即ち國債の利子が支拂はるゝ結果である。是れに依つて銀行券は最初流通より引上げられ、然る後公衆の手に配分され、應て又同銀行の手に回流し來たるのである。ウエグエリンの供述(『一八五七年の銀行條例』第三八號)に依れば、斯くして生ずる銀行券流通の動搖は二百五十萬磅である。反對に、惡評高きオーゲレンドガーネー商會のチャブマン君は、これが貨幣市場の上に齟らしたる擾亂を遙か高額に計算してゐる。『配當を支拂はんが爲、六百萬乃至七百萬磅を租税として流通内より引上ぐるものとせば、其間この貨幣額を提供する何者かの存するを要す』(『一八五七年の銀行條例』第五一九六號)。

流通要具の額の上に生ずる動搖にして、産業循環の種々なる段階に應當するものになると、之れよりも遙かに顯著にして且つ持續的である。これに就ては、上記商會の今一人の組合員たる嚴肅なクエーカー宗徒サミュエル・ガーネーの供述(『一八四八年より五七年に至る商業上の窮迫』第二六四五號)を聽かう。——『十



月（一八四七年）未二千八十萬磅の銀行券は公衆の手に存したり。當時貨幣市場に於て銀行券を得るには大なる困難あり。これ一八四四年の銀行條例の規定せる制限あるため銀行券を得ること不可能なるべしとの危惧一般に存したる結果なり。現在「一八四八年三月」に於て公衆の手に存する銀行券の高は……一千七百七十萬磅なり。されど今や商業上何等の警戒も存せざるを以て、此は實際要するよりも遙かに多額のものなり。倫敦に於ける銀行業者又は貨幣取引業者にして、自己の使用し得る以上の者は毫も存せず。——第二六五〇號「商業界並に信用の状態を……同時に考慮せざる限り、英蘭銀行の保管外に屬する……銀行券の高は、流通の實狀を説明するには全く不充分的ものたるなり。——第二六五一號「現在公衆の手に存する通貨額には過剰ありとの吾人の所信は、大なる停滯の現狀に著しく基因するものなり。物價高く營業活潑なりとせば、一千七百七十萬磅の銀行券は不足の感を伴ふべし。」

〔營業狀態が健全にして、なされたる前貸の回流が規則正しく行はれ、隨つて信用に動搖を來たすことなき限り、流通の伸縮は單純に産業資本家及び商人の要求に

左右される。少なくとも英吉利に於ては、金は卸賣業に就いては考慮に入ることなく、而して金の流通は——季節毎に生ずる動搖は暫く措き——長時間に亘り殆んど變化することなき大さと見做し得るものである故、英蘭銀行券の流通は右の如き變動の充分正確なる尺度たるのである。恐慌後の緩慢期に於ては、流通は最も少なく、一般需要の恢復すると共に、流通要具に對する需要も亦大となり、而して此需要は景氣の良好となるにつれて益々増進する。流通要具の量は、過度の緊張及び過剰投機の行はるゝ時期に至つて其絶頂に達する。——其時突如として恐慌が襲來し、昨日まで斯くも充分に存在してゐた銀行券は市場より消滅し、それと共に又、手形の割引者、有價證券を擔保に引受くる貨幣貸付者、商品の購買者等も消滅することとなる。此の時、英蘭銀行の援助が要求される。然し同銀行の力も亦やがて竭き果てる。一八四四年の銀行條例は——全世人が銀行券を熱求し、商品所有者は販賣するを得ずして而も支拂なすを要したる銀行券さへ確保するを得ば如何なる犠牲をも辭せないと云ふ、恰も斯る時期に當り——英蘭銀行をして其銀行券發行を縮小せしめるのである。上記の銀行業者ライトは言ふ。「警戒期中、



銀行業者その他の人々は流通要具を藏蓄するが故に、國內に於ては平時に二倍する通貨量を要するに至る』(前掲報告第二九三〇號)と。

恐慌の襲來後問題となるは、もはや唯支拂要具のみである。されど此支拂要具の到來に就ては、何人も他人を當てにして居り、且つ満期日に果して他人が支拂をなし得るか否かは何人にも知られて居らぬので、市場に存する支拂要具、換言すれば銀行券を目的として全くの驚走が行はるゝこととなる。何人も受け得る限りの銀行券を藏蓄し、かくして銀行券は其最も切要さるゝ日に流通内から消滅するに至るのである。サミュエル・ガーネーの計算せる所に依れば、『一八四八年より五七に至る商業上の窮迫』第一一一六號、一八四七年十月に於ける斯くの如き驚愕の瞬間に藏蓄された銀行券の額は、四百萬乃至五百萬磅に及んだたのことである。——F.E.]

此點に於て、ガーネーの組合員たる前記チャプマンに對してなせる一八五七年の銀行條例委員の審問は特に興味あるものである。以下その主なる内容を摘録する。此審問は、後に及んで始めて攻究すべき他の若干事項にも觸れてゐるのである。

ある。

チャプマン君は左の如く述べてゐる。

第四九六三號「流通の偶々低弱なる時に當り、異常なる貨幣拂底と逼迫とを生ぜしめ得る一資本家(倫敦に存する如き)の權内に貨幣市場が屬する事——予は斯る事實を正當視するものにあらざるを斷言するに憚らず。……此は可能の事なり。……目的を達する上に有效なりと觀れば、一百萬乃至二百萬磅の銀行券をも流通内より引上げ得る資本家は、決して一人に止まるものにあらず。』第四九九五號——大なる一投機師は、一百萬乃至二百萬磅の價あるコンソル公債券を賣却し、以つて市場より貨幣を引上げ得るのである。これに類する現象は最近見受けられた所であつて、『それは激烈なる恐慌を醸した』のである。

第四九六七號——かゝる場合、銀行券は不生産的のものたると論を待たない。『而も斯くの如きは、一の大目的に役立つ限り些々たる事に屬す。其の大目的とは即ち株式價格を暴落せしめ、貨幣逼迫を生ぜしむると是れなり。而して斯くするは全く彼れの權内に屬する所なり。』其の一例——或日のこと、株式取引所に大な



る貨幣需要が生じた。何人も其原因を知らなかつた。或人はチャプマンに七パーセントの利子を以て五萬磅の借受を申入れた。チャプマンは喫驚した。彼れの利子率は、それより遙かに低かつたからである。彼れは其貸付を承知した。其後間もなく、同人は再びチャプマン君の許に來たり、更らに七パーセント半の利子を以て五萬磅を借り受け、次いで八パーセントを以て十萬磅を借り受けた。彼れは八パーセント半を以て尙多くを借り受けんとしたのである。茲に於て、流石のチャプマンも不安を感じた。後にいたり、多額の貨幣が突然市場より引上げられたことが明かとなつた。然しチャプマンは言ふ。——「而も予は八パーセントにて互額の貨幣を貸出したり。されどそれ以上の貸付には不安を感じたり。予は之れが果して如何に成り行くべきかを知らざりしが故なり。」一千九百萬乃至二千萬磅の銀行券が殆んど間斷なく公衆の手に存するか、の如く見えたるに拘らず一方には此銀行券中の現實に流通する部分と、他方には使用せられずに準備金として銀行の手に存する部分とは、相互に絶えず著しく變化するものである。此準備金が大であり、隨つて現實に於ける流通が低弱であるとすれば、それは貨幣市場

の立場より觀て、流通充實し貨幣潤澤なることを意味する。若し右の準備金が小であり、隨つて現實に於ける流通が充實してゐるとすれば、貨幣市場は之れを稱して流通は低弱、貨幣は拂底であると云ふ。即ち此場合、不使用貸付資本を代表する貨幣分は小額なのである。産業循環の諸段階より獨立にして、而も公衆の要する通貨額に變化あらしむるとなき、流通の現實的伸縮は、單に技術上の理由にのみ基く者であつて、例へば納税期又は國債利子の支拂期に生ずるものである。納税期に於ては銀行券及び金は通例の程度を超えて英蘭銀行の手に流入しゆき、事實に於て流通を——其需要に顧慮する所なく——收縮せしめるのである。國債の利子が支拂はれる場合には、反對の結果を生ずる。右の第一の場合には、流通要具を得るため、銀行の手より借受が要求され、第二の場合には、私營銀行の準備金が一時増大する結果、その利子率は低減することとなる。之れは流通要具の絶對量とは何等關係するところ無きものであつて、たゞ此流通要具を流通せしむる所の銀行營業商會と關係あるのみである。蓋し斯る商會にとつては、右の行程は貸付資本の貸出として表現され、かくして此の商會は夫れに基づく利潤を收納するから



ある。

第一の場合には、流通要具の一次的轉置が行はるゝに過ぎぬ。而して四分の一年期毎に行はるゝ納税、並に同様四分の一年期毎に行はるゝ國債利子支拂の期日間近かに、低利にて短期貸付をなすことに依り、英蘭銀行は此轉置の平均を料るのである。所て、斯くして發行された過剰の銀行券は先づ、納税に依つて生じた空隙を充たし、次いで間もなく夫れが銀行に償却さるゝ結果、國債利子の支拂に依つて公衆の手に投ぜられた過剰の銀行券が回收さるゝこととなる。

第二の場合には、流通が低弱であるか充實してゐるかと云ふ事は、畢竟つねに、同一量の流通要具が現實的の流通と貸付の要具たる預金とに分割さるゝ比例の差異に外ならぬのである。

他方に於て、英蘭銀行の手に金の流入し來たる結果、それに就て發行せる銀行券の數が増大するに至るとすれば、斯る銀行券は同銀行の外部に於ける割引を助長し、借受金の償却に依つて同銀行の手に回流し來たるのであつて、流通銀行券の總對量は一瞬時増大を見るに過ぎぬこととなる。

營業の擴大（これは價格が相對的に低廉なる場合にも行はれ得るのである）に基いて流通の充實せる場合には、利潤増進し新規の投資増大して貸付資本に對する需要著しくなる結果、利子率は相對的に増騰し得るのである。營業縮小し、或は又信用極めて流暢なる結果、流通が低弱となつた場合には、價格高くとも利子率は低歩たるを得るのである。（ハッパードの所説を見よ）。

流通の絶對量は逼迫期に於いてのみ利子率の上に決定的影響を及ぼすに過ぎぬ。この場合、充實的流通に對する需要は——信用缺乏の結果——退藏資料に對する需要を言ひ現はすに止まるか（貨幣の流通速度、並に同一類面の個々貨が絶えず貸付資本に轉化する速度の減少は暫く措き）、然らずんば、銀行條例施行の停止後若干期間（一八五七年）流通が現實に於て増大せる如く、現存事情の下に現實上より多額の流通要具を要するに至るかの、何づれかの場合が行はれる。前者は一八四七年に見受けられた通りである。此の年、銀行條例は其施行を停止されたのであるが、流通は爲に何等の擴大をも來たさなかつた。而も此停止たる、退藏券を引出して流通内に投入するには充分の力あるものであつた。



右以外の場合には、流通の絶対量は、利子率の上に何等の影響をも及ぼすものではない。蓋し此絶対量は——流通の節約並に速度を不変と假定する限り——第一に商品価格及び取引量に依り（通常之等の要素の一方は他方の作用を無効にするものである）、最後に又信用の状態に依つて決定され（尤も、反對に此信用の状態が右の絶対量に依つて決定されることは決してないのである）、第二に商品價格と利子との間には、何等の必然的聯絡も存しないからである。

銀行制限條例の實施中（一七九七年乃至一八二〇年）、通貨の過剰が生じた。利子率は現金拂の再開以後に於けるよりも常に遙か高歩であつた。後、銀行券の發行が制限され、爲替相場が増騰するにつれて、利子率は暴落を來たしたのである。一八二二年、一八二三年及一八三二年には、一般的流通は低弱であり、利子率も同様に低歩であつた。一八二四年、一八二五年及一八三六年には、流通は充實し、利子率は低歩であつた。金の發見以來、歐洲全土を通じて貨幣流通は擴大し、利子率は増進した。依是觀之、利子率なるものは流通貨幣量の如何に左右されるものではないのである。

流通要具の發行と資本の貸付との區別は、現實的再生産行程に於て最も良く示される。生産の種々なる要素が如何にして相互に交換されるかは、現實的再生産行程を攻究せる際（第二卷、第三篇）すてに見た通りである。例へば可變資本なるものは、之れを物的方面から觀れば、労働者の生活資料——労働自身の生産物の一部——に外ならぬ。然し夫れは貨幣の形を以て、斷片的に労働者の手に支拂はれるのである。資本家は之れを前貸せねばならぬ。然し彼れが前週拂出した舊貨幣を以て、來週再び新たな可變資本を拂出し得るか何うかは、信用制度の組織の如何に著しく左右される。社會的總資本の種々なる成分間、例へば消費資料と消費資料の生産機關との間に行はるゝ交換取引に就ても同様である。其流通に要する貨幣は——我々の既に見た如く——交換當事者の一方又は雙方に依つて前貸されねばならぬ。此貨幣は斯くして流通内に止まり、交換の結了せる後つねに其の前貸者の手に歸還して來る。蓋し彼れは其現實的に使用せる産業資本以上に向これを前貸したからである（第二卷、第二〇章を見よ）。信用制度が發達して貨幣が銀行の手に集中するに至つた場合、之れを前貸する者は即ち——少なく



とも名目上には——銀行である。此前貸は流通内に存する貨幣にのみ關係するものである。信用に依つて流通せしめらるゝものは、前貸通貨であつて前貸資本ではなからず。

チャプマン——第五〇六二號「公衆の手に存する銀行券は極めて多額に上り而して毫も之れを借り受けること能はざる時期存し得るものなり。」恐慌期中にも貨幣は存してゐるが、何人も之れを貸付資本即ち貸付貨幣に轉化せざるやう警戒してゐる。何人も夫れを現實の支拂用として固く保持してゐるのである。

第五〇九九號「農業地方に於ける諸銀行は、其の不使用過剰分をば貴商會及び倫敦に於ける他の諸商會の手に移送するや？」答「然り。」——第五一〇〇號「他方に於て、ランカシャー及ヨークシャー兩州の工場地方は、其營業上の目的を以て貴下より爲替手形の割引を受くるや？」答「然り。」——第五一〇一號「斯くして一定地方の過剰貨幣は、他地方の要求に利用せらるゝや？」答「全く貴言の通りなり。」

チャプマンは言ふ。——諸銀行が其短期間存する過剰貨幣資本をばコンソル

公債券及び藏券の購買に放下すると云ふ習慣は、此貨幣をば何時にても即日要求し得る形で貸出すことが習慣となるに至つて以來最近著しく減少したと。彼れ自身としては、かゝる證券の購買をば其營業上極めて不得策な事と考へてゐる。そこで寧ろ彼れは、其一部が日々満期となる所の佳良なる爲替手形に右の貨幣資本を放下することとなる。斯くして彼れは常に、日々幾許の流用貨幣を豫期すべきかを知り得るのである。「第五〇〇一乃至五〇〇五號」。

輸出の増大ですら、各國殊に信用を興へる國に取つては、多かれ少なかれ國內の貨幣市場に對する需要の増大として表現される。然し之れは、逼迫期に至り始めて斯る事實として感ぜられるのである。輸出の増大する時期に於ては、製造業者等は英國品の委託を受くる輸出商人に對して通常長期手形を取組む（第五一二六號）。——第五一二七號「かゝる手形を絶えず更新すべき合意の存することは、屢々見受らるゝ所にあらざるか？」「チャプマン」答「これ彼等の秘密に附する問題たるなり。吾人は斯る手形を許容せざるべし。……それは確かに行はれ得る事なり。されど予は是れに就て何事も語るを得ず。」——「無邪氣なチャプマン」



第五一二三號「昨一年間のみにも二千萬磅に上りたる如き輸出の大増加生ずとせば、斯る事實は夫れ自體に於て、此輸出を代表する手形の割引をなさんとの目的に出づる資本の大需要を招致するものにあらざるか？」答「確かに然り。」

第五一三〇號「英吉利は其すべての輸出に關し諸外國に信用を與ふるを常とするを以て、斯る事實の繼續する間に、それに相應せる追加資本の吸収を來たすととなるにあらざるか？」答「英吉利は巨額の信用を與ふ。然れどもまた其原料に就きて信用を受く。亞米利加より吾人に振出す手形は六十日拂のもの、其他の諸國より振出すものは九十日拂のものなり。他方に於て吾人は信用を與ふ。而して獨逸に貨物を輸送する場合には、二ヶ月三ヶ月に互る信用を與ふるものなり。」

ウキルソンはチアブマンに問ふて曰く（第五一三一號）、輸入さるべき之等の原料及び植民地製品につき、其積送と同時に英吉利宛ての手形が取組まれなかつたか何うか、又その手形は船荷證券と同時に到着するものでないか何うかと。チアブマンは斯く信ずるものであるが、然し此「商人的」取引に就ては何等知る所なしと答へ、これに就てはより、専門的人々を訊問せられたしと要求してゐる。

——亞米利加への輸出に於ては、「商品は輸送中に象徴さる」と、チアブマンは言つてゐる。此嘆言は畢竟、英吉利の輸出商人は其輸出商品に就き倫敦に存する米國大銀行の一に對して四ヶ月拂の手形を取組み、而して此銀行は亞米利加より其副抵當を受けると云ふことを意味するものである。

第五一三六號「遠隔諸國との取引は、商品の販賣さるゝに至るまで資本の回収を待つ所の商人に依つて營するものにあらざるか？」——「貨物を擔保として前貸を受くることなく、自己所有の資本を放下し得る所の富裕なる商會も多少は存す。されど此貨物は多くの場合、著名なる商會の裏書に依つて前貸貨幣に轉形するものなり。」——第五一三七號「之等の商會は……倫敦、リヴァプール、其他の都市に設立せられたり。」——第五一三八號「故に製造業者が自己所有の貨幣を放下するか、乃至は又倫敦なりリヴァプールなりの商人より前貸を受くるかは、何等の差異なきところにして、いづれにしても英吉利に於てなさるべき前貸は常に存するものなるべし？」答「真に然り。之れが製造業者にとりて關係する所あるは僅少の場合に過ぎず。然し一八四七年には、殆んど總ての場合にさうて



あつた。例へば、マンチエスタに於ける製造品の一取引業者は商品を購入し、倫敦の信用ある一商會を介して之れを積送す。同商會が荷造萬端契約通りに整へることを確むるや、右の取引業者は印度支那其他の國に輸送すべき此商品に就き同商會に對して六ヶ月通用の爲替手形を取組む。然る後、銀行界は來たりて彼れの爲に此手形を割引するなり。かくて彼れは此商品の代價を支拂ふ頃には、すでに手形の割引に依つて貨幣を有するに至る。——第五一三九號「されど此取引業者は今や貨幣を有するとしても、銀行業者は先づ之を彼れに前貸するを要したるなるべし？」答「銀行業者は爲替手形を有す。銀行業者は爲替手形を購買したるなり。彼れは其銀行營業資本をば、斯る形態に、換言すれば商業手形の割引に利用するなり。」〔即ちチアプマンも亦、手形の割引を貨幣の前貸とは見ず商品の購買と見てゐるのである。——F.E.——第五一四〇號「而も是れ常に、倫敦の貨幣市場に對する要求の一部たるものなるべし？」答「疑もなく然り。これ貨幣市場及び英蘭銀行の本質的業務たるなり。英蘭銀行は吾人と同様、進んで斯る手形を得んとするものなり。同銀行は其が佳良投資たることを知ればなり。」—

—第五一四一號「斯くして、輸出營業の増大するに比例し貨幣市場に於ける需要も同様に増大するものなるべし？」答「國內の繁榮が増大するに比例して、吾人〔チアプマン等〕は是れに享與するものなり」——第五一四二號「然らば種々なる投資部面が突然擴大する時、其の自然的結果たるものは即ち利子率の増進なるべきか？」答「其は疑ひを容れざる所なり。」

第五一四三號に於て、チアプマンは「吾人が巨額の輸出を有するに拘らず、尙かく金を要するは眞に解し難き所なり」と言つてゐる。

第五一四四號に於て、尊嚴なるウキルソンは問ふて言ふ。

「吾人が輸入に就て受くる以上に大なる信用をば、輸出に就て與ふるてふことは在り得ざる所なるか？」と。——「予自身としては此點に疑なき能はず。何人に限らず、其印度に輸送すべきマンチエスタ品に就き手形の引受を得んとするに當り、十ヶ月以下の引受を得ることは不可能なるべし。印度より支拂を受くるに先だち、吾人は亞米利加に對し其棉花の代價を支拂ふを要したり。而して是れ正確の事實たるなり。されど其が如何なる影響を有するかは、極めて微妙の問題に



屬す。』——第五一四五號「昨年見受けられたる如く、我が製造品の輸出が二千萬磅に増大せるものとせば、此増量せる貨物を生産すべく、我が原料の輸入は豫め著しく増大するを免れざりしなるべし?」〔此點のみより觀るも、過剰輸出は過剰輸入と一致し、過剰生産は過剰商業と一致するのである。』——答「疑ひもなく然り。我國は極めて多大の貿易差額を支拂ふを免れざりき。換言すれば、當時貿易の差額は我國に於て逆たりしなり。然れども久しき間には結局、對米爲替相場は我國に於て順となるものにして、我國は既に若干期間、亞米利加より多額なる貴金屬の輸送を受けたるなり。』

第五一四八號——ウキルソンは大高利貸業者チャブマンに問ふて曰く、貴下は貴下の高歩なる利子率をば、大なる繁榮と高き利潤率との徴候と解せらるゝや否やと。明かに此阿諛者の素朴に喫驚せるチャブマンは、勿論右の問を肯定してゐる。然し彼れは公明正大に左の一句を附け加へたのである。——「これ以外の他の方法を以てしては如何ともすること能はざる人々あり。彼等は果たすべき債務を有す。彼等は其有利たると否とに論なく、之れを果たさざるべからざるなり。」

然れども若し此高利子率が繼續するものとせば、其は繁榮を徴表するなるべし。』彼等は何づれも、高利子率が又、一八五七年に見受けられたる如く、左の事實を徴表し得るものなることを忘れてゐる。それは即ち、到る處を徘徊しつゝある信用詐偽師どもは國內を不安ならしむるものであると云ふことである。即ち、彼等は高き利子を支拂ひ得るものであり——此利子は他人の懐中より拂ひ出されるからである。但し此利子を支拂ふに當り、彼等は他の總ての人々に對する利子率の決定に關與するのである——而も其間豫期の利潤を以て安樂に生活すると云ふことである。同時に、此事實は又製造業者その他にとつて、事實上極めて有利なる營業を齎らし得るのである。資本の回流は、前貸制度に依つて全く欺瞞的のものとなる。これは又次に掲ぐる叙述を明かにするものである（尤も此叙述たる、英蘭銀行に就ては何等の説明をも要しない。なぜならば、同銀行は利子率高歩なる時他銀行に比し低歩なる割引を與へるからである）。

第五一五六號、チャブマンは言ふ。「吾人は久しきに亙りて高利子率を有するものなるが、斯る時に當り吾人の割引額は今や其最大限度に在りと斷言するを得る



なり。」「チアブマンが斯く云へるは、一八五七年七月二十一日、即ち恐慌襲來に先だつ數ヶ月前のことであつた。——第五一五七號「利子率の低歩なりし一八五二年には、割引額は到底かく大なるを得ざりしなり。』實際のところ、營業は當時尙ほるかに健全であつたからである。

第五一五九號「市場が貨幣を以て充溢し……而して銀行割引率の低歩なる場合には、爲替手形の減少を來たすべし。……一八五二年の状態は全く異なるものなりき。當時に於ける我國の輸出入は、現在に比すれば全く取るに足らざるものなりしなり。』——第五一六一號「割引率の斯く高歩なる結果、我が割引營業は今や一八五四年「此の年、利子率は五パーセント乃至五パーセント半であつた」に於けると同程度に在り。」

チアブマンに對する訊問中もつとも愉快に感ぜられる點は、斯種の人々が事實に於て公衆の貨幣を自己所有の貨幣と見做し、又自己の割引せる爲替手形をば何時にても兌換するの權利を有すと信じてゐることが明かになつた事である。此問答の無邪氣なることは甚だしいものである。大商會の引受けたる爲替手形を

何時にても兌換し得るものとなし、英蘭銀行をして如何なる場合にも手形仲買人等の爲に之れを更らに割引せしむるやう處理するは、立法の義務となる。而も一八五七年に、斯種の三仲買人は約八百萬磅の負債を以て破産したのである。彼等自身の資本は、此負債に比べると極微のものであつた。——第五一七七號「其は畢竟——貴下の觀らるゝ所に依れば——之等の手形「バーリング商會又はロイド商會の引受けたる手形」は、強制的に兌換可能のものたらしめられざるべからず——英蘭銀行券が今や強制的に金に換へられ得ると同様——との謂なるか？」答「斯る手形にして若し割引し得ざるものなりとせば、其は極めて悲しむべき事態たるべしと予は信ずるものなり。これ實に、スミス・ペーン商會又はジョーンズ・ロイド商會の引受手形を有する人は之れを割引する能はざる結果、支拂を停止せざるべからざるに至るて、極めて異常の事態たるなり。——第五一七八號「バーリング商會の引受手形は、其が満期となれる際一定額の貨幣を支拂ふべき義務たるにあらざるか？」答「全く貴言の通りなり。されど斯る義務を引受くるに當り、磅金貨にて支拂をなさざるべからずとは、バーリング商會の——斯くの如き



手形を引受くる總ての商人と同様——夢にも想ひ及ばざる所なり。同商會は手形交換所に於て支拂はんとするものなり。——第五一八〇號「然らば貴下は、何人かをして手形の割引をなさしむることに依り、手形の満期となる以前貨幣を受くるの權を公衆に能ふべき一種の機關を案出せざるべからずと謂はるや？」答「否、引受者側に於ては然らず。然れども貴下の謂はるゝ所が若し、吾人は商業手形を割引せしむる可能を有するを得ずとの點に存するものとせば、吾人は之れが全組織を變革せざるべからず」——第五一八二號「然らば貴下は、英蘭銀行券が金に換へ得るものたらざるべからざると全く同様、其「商業手形」が貨幣に換へ得るものたらざるべからずと信ぜらるゝや？」答「一定事情の下に於ては、確かに斯く信ずるものなり。——第五一八四號「然らば、堅實なること疑ひを容れざる商業手形は、銀行手形と同様如何なる時にも之れを貨幣に換へ得べきものたらしむるやう、通貨制度を按排せざるべからずと、貴下は信ぜらるゝや？」答「予は斯く信ず。——第五八五號「貴下は、英蘭銀行なり他の何人なりをして、法律に依り強制的に斯る手形を兌換せしむべしとまで主張せらるゝものには非ざるべし。」

答「予の言はんとする所は、確かに左の點にまで及ぶものなり。曰く、通貨取締の法律を制定する以上、吾人は内國商業手形が——其堅實適法のものたること疑ひを容れざる限り——兌換し得ざるものとなるの可能を防止すべき策を講ぜざるべからず。——以上は即ち、銀行券の兌換と對比せる商業手形の兌換である。

第五一八九號「國內の貨幣商人は、事實に於て公衆を代表するに過ぎず」とは、チアプマン君が後來、デウィソン事件に關する陪審廷に於て述べた所である。「大都市の詐偽」を見よ。

第五一九六號「公債利子の支拂はるべき各四分の一年期中、吾人が英蘭銀行に頼るは絶対に避け難きところとなる。貴下にして若し、公債利子の支拂を見越し國家の收入中より六百萬乃至七百萬磅を取るものとせば、其間かゝる金額を前貸すべき何人かの存するを必要とす。——[即ち此場合問題たるは、貨幣の供給と云ふことであつて、資本又は貸付資本の供給と云ふことではないのである。]

第五一六九號「我が商業界に就き熟知せる何人も知らざるべからざることは、歳券が販賣不可能となり、東印度會社の債券が全く不用に歸し、最良なる商業手形



も割引不可能となる如き場合に立ち至るとせば、單純なる要求に對して營業上即時慣例の通貨を以て支拂をなさざるべからざる地位にある人々の間に、大なる不安を醸すに至るを免れずとの事實是れなり。而して此は總ての銀行業者に於て見受けらるゝ所なり。これが爲、何人も其準備金を倍増するに至る。試みに、各地方銀行業者——斯る銀行業者は約五百人に上る——が其倫敦の取引先に對し銀行券にて五千磅を送金すべく指圖するを要するに至りたる場合、右の事實が全國に及ぼす影響の如何なるものなるかを見よ。假りに斯かる小額を平均と見做す（其は全く不條理のことなるが）とするも、流通より引上げらるゝ額は二百五十萬磅に當るべし。如何にして此額を補充すべきか？」

他方に於て、貨幣を有する私的資本家等は、如何なる利子に於ても其貨幣を提供するを欲しない。蓋しチアプマンに依れば、彼等は「必要なる場合貨幣を回収し得ることの不確實ならんよりも、寧ろ毫も利子を得ざることを可とする者なり」（第五一九四號）と言ふからである。第五一七三號「吾人の制度は左の如し。吾人は三億萬磅の價值ある債務を有す。此債務たる、何時にても國定鑄貨を以て償

却すべく要求せられ得るものなり。而して我が國定鑄貨を悉く此目的に使用するとするも、尙二千三百萬磅内外を超えざるなり。斯くの如きは、何時にても吾人を連繫状態に投じ得べき一事情たるにあらずや？」さればこそ恐慌期に於ては信用制度は突然貨幣制度に一變することゝなるのである。

恐慌期に際し國內市場に生ずる狼狽を考慮外に置く時、貨幣量が問題たり得るは、それが世界貨幣たる金屬に關係する場合に限るのである。而して正に此點をチアプマンは除外してゐる。彼れはたゞ二千三百萬磅の銀行券に就てのみ語つてゐるのである。

チアプマンは又言ふ。——第五二一八號「貨幣市場（一八四七年四月、後には又十月に於ける）」に攪亂を齎らしたる本來的原因は、同年輸入が非常に増大せるため爲替相場の調節を計るに要したる貨幣量に存すること疑ひを容れず」と。

第一に、世界市場貨幣の斯る準備は當時その最小限度に節減されて居り、第二に此準備金は同時に又、信用貨幣たる銀行券の兌換保證として役立つたのである。かくして此準備金は、二種の異なる機能を結合するに至つた。之等の機能は全く



異なる者ではあるが、然し何づれも貨幣の性質に胚胎するのである。蓋し現実的貨幣は常に世界市場貨幣であり、而して信用貨幣は常に世界市場貨幣に立脚するからである。

一八四四年の銀行條例が施行停止とならなかつたとすれば、一八四七年に「手形交換所は其營業を全うすること不可能」(第五二二一號)であつたらう。

而もチアプマンが眼前に切迫せる恐慌を豫覺せることは、左の叙述に依つて明かである。——第五二三六號「貨幣を得ること極めて困難にして銀行に頼らざるを得ざるに至らしむる一定の貨幣市況(而して現在の狀況は之れを距る遠からざるものなり)あり。」

第五二二九號「吾人が金、土、月曜日(一八四七年十月十九日、二十日及二十二日)に銀行より引出せる貨幣額に就ては、來るべき水曜日に若し爲替手形を回収するを得たりとせば、吾人は非常なる感謝を禁じ得ざりしなるべし。恐慌の終熄後貨幣は即時吾人の手に歸還し來たれり。」——木曜日(十月二十三日)に銀行條例は施行停止となり、斯くして恐慌は終熄を見るに至つたのである。

同時に倫敦に流通せる爲替手形は一億萬乃至一億二千萬磅に上つたと、チアプマンは信じてゐる(第五二七四號)。此中には、州諸所に於ける地方爲替手形は含まれて居らぬのである。

第五二八七號「一八五六年十月、公衆の手に存する銀行券の額は二千一百十五萬五千磅に増大せるに拘らず、貨幣を得るには非常なる困難伴へり。公衆は斯く多額の貨幣を保有し居たれども、吾人は之れを得ること不可能なりしなり。」これ畢竟、イースターン銀行の一時(一八五六年三月)當面せる逼迫に基く不安の結果であつたのである。

第五一九〇——九二號。恐慌一度び終熄するや否や、「利子に依つて利を營む一切の銀行業者は、即時その貨幣を使用し始むるなり。」

第五三〇二號。チアプマンは銀行準備金の減少に伴ふ不安をば、預金に就ての警戒に依つて説明せず、寧ろ右の事實の結果であるとしてゐる。それは即ち、突然多額の貨幣を支拂ふ場合に立ち至り得る總ての人々は、貨幣市場に逼迫の襲來した場合其最後の隠れ場を銀行に求むるの已むなきに至ることを極めて良く心得



て居り、而して「銀行は其保有する準備金至つて少額なる場合には、吾人を迎ふることを喜ばず、寧ろ其反對」であると云ふ事實である。

尙、準備金なるものが、事實上の數量として次第に消滅に歸しゆく趣きを觀察するは愉快な事である。銀行業者等は其時下の營業に要する最小額をば一部分は自己の手に保有し、一部分は英蘭銀行に保管して置く。手形仲買人等は何等の準備金なくして、「國內の遊離銀行券」を保有してゐるのである。而して英蘭銀行は其の預金債務に對し、銀行業者其他の人々の準備金、並に公的預金等を有するに過ぎぬ。英蘭銀行は之等の者を其最低點たる例へば二百萬磅に至らしめるのである。斯くて逼迫期に際し（而して此逼迫は又準備金を減少せしめる。蓋し流出金屬を補ふべく流入し來たる銀行券は、無に歸することを免れないからである）此の全詐偽は右の二百萬磅と云ふ紙券を除けば、金屬準備の外には絶對に何等の準備金をも有せざるものであつて、隨つて金の流出に基き此金屬準備が減少する毎に、恐慌は其勢を加へるのである。

第五三〇六號「手形交換所に於て差額清算をなすに利用すべき貨幣毫も存せ

ずとせば、吾人は互ひに協合して、第一爲替、即ち出納局、スミス・ペーン商會等に對する支拂命令書を以て支拂をなすの外、策のとるべき者なきを知るなり。」——第五三〇七號「即ち、政府若し貴下に流通要具を供給するを得ずとせば、貴下みづから其を造出すべしとの謂なるか？」答「吾人は如何になし得べきか？ 公衆は來たりて吾人の手より流通要具を取去りたり。流通要具は最早存せざるなり。」

——第五三〇八號「然らば、貴下が倫敦に於てなす事は、畢竟、マンチェスターに於て日々なされつゝある所に外ならざるべきか？」答「然り。」

オヴアストーンの資本觀に就きケーレー（アットウッド派に屬するパーミングム人士）より受けたる問に對し、チアプマンの答ふる所は極めて結構である。

即ち第五三一號「一八四七年に襲來せる如き恐慌期に於て要求せらるゝものは貨幣に非ずして資本なりとは、貴下が本委員に對して陳述せられたる所なり。」

答「予は貴言を解するに苦しむ。吾人の取引するは貨幣のみなり。予は貴下の言はるゝ所を解するに苦しむ。」——第五三一六號「貴下の謂はるゝ商業資本なるものが、自己の營業上に有する自己所有の貨幣量を意味するものとし、而して之



れを資本と呼ぶとせば、それは概して、公衆の與ふる「チャプマン一味の仲介によつて」信用に依り自己の取引に運用すべき貨幣の一小部分たるに過ぎざるものなり。」

第五三三九號 「吾人が現金拂を停止するは、富の缺乏せる結果なりや？——斷じて然らず。……吾人は毫も富の缺乏を有せず。然れども吾人は極めて人爲的なる一制度の下に行動するものにして、吾人の流通要具が巨大なる壓倒的需要を受くる時、吾人は此流通要具の確保を妨げらるゝ事情に逢着するを得るなり。これが爲、國內の全商業は不具たるに至るべきか？ 吾人は取引の有らゆる通路を閉塞するに至るべきか？」——第五三三八號 「吾人は現金拂と國內の産業との何れを維持せんとするかとの問を受くるとせば、予は其何れを放棄すべきかを知るなり。」

「逼迫を甚だしからしめ其結果を利用せんとすの意圖を以て」第五三五八號「する、銀行券の退藏に就き、彼れは斯る退藏は容易に行はれ得るものであると言つてゐる。それには、三つの大銀行の力を以てすれば充分であらう。——第五三八三

號「倫敦に於ける諸大商會の事情に通曉せる貴下にして尙、資本家が斯る恐慌に乗じて、犠牲となれる人々の廢墟中より巨額の利潤を得るてふ事實を知らざるの理なかるべし？」答「そは何等の疑ひなき事實なり。」——而して、チャプマン君は結局、「犠牲となれる人々の廢墟中より巨額の利潤を得」んとする企圖に商業上失敗したとは云へ、右の事實に就て我々は彼れの言を信じ得るのである。蓋し其組合員たるガーネーが「營業上の有らゆる變動は、事情に通曉せる人に取りては有利なり」と言へる時、チャプマンは左の如く述べてゐるからである。——「社會の一部は他の部分に就き何等知る處なし。例へば、茲に歐洲大陸に輸出し若しくは其原料を輸入する所の製造業者あり。彼れは地金を取引する他の人に就き何等知る處なきなり」(第五〇四六號)。——かくして、一日、當のガーネー及チャプマン自身が「事情に通曉」せずして不明瞭なる破産を遂ぐると云ふ結果を見たのである。

我々の囊に見た如く、銀行券の發行は如何なる場合にも資本の前貸を意味するとは限らないのである。一八四八年の商業上の窮迫に關する上院委員に對しよ



ツクの與へたる左の供述は、資本前貸なるものは——新たなる銀行券を發行することに依つて銀行が之れをなす場合にも——無條件的に流通券量の増大を意味するものではないと云ふことを證明するに過ぎぬのである。

第三〇九九號『英蘭銀行は銀行券の發行を増大するに至らしめずして、其貸付を著しく擴大するを得べしと貴下は信ぜらるゝや？』答『其を立證すべき幾多の事實手近に存す。最顯著なる實例の一は即ち一八三五年に於ける現象これなり。此の年、英蘭銀行は公衆に對する貸付を増大せんが爲、西印度預金並に東印度會社よりの借受を利用したり。同時に、公衆の手に存する銀行券の額は、事實上幾分の減少を見るに至れり。……一八四七年英蘭銀行に鐵道預金の拂ひ込まれたる當時に於ても、之れと類似の現象見受けられたり。有價證券「割引及び預金に於ける」は約三千萬磅に増大せるに拘らず、公衆の手に存する銀行券の額は何等の顯著なる影響をも蒙らざりしなり。』

されど卸賣業は、銀行券の外に尙その營業上遙かに重要な今一つの流通要具を有してゐる。それは即ち爲替手形である。何處に於ても、又如何なる事情の下

にも、支拂に際し佳良なる爲替手形を受くる事が、常規の營業經過にとつて如何に重要なるかは、チャプマン君の我々に示した通りである。爲替手形が最早佳良でなくなつた場合には、全體如何にすれば宜いのであるか？ 此二種の流通要具は相互に如何なる關係を有することゝなるのであるか？

これに就てギルバートは言ふ。——『銀行券の流通額に對する制限は、通例、爲替手形の流通額を増大せしむるものである。手形には二種ある。商業手形と銀行業者手形と即ち是れてある。……貨幣が拂底を告ぐるに至つた時、貨幣貸付者は言ふ、「予宛てに手形を取組まれたし。さすれば予は其支拂を引受るであらう」と。而して地方銀行業者は、其取引客の爲に手形の割引をなす場合現金を與へず倫敦に於ける其代理人宛ての二十一日拂手形を與へる。斯る手形は流通要具として役立つのである』（ヂータブリュー・ギルバート著『貨幣市場に於ける壓迫原因の研究』第三一頁）<sup>(2)</sup>

ニューマーチは、幾分變更せる形態の下に之れが確證を與へてゐる。（『一八五七年の銀行條例』第一四二六號）。



「流通手形額の變動と流通銀行券の變動との間には、何等の聯絡存するものに非らず。……寧ろ一律的なる唯一の結果は……即ち、割引率の引上げに依つて知らるゝ如き逼迫が貨幣市場に生ずるや否や、手形流通の範圍は顯著なる増大を來たし、反對の場合には反對の結果を生ずること是れなり。」

×されど斯る時期に振出さるゝ手形は、決してギルバートの言ふ如き短期手形のみに限らるゝものではない。其多くは、寧ろ、何等の現實的取引をも代表せず、或は手形を取組まんと目的を以て著手さるゝ取引を代表するのみの融通手形である。此の兩事實に就ては、既に充分實例を擧げた。されば「エコノミスト」誌（ウキルソン）は、斯る手形の確實性をば銀行券の確實性と比較して曰く、「呈示拂の銀行券は、決して過剰となり停滯を見るところはない。なぜならば、其過剰分は交換の目的を以て常に銀行の手に歸還し來たるであらうから。然るに二ヶ月拂の爲替手形は、非常なる過剰發行に遭遇し得るのである。蓋し斯る手形に就ては、夫れが満期となつて、恐らく他の手形に依り代置さるゝことあるに至る迄は、其發行を管理すべき何等の手段も存しないからである。一國民にして將來支拂はるべき手

形の流通の確實性を認めながら、呈示拂紙幣の流通に就いて危懼を抱くと云ふが如きは、到底我々の解し得ざる所である」（「エコノミスト」誌、一八四七年、第五七二頁）。

要するに流通手形の量は銀行券の量と同様、取引上の要求に依つて決定さるゝに過ぎぬのである。一八五〇年代の平常期に於て英吉利聯合王國に流通せる爲替手形は約三億萬磅であつた。外に三千九百萬磅の銀行券が流通してゐた。此の三億萬磅中、倫敦宛てに發行されたものゝみにても一億萬乃至一億二千萬磅に上るのである。

手形流通の範圍は、銀行券流通の範圍の上に何等の影響を及ぼすものでない。それは貨幣逼迫期に於てのみ後者に依り影響されるのである。蓋し斯る逼迫期に於ては、手形の量は増大を來たし、其質は悪化することゝなるのである。最後に恐慌期に於ては、手形流通は全く杜絶する。何人も支拂約束を利用することは出來ぬ。何人も現金拂以外のものを受け容れやうとしないからである。ひとり銀行券のみ——今日に至るまでは少なくとも英吉利に於て——其の流通能力を保



持してゐる。蓋し國民は其總富力を以て、英蘭銀行を支持してゐるからである。

一八五七年には貨幣市場に於ける一大勢力家であつたチャプマン君ですら、左の事實を痛嘆してゐることは、我々の既に見た所である。それは即ち、與へられたる瞬間に全貨幣市場を混亂に陥らしめ、斯くして小貨幣商人等を無残に吸血する程の力ある、數人の大なる貨幣資本家が倫敦に存すると云ふ事實である。彼れと言ふ所に依れば、一百万乃至二百万磅のコンソール公債券を賣却し以て同額の銀行券（同時に又、利用し得べき貸付資本）を市場より取り去り、斯くして逼迫を甚だしからしめ得る、數頭の斯くの如き大鯨が存してゐることである。同様の詭計に依り逼迫を恐慌に轉ぜしむるには、三つの大銀行の協力を以てすれば充分であらう。

倫敦に於ける最大の資本力は、言ふ迄もなく英蘭銀行である。然し此銀行は半官的位置にあるので、其支配權を斯く亂暴に行使することの出来ぬ立場に置かれてゐる。それにも拘らず、同銀行も亦——殊に一八四四年の銀行條例が實施され

て以來——如何にして利を得べきかの手段方法を充分に心得てゐるのである。

英蘭銀行は一千四百五十五萬三千磅の資本を有し、外に約三百萬磅の『剩餘金』（即ち配當せざる利潤）と、政府の徴收にかゝる、使用當時まで同銀行の手に預入し置くを要すべき租税等一切の貨幣とを支配してゐる。これに尙、其他の預金（平時約三千萬磅）と無保證銀行券との總額を加算するならば、左に掲ぐる「ニューマ」の計算も尙可なりに控え目なることが分るであらう。——『貨幣市場（倫敦の）』に於て間斷なく使用さるゝ貨幣總額が約一億二千萬磅に上るものなるは、手の信ずる所なり。而して此一億二千萬磅中の極めて顯著なる部分、即ち約一五乃至二〇パーセントは、英蘭銀行の支配に屬するものなり」（「一八五七年の銀行條例」第一八八九號）。

英蘭銀行は、其金庫内の金屬準備に依つて保證されざる銀行券を發行する限り、單に流通要具を形成するのみでなく、又同銀行の使用すべき、此無保證券の名目額に相當せる追加資本——空資本であるとは云へ——を形成する所の價值表章を造り出すものであつて、此追加資本は同銀行の手に追加利潤を齎らすのである。



「一八五七年の銀行條例」の中でウキルソンはニューマーチに次の如く問ふてゐる。——第一五六三號「一銀行自身の發行にかゝる銀行券の流通、換言すれば平均して公衆の手に残存する額は、同銀行の現實的資本に對する一追加たるものなり。然らずや？」答「確かに然り。」——第一五六四號「然らば同銀行が此流通に依つて得る一切の利潤は、即ち信用に基く利潤にして、同銀行が現實に於て有する資本に基く所の利潤にはあらざるべし？」答「確かに然り。」

銀行券を發行する私營諸銀行に就ても、勿論同様である。ニューマーチは其答辯（第一八六六乃至六八號）中に、之等の銀行の發行にかゝる有ゆる銀行券の三分の二（残る三分の一は、銀行内の金屬準備に依つて保證されねばならぬ）をば「同額の資本を造出するもの」と見做してゐる。なぜならば、これに相當する額の硬貨が節約されるからである。さればとて銀行業者の利潤は、他の資本家等の利潤以上に大なるを得るものではない。而も彼れが硬貨の斯る國民的節約に依つて利潤を得ると云ふ事實は、動かないのである。國民的節約が私的利潤として現はれると云ふ事實は、ブルジョア經濟學者の心裡に毫も慄動を感ぜしむるもの

ではない。利潤なるものは、總じて國民的勞働の占有を意味するからである。英蘭銀行の發行券は國家の支持に依つてのみ信用を有するものであるが、同銀行は一七九七年より一八一七年に至る間其銀行券をば紙券より貨幣に轉化し、然る後これを國家に貸付くる力を與へられ（國家に依つて）居るが故に、國債の利子なる形態の下に國家隨つて公衆より支拂を受けてゐたのであるが、凡そ是れにも増して狂的な事實が他にあらうか？

銀行は尙他の資本造出手段を有してゐる。同じニューマーチに依れば、地方諸銀行は曩に述べた如く——其の過剰資金（換言すれば英蘭銀行券）を倫敦の手形仲買人等に送致し、其代り彼等から割引手形を受くる習慣を有してゐる。此手形を以て銀行は其取引客に奉仕する。蓋し自己の地方取引客等の取引を彼等自身の附近に知らしめないやうにする爲、彼等から受け取手形を再發行しないと云ふことは、銀行の常則となつてゐるからである。倫敦より受くる斯種の爲替手形は、直接倫敦に於て支拂をなすべき取引客等が倫敦に向けて發行したる銀行自身の爲替を得ることを希望しない場合には、彼等に對して發行されると云ふ目的に



役立つものであるが、尙それ以上に右の爲替手形は地方の支拂清算にも役立つのである。蓋し銀行業者の裏書は、斯る手形に地方的信用を確保するからである。かくして——例へばランカシャー州に於て——地方諸銀行自身の發行にかゝる有らゆる銀行券と英蘭銀行券の顯著なる部分とは、右の手形に依つて流通外へ驅逐されることゝなつた。

以上の説明に依り、我々は、銀行が次の如くにして信用及資本を造り出すことを知るのである。即ち(一)自己の銀行券を發行すること、(二)二十一日以内の通用期間を有する倫敦宛て爲替——而も發行後直に現金を以て發行銀行の手に支拂はるべき——を發行すること、少なくとも當該地方に就ては、第一に且つ本質上、銀行の裏書に依つて信用能力を附與さるゝ割引手形を拂出すこと。

英蘭銀行の勢力は、同銀行が市場利子率を調節すると云ふ事實の裡に現はれてゐる。營業の経過が通例なる時期に於ては、割引率を引上ぐることに依つて、自己の金屬準備よりの適度なる金流出を防止することは、英蘭銀行にとつて不可能であること云ふ場合が生じ得る(十二)。なぜならば、支拂要具に對する需要は、最近三十

年來著しく資本力を加へたる私營銀行、株式銀行、手形仲買人等に依つて充されるからである。右の場合には、英蘭銀行は他の要具を使用せねばならぬ。されど危機に就ては、銀行業者グライン(グライン・ミル・スクーリ商會の)の「一八四八年より同五七年に至る商業上の窮迫」委員に對して言へる所が依然當嵌るのである。——第一七〇八號「國內に大逼迫の行はるゝ時期に於ては、英蘭銀行は利子率を左右するものなり。」——「非常なる逼迫期に於ては……私營銀行又は手形仲買人の割引は比較的制限を受け、英蘭銀行の手に歸するに至るものにして、斯る場合同銀行は市場利子率を確定するの力を有す。」

(十二)一八九四年一月十七日に開かれたユニオン・バンク・オブ・ロンドンの株主總會に於て頭取リッチー君は言ふ。——一八九三年、英蘭銀行は七月に二パーセント半であつた割引率を、八月に至り三パーセント及四パーセントに引上げたが、それでも尙四週間に正四百五十萬磅を損失したので、今度は更らに五パーセントに引上げた。かくして金は回流し來たり、九月に至つて銀行率は四パーセントに引下げられ、十月には更らに三パーセントに引下げらるゝことゝなつた。然し此銀行率は市場に於ては承認されなかつたのである。『銀行率五パーセントとなりし時、市場率は三パーセント半、貨幣率は二パーセント半なりき。銀行率四パーセントに低減せる時、割引率は二パーセント八



分の三、貨幣率は一パーセント四分の三にして、銀行率三パーセントなりし時、割引率は一パーセント半、貨幣率は更らに稍々低歩なりき』(『テリリー・ニュース』誌、一八九四年一月十八日)——F. E.。

勿論、英蘭銀行は國家の保護の下に立ち、國家的特權を有する公設機關なるが故に、私營銀行のなし得る如く自己の有する斯くの如き勢力を假借なく行使することとは出来ぬ。さればこそハッパードも『一八五七年の銀行條例』委員に對して次の如く述べてゐるのである。——第二八四四號『割引率最高歩なる時、英蘭銀行は最安價なる奉仕を與へ、割引率最低歩なる時、仲買人は最安價なる奉仕を與ふるものに非ずや?』答「ハッパード」『それは常に所なるべし。蓋し英蘭銀行は、其競争者のなすと同程度に割引率を引下ぐる事なく、而して割引率最高歩なる場合には、其競争者のなすと同程度に之れを引上ぐることなきが故なり。』

それにも拘らず、逼迫期に際し、英蘭銀行が俗に言ふ如く螺旋を締めるとすれば(即ち既に平均水準を突破せる利子率を尙引上ぐるものとすれば)、それは營業生活上容易ならぬ事件たるのである。『英蘭銀行が螺旋を締めるや否や、外國への

輸出を目的とする一切の購買は停止し、輸出業者等は物價の下落が其極點に達するの時期を待つに至る。蓋し斯る時期に至り始めて彼等は購買するのであつて、其以前に購買することはないからである。されど斯くの如き極點に達する時、相場は既に再び安定に歸する者であつて、此極點に達する以前金は最早輸出されざるに至るのである。輸出を目的とする商品の購買は、恐らく外國に送出せる貨幣の一部を回收し得るであらうが、其來たるは流出を防止すべく餘りに遅いのである』(『ヂー・ダブリン・ギルバート』著『貨幣市場に於ける壓迫原因の研究』倫敦、一八四〇年刊、第三七頁)。「外國爲替相場に依る通貨調節が齎す所の今一つの影響は、恐慌期に際し此調節に依つて異常なる利子率が生ずると云ふ事である」(前掲書、第四〇頁)。——『爲替相場の回復に基く費用は、國內に於ける生産業の負擔に歸する。然るに此行程の繼續中、英蘭銀行の利潤は、同銀行がより小額の貴金屬を以て其營業を繼續する結果、積極的に増大を來たすこととなるのである』(前掲書、第五二頁)。

然るにも馴染のサミュエル・ガーナーは言ふ。——「利子率の斯くの如き大變動



は、銀行業者及び貨幣商人にとりて有利なり。——營業上の有らゆる變動は、事情を熟知せる人にとりて有利なるものなり」と。而してガーネー等は營業上の悲境に對する假借なき搾取の粹を吸み去るに拘らず、英蘭銀行は同一の自由を以て斯く振舞ふを得ない位置にあるのであるが、それでも尙同銀行は全く見事な利潤——營業の一般状態を知悉すべき格別の機會を有する重役諸公の懷中に、ものづから歸しゆく私的利潤は言ふに及ばず——を受けるのである。一八一七年の上院委員に對する現金再始に就ての陳述に依れば、一七九七年より一八一七年に至る全期間を通じて、英蘭銀行の收納せる斯種の利潤は左の額に上つた。

賞與金及増配當	七、四五一、一三六
株主に配當されたる新株	七、二七六、五〇〇
資本増價	一四、五五三、〇〇〇
合計	二九、二八〇、六三六

右は上記十九箇年に於ける一千一百六十四萬二千一百磅なる一資本に對する利潤である（デイー・ハードキャスル著『銀行及び銀行業者』第二版、倫敦、一八四

三年刊第一二〇頁）。同じ原則に従つて、愛蘭銀行——これ又一七九七年に現金拂を停止したる——の總利得を計算すれば、左の結果が得られる。

一八二一年に支拂ふべき報告に依る配當	四、七三六、〇八五
公表賞與金	一、二二五、〇〇〇
増加資産	一、二一四、八〇〇
資本増價	四、一八五、〇〇〇
合計	一一、三六〇、八八五

右は三百萬磅なる一資本に對する利潤である。（前掲書、第一六三頁）。

集中に就て尙も喋々せよ！ 謂ゆる國立銀行並に其周圍の大なる貨幣貸付者及び高利貸業者等を中心とする信用制度こそ實に驚くべき一集中たるのであつて、此制度たる、周期的に産業資本家を破滅せしむる上に尙危険極まる方法を以て現實的生産に干渉する所の信じ難きほどなる一大勢力を斯る寄生階級に附與する。而も此一團たる、生産に就き何等知る所なく、且つ生産に對し全然没交渉なる者である。金融業者及び株式賣買人も亦これに加つたのであつて、一八四四年及



四五年の條例は此一群の勢力が如何に増大せるかを立證するものである。

而も尙、此名譽ある一群が國民的並に國際的生産を搾取するは畢竟、生産及び被搾取者自身の利益の爲に外ならぬと夢想する者ありとすれば、其者は確に、銀行業者の高き道德的尊嚴に關する左の間話に依つて自己の非を覺るであらう。

「銀行なるものは、宗教的道德的の設備である。年少實業家が自己の取引銀行業者の警戒的な反對的な眼に睨まれることを怖れて、喧囂たる放縱な朋輩との交際を思ひ止まつたとは、實に頻々として生ずる所ではないか！ 銀行業者の尊重を受くべく、常に體面を重んずる人と見らるべく、彼れが焦心努力するとは如何ばかりであつたらう！ 銀行業者の聲望は、彼れにとつて其朋輩等の口から出る道德的演説以上の影響ある者である。彼れは銀行業者より嫌疑を買ひ、其結果銀行融通を制限又は取消さるゝに至ることを怖れて、詐偽を働さ若しくは些々たる虚偽の陳述をなすものと疑はれることに戰慄するではないか？ 銀行業者の忠言は彼れにとつて、僧侶の忠言よりも重大なのである」(蘇格蘭の一銀行重役デー・エム・ペル著『株式銀行業の哲理』一八四〇年刊第四六及四七頁)。

### 第三十四章 通貨原理及び一八四四年の英國銀行立法

〔予は曩に公刊せる一書(十三)に於て、商品價格と比較せる貨幣價值に就てのリカルドの學説を攻究した。依つて本書に於ては、極めて必要な點のみを攻究するに止め得るのである。リカルドに依れば、貨幣(金屬)の價值は貨幣に對象化してゐる労働時間に依つて決定される。然し夫れは、貨幣の量が取引商品の量及價格と適當なる均衡を保つ場合に限るのである。貨幣の量が此均衡以上に増大するとすれば、其價值は低落し、商品價格は増騰することとなる。貨幣の量が適當なる均衡以下に減少するとすれば、其價值は増進し、商品價格は低落することとなる。但し之れは、他の事情に變化なきものと見ての話である。〕

(十三)カール・マルクス著『經濟學批判』伯林、一八五九年刊、第一五〇頁以下。

右の第一の場合には、斯様な金の過剰に遭遇した國は價值以下に低落せる金を輸出し、商品を輸入するであらう。又第二の場合には、金は其價值以上に評騰さる



る諸國に流れ行き、價值以下に評騰さるゝ商品は之等の國々から、其標準價格に達し得る他の市場に流れ行くてあらう。斯かる條件の下に、『金それ自體は——鑄貨として觀ても、又地金として觀ても——自己の有するよりも或は大或は小なる金屬價值の價值表章たり得るものであるから、兌換し得べき流通銀行券の如きも同一の運命を免れざることは自明である。銀行券は兌換し得るものであり、隨つて其の現實價值は名目價值と一致するものであるとは云へ、流通貨幣たる金及び銀行券の總量は、それが——上述の理由に基き——流通商品の交換價值及び金の金屬價值に依つて決定さるゝ水準以上に上るか以下に下るかに従つて、或は價值以上に評騰され或は價值以下に評騰され得るのである。……斯る價值低落——それは金に比較しての紙券の價值低落ではなく、金及び紙券總體の、換言すれば一國に於ける流通要具の總量の價值低落である——リカルドの主要發見の一たるものであつて、ロイド・オヴ・アストーンは之れを自己に奉任せしめ、而してサ・ロバート・ピールの立案にかゝる一八四四年及一八四五年の銀行立法の根本的—原則たらしめたのである』（前掲書、第一五五頁）。

マルクスは同じ場所に於て此リカルド説の錯誤を論證してゐるが、それは茲に反覆する必要はない。此場合我々に興味ある一事は、右のピールの銀行條例を口授せる銀行理論家學派に依つて、リカルドの教條が如何様に手入れされたかといふことである。

「十九世紀中に襲來せる商業上の恐慌、就中一八二五年及一八三六年の大恐慌はリカルド貨幣説の上に何等の新發展をも喚び起さなかつたが、然し其新たなる應用を喚び起したことは事實である。斯る恐慌は最早、ヒュームの場合に就て云へば十六世紀及十七世紀に於ける貴金屬の價值低落の如き、或は又リカルドの場合に就て云へば十八世紀中及十九世紀初葉に於ける紙幣の價值低落の如き個々の經濟現象ではなく、ブルジョアの生産行程の有らゆる要素の衝突を爆發せしむる世界市場の大暴風雨——其の起源及防止は、此行程の極めて皮相的抽象的なる部面即ち貨幣流通なる部面の内部に求められてゐた所——であつた。經濟上の天氣豫報者學派の出發點である嚴密に學說上の前提たるものは、實際の所、リカルドは純粹なる金屬流通の法則を發見した者であると云ふ獨斷說に外らなぬ。



かくて此學派に残された任務は、即ち信用並に銀行券の流通をば此法則の支配に従はしむることであつた。

「商業上の恐慌の最も普遍的にして分明なる現象は、商品價格が久しきに亙つて一般的に昂騰せる後、突如として又一般的に低落を來たすと云ふことである。商品價格の一般低落は、有らゆる商品と比較せる相對的貨幣價值の増騰として言ひ現はされ、また商品價格の一般的増騰は貨幣の相對的價值の低落として言ひ現はされ得る。此いづれの表章様式も現象を言ひ現はすのみであつて、説明することはないのである。……措辭の差異に依つて問題は變更さるゝものでないとは、尙獨逸語の措辭を英語に翻譯することに依つて問題が變更さるゝものでないのと同じである。リカルドの貨幣説は時機を得たものであつた。それは重語に、因果關係の外觀を與へるからである。即ち、商品價格の周期的一般低落は何處より來たるかと云へば、相對的貨幣價值の周期的昂騰より來たると云ひ、反對に、商品價格の周期的一般低落は何處より來たるかと云へば、相對的貨幣價值の周期的低落より來たると云ふ。然らば價格の周期的騰落は、其周期的騰落に由來する

と説くのも、同様に當を得たと云ひ得るであらう。……重語の、因果關係への轉化が一度び與へられるとすれば、リカルド説の自餘部分は總て容易に結果し來たるのである。商品價格の昂騰は貨幣價值の低落に基く。然るにリカルドに依れば、貨幣價值の低落なるものは、通貨の過充に、換言すれば、流通貨幣自身並に商品の内在的價值に依つて決定さるゝ水準以上に、流通貨幣の量が増大すると云ふ事實に基く者である。同様に又、商品價格の一般的低落は、通貨過少なるため貨幣價值が其内在的價值以上に増進すると云ふ事實に基く。即ち價格が周期的に或は昂騰し或は低落するは、流通貨幣の量が周期的に或は過多となり或は過少となる結果である。所て若し價格の昂騰は流通貨幣の減少と一致し、價格の低落は流通貨幣の増大と一致すべきことが立證されるとすれば、其場合にも尙、流通商品量の統計上全く立證し得ざる増大又は減少に基き、流通貨幣の量が絕對的にではないとしても相對的には増大又は減少したと主張され得る。リカルドに依れば、價格の斯る一般的動搖は純粹なる金屬流通の場合にも生ずべきものであるが、然し其騰落の交代に依つて平均に歸することは、我々の既に見た通りである。即ち一例を